61-412
1200501274673

始

8.129 8.129

萬國社會學學士院正員
米國政治學社會學學士院會員
文學博士　文學士　建部遯吾著

優生學と社會生活

東京　雄山閣版

昭和七年

61-412
~~60-706~~

目次

緒論　三―一五
一　優生學……三
二　社會生活……五
三　問題……一〇
四　價値……一〇
五　理論と實用との交配……一三
六　大綱……一四

上篇　先天方面＝優生

第一章　人種・民族　一九―六二
一　問題……一九
二　體格……二二
三　性格……二五
四　國語の得失……二七
五　民族の純雜……四六
六　人種競爭……四四

第二章　婚姻　六三―九三

一 亂婚より單婚まで……六二
二 內婚・外婚の得失……七二
三 嫉妬と社交性……八八
四 社會階級と婚姻進化……八一
五 早婚と晩婚……八六

第三章 出生 九四—一一〇
一 胎教……九四
二 母性保護……九六
三 出生保護・奬產……一〇〇
四 制產の合理的極限……一〇五

第四章 人口 一一一—一六三
一 人口增進……一一一
二 人口減衰……一一五
三 人口減衰の因由……一一〇
四 具體的事由……一三一
五 人口政策……一四七
六 國を通じての世界進展……一五九

中篇 後天方面ニ優境 一六七—一八九
第一章 家及び家庭
一 家の五職能……一六八
二 家庭教育の特長……一七六
三 家庭養育の特長……一八〇
四 男女の地位關係……一八一

第二章 學校 一九〇—二一一
一 道德教育と職業教育……一九〇
二 社交的教育……一九五
三 文武合體教育……二〇一
四 偏學校の弊と家庭協働……二〇三
五 夜學校・朝學校……二〇七
六 勞働學校の提唱……二〇七
七 寄宿生活……二〇九

第三章 世間 二一二—二三七
一 各種の機關……二一二
二 各種の設備……二二九

下篇 因緣關係 二四一—二六六
第一章 淫風蕩俗
一 社會的弊害……二四一
二 德教教育による救治……二四五

三　學校管理に於ける救治……二四八
四　禁止政策……二五一
五　制限政策……二五三
六　娼婦の各種……二五六
七　公娼廢止論、實は樓娼廢止論……二五九

第二章　飲酒及び喫煙　二六七—二九七

一　古く汎き飲酒の事實……二六七
二　奬勵主義……二六九
三　防遏主義……二七六
四　防遏の努力……二七九
五　煙草喫用……二八八
六　阿片喫用……二九四

第三章　頽敗俗　二九八—三一〇

一　夜更し……二九八
二　離家生活……三〇一
三　風呂……三〇三
四　避妊・墮胎・殺兒……三〇六
五　宗教惡俗……三〇七
六　政治惡俗……三一〇
七　經濟惡俗……三一五

第四章　戰爭　三一三—三五一

一　戰爭の優生問題……三一三
二　戰爭の起因……三一三
三　戰爭の有形的效果……三一四
四　スポーツ……三一九
五　戰爭の無形的效果……三二六
六　戰爭の進化・國防の生命……三四七

第五章　新聞雜誌　三五二—三六六

一　空氣……三五二
二　心理方面……三五四
三　經營と記者……三六九
四　改良方策……三六二

目次　卷首
小引　卷首
建部遯吾著述目錄　卷尾

優生學と社會生活

建部遯吾著

小引

ユウジェニックス研究の初めて起つたとき、我が國の學界では、人種改善學、人種改良學から、優種學といふ名稱に進んだ。恰も講者は同學諸子と社會學の術語を制定するの調査事業を進めつゝあつた際で、講者が用ゐ來りつゝあつた「優生學」が議定された。幸運にもそれが醫學、理學方面の學者達からも採用され、竟に一定されたのが本書及同列系書の學名である。講者は茲に一種の欣悦と責務とを感ずる。ボジチヴは實理的で、實在、實用、確定、精密、建設、相對の六義を含むと、創唱者が百年前に明白に斷つてまで居るのに、今尙ほ實證的などと陳きに泥み、甚しきは實理を捨てて實證に反るすらあるに對し、殊に理學、醫學の明るい發展を欽するの情に堪へない。學問研究は必ず東西を該れ古今を綜ぶるの概を以て進行せねばならぬ。所で、限られたる字數の範圍で與へられたる問題—優生學と社會生活—を闡明し講述したのが此小著である。一般の讀み物たることを狙ひ、社會の進歩、實地の役に立つことを期し、我が國のお爲めになることを希うた、それが如何許り實現するかは、講者の誠意と讀者の寛容との化合に須つの外ない。

昭和六年新嘗祭の日

講者識す。

緒

論

緒論

一　優生學

優生學を應用する各種各方面の問題を取扱ふに際して、優生學と社會生活との關係を述ぶることが此の小著の任務である。

優生學とは何であるか、社會生活とは何であるか、此の二つの事柄を明かにすることが此の任務の先決問題であるが、優生學に就ては既に他の專門家の周到なる知識を以て充分に之を明かにせられてあることと信ずるが故に、茲には一切是に就て述べることを差控へる。唯だ今日までの優生學の取扱に於て、聊か講者の立場を明かにして置く必要のある一點が殘つて居る、それは廣き意義と狹き意義との優生學で、狹き意義の優生學は優生學を含んで優境學(Euthenics)を含まないが、廣き意義の優生學(Eugenics)は優生學と優境學とを含んで居る。講者の立場は此の廣き意義の優生學

を、此の小著に於いては採つて居るのである。

嚴肅に狹く採れば、優生學は先天的に優等なる人が生れ出づるには如何なる條件が必要であるかを研究するに止まる學科であるが、併し人生の實用から見ると、單純に先天的方面だけを取扱ふのでは、實際完全に優生、卽ち人間改良の目的を完了することが甚だ難かしい。先天の外に之に加へて更に後天の條件をも吟味することが必要である。人間が生れ落ちてからの境遇教化、卽ち自然的の運命ともいふべき境遇と人爲的の差引と謂ふべき教化、此の兩方面を包含する所の後天的事實、後天的條件、之を如何にせば優良なる人間が出來るかといふ趣旨で、學術的には稍〻假りの名稱に近いが、所謂優境學的方面を加味することに依て、優生學の實用的目的が始めて完全に達せらるゝのである。且つ實際上の問題として、右の先天と後天との界をハツキリと一點若くは一線で區切ることは甚だ困難で、且つ勞して餘り益の無い事柄である。故に純粹なる學術的の取扱に於ける概念上の區別としては、嚴肅なる優生學は勿論立派に成立ち得るが、優生學應用の諸問題、殊に社會生活といふが如き、一寸考へても後天的方面を含み、甚だしきは後天的方面の外ないとまでに、粗雜なる常識からは認められ得るが如き、社會生活との關係を取扱ふ場合には、必ず優生學と優境學とを含み、先天事項と後天事項とを併せ含む所の廣義の優生學として論點を進めて行くの外なく、又そこに始めて立派なる實學的意義が充實するのである。

二　社會生活

社會生活といふことに就ては、茲に稍〻詳に、殊に明かにして置くことが必要である。社會生活といふ言葉の如きは、誰れにも解り切つて居るやうに取られ易いが、併し實は餘り能く解つて居らない。

社會生活といふ言葉には三通りの意義がある、其の第一は社會そのものの生活といふこと、其の第二は社會に於ける諸〻の個人共の相互生活關係といふこと、其の第三に社會に於ける諸〻の個人共の各個銘々の生活といふこと、此の三通りの意義が社會生活といふ言葉に含まれて居つて、而して此の三通りは大に其の意義を相異にして居る。就中ボンヤリと普通に社會生活と云ふと、此の第二の意義あ

たりを狙うて、偶まに第三の意義を混じて居り、第一の最も重要なる意義に就ては、殆ど之を夢想だもせぬといふのが常である。故に此の三通りが含まれて居るといふ事を述べた上に、更に其の各〻に就て聊か說明することが必要であり、殊に第一の意義に就て其の必要が最も大である。

全體社會そのものといふ考は、東洋に於ては格別珍らしいものではなかつたが、西洋に於ては今を距る事約百年前に、社會學の鼻祖と稱せらるゝ佛蘭西のオーギユスト・コンドが出てから、稍〻其の考の輪廓が成立つ機運に向うた。其後色々の學者が出て又一進一退の狀態を呈し、今世紀の初に至つて始めて歐米各國の比較的進步せる學者の間に、此の考が稍〻成熟の機運を進めて來た。ソシアルといふ形容詞の外にソシエタル Societal といふ形容詞が新たに出來、ソシアリズム Socialism といふ名詞の外に新たにソシエチズム Societism といふ名詞が新たに出來たのが、其の劃時的の標柱である。それが乃ち社會渾一體の考である。個人々々の社會的の生活とか、社會的の關係とか、社會的の思想とか、社會的の心意とかいふに考が止まつて居つた間が、ソシアルやソシアリズムで滿足して居つた時代で、社會渾一體が獨立して成立するものであるといふ明確なる認識に至つた時代が、ソシエタル、ソシエチズム等の言葉の出現で表はさるゝに至つたのである。

社會はズツと太古の群から混沌たる原始的第一步を始め、家で一たび秩序的判明なる小規模の社會が出來、氏、部で規模が大となりつゝ判明の程度が次第に減じ、茲に人生の制度を加へて部落が出來る事に依て稍〻判明性を取返し、一方自然的血緣關係に賴らず、全然人爲の制度を通じて社會團體を拵へた都市が出來、部落と都市との多數が次第に融合統整を遂げる事に依て、規模も大、秩序も固く、判明にして、且つ安定性を多分に有する大社會、國が出來るに至つたものである。是は社會成立の自然史であるが、斯樣に社會渾一體は生物個體が成立し發達するやうに、矢張原始的の混沌から次第に進化を遂げて、明確なる渾一的存在として次々に成り立ち來り、生物個體の最高位に人類が居るやうに、社會渾一體の最高位に國が位してゐるのである。人類と云うても野蠻人から開明人まで其の範圍に於て樣々の進化的段階があるやうに、國と云うても野蠻國から開明國まで、亦樣々の進化的段階のあることは申すまでもない。偖て「社會生活」といふ言葉が含んで居る第一に

重要なる意義は、此の高等なる個體である所の社會渾一體そのものの生活、そのものの生命と云ふ意義である。國と家の生活、殊に其の生命の問題は實に何よりも重要なる問題で、個人を以て或は家の犧牲となり、或は國の爲めに義勇奉公を完うするといふが如きは、卽ち個人生活に較べて國や家の生活、卽ち第一意義に於ける社會生活が如何に限りなく重大なるものであるかの明かなる事實である。此の意義の社會生活が優生學と如何に關係するかを討究する事は、與へられたる問題の研究叙述に於て最も深き意義を有して居るのである。

社會生活の第二意義は、社會に於ける諸〻の個人共の相互の間に於ける生活關係である。社會に於ける諸〻の個人共は、社會の分子として相互に關係を持ち、又斯樣なる社會生活を營む所から、樣々の相互的影響や因緣や、因果を及ぼし、之が優生學上の事實や理法とどう關係するか、如何なる影響を蒙るかといふ問題も、勿論相當に意義のある事柄で、之を漏す事は出來ない。

更に社會生活の第三意義は、社會の分子たる諸〻の個人々々が銘々にどんな生活を營むか、社會に於ける生活であるから、是も亦社會生活であると斯樣に見る事も、强ち不可能でもなければ不合理でもなく、殊に優生學上の事實や理法が、此の個人生活に如何やうな影響を及ぼすかといふ事を全然見遁しては、「優生學と社會生活」といふ表題の御話を完全にする譯には行かない。實際上の取扱としては、此の第三と第二とは餘り嚴密に區別せずに、一つの表題の下に取扱ふのも却て便利なる事もあるが、「社會生活」といふ言葉の意義を明かにする上に於いては、相互生活關係と各個個人生活とは二つの事柄である事を、先づ理解して掛る事が必要である。

茲に一寸附け加へて述べて置くことは、一體宇宙間に、有機的の個體には三級ある。細胞は下級有機體で、此の下級有機體の無數が成分となつて出來た生物個體が中級有機體であり、下はアミーヴァから上は人に至るまでを含む。偖て此の中級有機體の無數が成分となつて出來た所の有機個體が上級有機體で、其の最上に位するものが卽ち社會であるのである。社會渾一體の考には是から入つて、尙ほ社會は單に有機體であるのみならず、心意あり、人格ある所の高等有機體であるといふ考を確と持つことが大切である。乃ち社會は人格有機體なりとの斷定が、今日までに學界が到着せる尖頂である。

三　問題

「優生學と社會生活」と題して取扱ふ事項は大體二つの大綱を含む、第一は優生學的事實の社會生活に及ぼす効果であり、第二は社會生活の優生學的事實に及ぼす影響である。優生學的理法が示命する所の種々の理想が實現せられて、優生學的事實が相當に成立したといふ場合に於て、それが前節に述べたる三類の社會生活に如何なる効果を及ぼすか、是が此の小著に於いて說かなければならぬ重要なる一方面である。更に社會生活が或は結構なる方向に向つて進み、或は間違つたる方面に迷ひ入るに際して、それが優生學的事實として見らるゝ、各方面の事柄に或は善き、或は惡るい種々の影響を及ぼす、それがどんなものであるかを考察することも、亦此の小著に於いて課せられたる重要なる一方面である。

四　價値

茲に最も重要なる事項が强調せられねばならぬ、それは前節にチラリと觸れたる善い効果惡るい影響といふ、其の善し惡しの判斷の標準卽ち價値に就て、更に其の根本義たる眼目、殊に最大眼目に就てのことである。

動もすると、優生學と單純に云ひ、又之を聽く人々の陷り易いことは、個人が善く生れ、立派に育つて、優れたる個人になるといふだけの範圍に問題が局限されて居るやうに考へることである。併し端的に之を言へば、個人として如何に立派でも、社會渾一體が弱く、小さく、拙く、卑くては、殆ど全然價値が無いと申さなければならぬ。實に個人といふものは抽象の外成立するものでない、絕對に社會を離れて、社會といふ考を入れざる、抽象的なる個人は、單に概念に於いて成立し得るだけである。實際に於ける個人は、社會生活を拔きにして發生することも生活することも出來ぬ。個人生活は直ちに是れ社會生活である。其の個人の方面から觀るに於て、或は第三意義の社會生活、又は第二意義の社會生活である。其の社會の方面から觀るに於いて、個人生活は直ちに是れ第一意義の社會生活の反映たるに外ならぬのである。乃ち社會生活を離れ、社會體を離れて、單純に個人として立派なる個人を拵へ上げるといふことを、若しも優生學が目的とするならば、斯る優生學は成

立し得ぬと申すの外はないのである。此點を明かにする爲に、假りに私は「個人優生學」といふ名稱を、斯る考の學科、若くは學說に對して附ける事が便利と思ふ。乃ち個人優生學は成立し得ずといふことが、茲に重要なる斷定として先づ揭げられねばならぬ、是が優生學と社會生活との考察に於ける最も要めなる第一義である。

若しも社會體が弱さを脫して强くなり、小を脫して大となり、殊に拙さを脫して完成を遂げ、低卑より進んで高尙に至る。此の標準から見て、或は矛盾し、或は沒交涉であるが如き方面に向つて個人が著しき發達を遂げることが計畫せられ、示命せらるゝとすれば、それが卽ち個人優生學の內容を形造るものである。併し斯る個人優生學的事實は、瞬間の成立は可能であるとしても、個人と社會との關係上、個人生活は社會生活以外に成立し得ざるの大原則から、個人優生學的事實は、究竟の存立を遂げ得ずといふ、內存的の理由が確實に存在するのである。優生學上の考察は此點を常に理解に置いて掛らねばならぬのみならず、殊に優生學と社會生活との關係の考察に於いて之が根本的の重要を有することを、簡略ながら茲に緖論に於いて一言して置くのである。

五　理論と實用との交配

以上の如き立場から、此の小著に於いては、餘りに嚴密なる學究的態度で說述を進める事は却て煩冗で此の小著の規模に副はざる弊あるが故に、理論と實用とを適宜に取交ぜて之を配置し、一方には實益の相當に豐富であることを計ると共に、他の一方には亦若干の興趣を離れぬやうにと注意して行くつもりである。

更に此の小著に於いて講者が特に注意を費すことは、單に既に決定せる學理のみならず、今や方に研究せられつゝある重要問題をも取扱ふことは勿論、是から進んで是非とも學者の研究を煩さねばならぬと認めらるべき、今後の研究に値する重要問題をも、大膽に取扱ふつもりである。而して其の問題共の中には、講者の狹き專門的知識では齒の立たぬ問題が多々あるべき譯で、唯だ講者としては其の取扱方、其の解決の方針を若干指示するに止まるべきである。凡そ斯くの如き多少僭越の嫌ひを冒しても、廣汎なる學術研究の分野に對して幾分達觀的態度を執つて取扱の步武を進めるといふことが、講者の專門學的態度として、必ずしも不適當

でないと信ずる次第である。

六　大綱

そこで此の小著の規模、範圍、結構、組織を、茲に大體示すことが適當である。此の小著は本論を上中下の三篇に分け、其の上篇は之を先天方面即ち優生の方面に充て、其の第一章には先づ人種、民族を優生學的事實の方面から觀察して、それが社會生活、殊に第一意義の社會體生活に對して、如何なる關係を有つかの問題を主として考察する。次の章には婚姻といふ社會生活上の大事實が、優生事實との相互關係に於いて如何に現れ來るか、即ち其の利害得失の點を主として考察する。第三の章には出生といふ重大事實、及び之に含まるゝ各種の大問題を取扱ふ。第四章は人口といふ重大事實、重大問題に就て同樣の意義よりする考察を試みる。即ち第一より第四に至る、次第に先天より幾分後天の方へ近くなるの順序で、適當に配列を試むる譯である。

偖て中篇には後天方面即ち優境の方面を取扱ふ。是には第一の章で家、及び家庭を取扱ひ、第二の章で學校を取扱ひ、第三の章で世間を取扱ひ、此の各〻、殊に學校、更に世間といふ項の下では、幾多の細か分けとなるべき事實や機關を網羅して之を取扱ひ、是等が優生學的殊に優境學的實現に、如何なる條件や理法で寄與するかを考察する。

下篇に於いては社會生活と優生學的事實との因緣相關の方面を取扱ふ、即ち優生學的事實が主でもなければ、社會生活が主でもなく、互に因となり緣となつて、之を嚴密に分別する事が困難であり、且つ强て分別を試むる事が實用上却て無意味となるやうな、社會生活上の諸〻の事項を取扱ふのである。其の大きな項だけを擧げれば、風俗、經濟生活、政治生活、宗教、戰爭、新聞雜誌等に涉つて、各種各方面の事實を考察し行くのである。

大體ながら右に述ぶるが如き規模と結構とに於いて「優生學と社會生活」といふ題目に關する、限られたる規模に於ける重要の考察を今から進めて行かう。

上編

先天方面＝優生

第一章　人種・民族

一　問題

人類の地球上に於ける生活分布は、各地方寄々に大小幾多の團體を成し、或は散漫、或は緻密、其の程度は樣々であるが、是等の團體の幾個かに通じて、多少の似寄りを持つて居る人々から成立し、此の似寄々々で人類全體を大別すると、それを相當の數に纏める事が出來る。斯く纏められたる團體共を一つ〳〵見て、且つ之を比較すると、其間に相當ハツキリとした人の種類の違ひが認められる。此の團體として具體的に見た場合に之を名づけて民族と云ひ、それ〴〵の民族に在る其の差異の點を抽象して認める場合に之を人種といふ。「民族」は具體的の名稱で、「人種」は抽象的の名稱であるが、普通の談話に於ては之を混同して申す事が常であり、且又それで大なる差支は無い。

茲に先づ吟味を要する事柄は、人種といふものは一體どんな點を內容とするか、卽ち甲民族と乙民族との違ひを列擧するにはどんな點が擧げらるゝのであるか、是が先づハツキリせぬと、實用的の取扱として「人種」「民族」の意義がハツキリせぬのである。さて是等諸〻の點から、優生學的意義に於て、人種、民族が如何なる影響効果を社會生活の上に投げ掛けるかといふ事が、考察の第一に來る問題でなければならぬ。

更に進んで人種民族の如何を問はず、一つの社會體の內に於て、其の社會體が純一なる民族から成立つて居るか、複雜なる色々の民族共から成立つて居るか、それが社會の繁榮、發達、進步、變遷の上に如何やうに影響するか、是が亦第二の極めて重要なる問題である。

更に人種の、然も民族の對立がある以上、古來今日に至るまで、更に恐らくは將來に通じて人種的感情といふ重大なる事實がある。此の重大なる事實が、優生學的事實に對して如何やうなる影響があるか、又優生學的事實からして、此の大事實の將來に、又は沿革に、如何なる影響があるか、此の感情を中心の事項として、所謂人種問題が昔から今まで、今より將來に至るまで成立し、又は續いて行かうとして居る、此の重大なる事實の考察が亦茲に必要となつて居る。本章に於いては、凡そ是等の問題を順序を立てて取扱うて行かう。

二　體格

人種が社會生活に影響し、殊に社會體の利害得失に効果を及ぼす點は、體格、性格、及び言語の三方面に存する。

體格改良といふ事は、優生先天方面でも、又優境後天方面でも、共に盛んに勸說せらるゝ。併し動もすると其の所謂體格の見解が甚だ狹隘に失して、折角目的と手段との合致から其の論者の希望が完全に實現せられて見た所で、格別歡迎すべき程の成績に至らぬ事が、殆ど從來より現今に及ぶまでの事實である。此の間違を脫却せんが爲めに、先づ能く吟味を周到にする事が必要である。

抑も體格は更に二つの要素から成立つて居る、一つは體形で、今一つは體質である。從來兎角、體格と云へば體形のことと思うて、體質を忽せにしたのである。體

格の最も重要なる點は體質に在るので、古來の英雄豪傑の標本の中、東羅馬皇帝のユスチニアヌスも、シャルマーニュも、稍〻近くナポレオンも、閑の時に二時間眠りさへすれば澤山だといふ體質の持主であつた。例へば斯樣なる體質の持主になる事が、個人として幸福のみならず、國民が或は文、或は武、其の社會國家の爲めに竭す方面の如何に拘らず、其の社會生活に及ぼす好ましき効果は幾許りであらうか、殆ど擧げて數へ切れぬ程であるのである。故に體格改良の問題は、是非とも眼目を體質改良に置かねばならぬ。唯だ體質と體形とは、十のものなら五つ六つとも云ふべき程度に、切つても切れぬ關係があるから、そこで體形の改良は、亦或る程度までの意義のあることとなるのである。然るに從來世俗の考は、何か西洋人の恰好に似寄ることが卽ち體格の改良であると思ひ、西洋のことを知らぬ連中は、役者に似て來るとか、藝者の姿に近づくのが體格改良であると考へる。西洋人、役者、藝者、三種の標準は、兄たり難く弟たり難く、洵に愚劣なる體格改良論である。

人類學者や人種學者は、人種、民族を區別することが主であるから、其の事柄の價値如何に拘らず色々の特色を揭げ出して、其の特色の違ひが卽ち人種の違ひだと言ふ、是は固より其の學科の目的上から無理もないことである。試みに彼等が揭げる體格、實は體形の主要なる事項を見ると

(イ)身長　實は身の丈の外に身體の幅及び厚さを含んで居る。

(ロ)胴と脚との長さの釣合　卽ち胴が長いか脚が長いかの點。

(ハ)身體各部の釣合　附たり容貌の美醜。

(ニ)頭顱の形狀。

(ホ)顏面角。

(ヘ)鼻の形　鷹形、獅子形等色々ある。

(ト)唇の形　締りたる、閉ぢたる、開いたる、はねたる、厚い、薄い等樣々ある。

(チ)眼の色　瞳子に黑、茶、靑、碧等あり、白眼にも色々ある。

(リ)毛色　黑、栗色、茶色、金髮等色々ある。

(ヌ)皮膚の色　人種の區別で白人、黃人、黑人などいふは是れである。

(ル)毛髮の縮れ方、卽ち毛髮の橫斷面の形が眞圓であれば眞直な髮の毛になり、楕圓形であれば波立つた毛髮になり、楕圓が段々押潰されて一文字になれば、キ

リ〳〵と卷く毛髮になる。

(ヲ)脛骨の横斷面の形狀　是にも圓と楕圓とがある。

大體以上の如き特點が數へらるゝ。人種學者や人類學者には、古い塚穴から脛の骨を一本掘出すと、是は多分某々民族の遺骨であらうといふ事を斷定するに貴重な材料である。又旅行中一寸偶まさかに邂逅する異民族に對する場合、毛色や眼色や髮の毛の縮れ抔は、如何にも手取り早く其人の何民族に屬するかを判定するに都合好い材料であるから、彼等が是等の事柄を何れも貴重なる材料として、人種の特點として擧げる事は、無理のない學術的態度である。併し我々優生學的並に社會學的立場から判斷すると、此の十二の事項は相互の間で價値が大に違ふ。右の中で人種の優劣、卽ち社會生活上の價値に關係影響のある事柄と、何等の影響關係のない事柄とがある、前者を實事項と名づけ、後者を虛事項と名づけることが便利である。(イ)から(ホ)までの五點は實事項で、人種の社會生活的優劣に關係のある事柄であり、(ヘ)以下の七つは其點ではどうでもよい、殆ど關係のない事柄である。卽ち甚だ價値の乏しい事柄であるのである。そこで茲に(イ)より(ホ)に至るまで五つの事項に就て、其の價値の如何を吟味して見やう。

(イ)身長及び之に應じて、身幅身厚の大小が如何なる利害得失を與へるかを吟味すると――以下簡單の爲めに單に身長といふ――第一に身長の大なるは、運動量の大を致すといふ點で利益があるが、此の利益は直接に身體を以て運動量を作爲する場合にこそ著しいので、器具機械の利用が進めば進む程此の利益は減る。例へば車を輓いて坂を上るには大男は利益であるが、「燕」とか「富士」とかいふ特急列車の機關手として乘込む場合には横綱を煩しても格別の利益がある譯でない。文化未だ開けざりし古代の生活でも、家の内の些末なること、又は角力をやつたり組討をしたりするやうな、詰らぬことに利益が殘つて居るだけである。

第二には戰鬪であるが、如何にも兵隊の身長が大きければ强さうに見ゆるけれども、是は實は一種の迷信に過ぎない。身長の大なるは戰鬪にも利益は小さく、不利益が大である。其の利益の一つは携帶する武器彈藥の分量を多くすることが出來ることと、二つは行進の速さが身長の平方根に正比例して增大することである。如何にも脚の長い者は走ることが速い、けれども脚の長さが身長に比例する

として、五尺男が五里走る間に六尺男が六里走ることは出來ない。一體歩行は振子の物理學的理法に依て定まるもので、五尺男の二尺五寸の脚と六尺男の三尺の脚とで、其の行進の速さは$\sqrt{5}$と$\sqrt{6}$との割合に過ぎぬので、卽ち五尺男が五里走る間に、六尺男は五里半少し餘だけ走るに過ぎぬのである。身長の大なる兵隊の不利益の一つは射撃の標的となり、又は地物の利用に於ける損失が、身長の平方に正比例することである。乃ち五尺男が敵彈を二十五發受ける間に、六尺男は彈を三十六發受ける、それだけ非常に危險である。先年日露戰役に於て、日本兵の射撃の命中率は確か千分の五十内外であつたのに、露西亞軍のそれは僅に二十そこ〳〵に過ぎないといふ報告があつたやうに記憶する。是は固より日本兵の射撃の精妙なることが、露西亞兵を遙に凌駕して居ることは明かであるが、併し此の凌駕を二十に對する五十と見るのは、日本兵に對する買被り若しくは自惚である、其中から露西亞兵と日本兵との身長の大小から來る分を、差引いて見ることが必要である。假りに日本兵の身長平均が五尺三寸で、露西亞兵の身長平均が五尺八寸であるとすれば、五尺三寸の自乗を五尺八寸の自乗で除した割合、卽ち大體二割方、露西亞兵が餘計日本兵よりも敵彈を受けるから、之を引去ると大體に於て日本兵の命中五十發から二割を引いて、ザッと四十發少し餘分となる。其の殘りで比較して、卽ち大體二十發に對する四十發が、明確に日本兵の射撃の精妙から來る結果と見るべきで、それにしても射撃の精妙は固より我兵の長所であるが、身長の小なるも亦我兵の一つの長所で、大きな身長を有する露西亞兵も亦氣の毒なる者と云はねばならぬ。身長の大なるから來る不利益の二つは、兵隊の身長が大であれば、壕もそれに應じて深く掘らねばならぬ、併しそれだけ亦掘る力も強くなるから、是は相殺するとしても、振子の理由に依て掘鑿作業に時を要することの大なるは避け難く、然もそれが身長の平方根に正比例して增大するのである。不利益の三つは身長が大であれば、糧食、テント其他總て輜重がズッと大きくなる、併し是は輜重運搬力の增大するのと、大體相殺するにしても、脆弱なる道路橋梁の利用力が、輜重が大きく且つ重ければそれだけ減る。例へば一つの進軍道路に於て橋梁が百ある、一噸以上の輜重の通れない橋梁が其中三十あり、二噸以上の輜重の通れない橋梁が五十あるとすれば、輜重が一噸以下であるのと二噸以下であるのとで、橋梁の

利用が百パーセントか七十パーセントかといふ異路目が出來、更に輜重が悉く二噸以上であれば、僅に五十パーセントに止まるといふことになる。

更に有ゆる生活に於て、土地の面積を要することが身長の平方に比例するといふ不利益が、身長の大なる民族には必然に伴うて來る。小男が三疊敷に下宿すると、大男が六疊敷を占領すると、生活上の便利は同じである、人民の身長が無暗に大きくなれば、それだけ國土が縮小したも同然の結果になる。是は聊か廻り遠い話であるが、大局から見れば矢張眞理である。

以上の三つの事柄を綜合すると、身長は、要するに、原始時代には大きいのが有利であつたが、社會が進むに伴れて利益は減じ、不利益は增すことになる。

英吉利から日本が軍艦を買うたり、或は註文して拵へて貰つた場合に、英吉利での試運轉で速さが十五節出たものが、日本へ持つて來ると十四節さへ出ぬと云うて、其の原因を調べて見ると、英吉利の鰊のやうに細長い火夫が石炭を汽罐に投込むのが、汽罐の奥まで屆いて、そこで强大なる火力を出すのに、日本の脚も短く腕も短い火夫が投込むと、汽罐の出戸の邊りで燻つて火力が旺盛にならぬ、其爲めであつたといふ所から、どうも身體の小さいのが甚だ不利益であると、深く且つ長い溜息を漏して居る教育學者があつた。此の教育者先生は、多分靴屋から靴を買ふ場合に、自分の足にシックリとはまる靴が無いと、改めて靴を註文せずに、自分の足に鉋をかけて削る先生であらう。併しそれは三十年前の昔咄で、今日はまさか斯る教育學者や斯る體育論者は、日本國中何處の隅を搜しても二人と無いことであらうと確信する。

（ロ）胴の長いといふ事は、榮養機關が比較的多大の質量を占め、隨つて場所を取つて居るといふ事の明徵で、是は明かに不利益である。例へば同じ噸數の船でも、機關部の爲めに澤山の噸數を占領されゝば、それだけ旅客や荷物を積む噸數が減る、卽ち利用噸數が減るといふ事で、明かに不利益である。我々が講義に出掛ける場合でも、出來るならば參考書を成るべく餘計持つて辨當を手輕にしたい、辨當のみならず、辨當を食うてから消化する所の胴抔は、實は自宅へ置いて行きたいのである。唯だ胴の中に肺臟といふ囊があるので、之が無ければ音を立てゝ講義をする事が出來ぬから、是丈けは宅へ殘して行く譯には行かない、胴の長いといふ事は實

に厄介なものである。次に脚の長いといふ事は、移動卽ち甲の場所から乙の場所へ身體を持つて行く事が輕捷になり、精神の上では意思の活動が敏速になるといふ利益がある。座つて居るのが起つてから書棚へ本を取りに行くよりは、椅子に腰を掛けてそれから直ぐに起つて行く方が便利であるといふ事と、相近き事實である。身長が西洋人より低いと云うて歎くは愚の骨頂であるが、胴が短く脚が長いといふ點で西洋人の恰好になりたいと云ふのは、强ち理由の無い事ではない。

(ハ)身體各部の釣合は多くは虛事項である、卽ち社會生活上に利害得失の無い所のどうでもよい事柄であるけれども、併し其中で、手の長いといふことは活動の大なることを表示し、殊に手工活動に長ずるといふ利益がある。其中更に指の長いのは、手工活動の中でも、技藝活動の發達を表示する事柄である。「手が長い」と言ふと變に聞ゆるが、變な意味に於ける手の長いことを、西洋殊に亞米利加では「指が長い」と言ふ。歐羅巴人が亞米利加に移住すると、何れの國民たるを問はず二つの重要なる特色が出て來る。一つは兒を產まなくなること、今一つは指が長くなることと、是は前世紀の終りから既に顯著なる事實として、學術的に紹介されたる事實である。勿論此の指の長くなるといふのは變な意味で言ふのではない、全く解剖學的の事實である。

是に附けて一般體格上の美醜の問題であるが、美觀の標準は大體に於て人類社會に種々の民族を通じて、略〻共通の標準がある。偶まには嘗て支那では纏足をしてまで足の不自然に小さいのを美としたり、又今日でも阿弗利加其他の黑人の間では、婦人は飽くまで色の黑さを尙び、花嫁を貰ふ場合には、お白粉でなくお黑粉を付けるといふやうな例外はあるが、一體に美觀は男女兩性の愛情を促し進めるに與つて力あり、それが緣で同じ民族の中では、其の民族の繁榮發達を致す事に聊かながら效果があり、又異民族同士の間に婚姻が行はれる場合には、美なる配偶者は美ならざる配偶者に對して優尙なる勢力を得て、以て民族の混淆といふ大事實に於いての優尙民族になるといふ、長く且つ廣い間の効果を致すことである。其外に又外貌の美醜と美術とが相影響することが頗る大である、希臘の美術殊に彫刻の發達は、希臘民族の外貌の美といふことに相當以上の影響を及ぼして居る。

(ニ)一般に開明民族の頭顱は大にして且つ形が整うて居り、野蠻民族のそれは小

にして且つ歪んで居る。又頭顱の形を大別して、縱顱及び横顱とする、縱顱は奥行の大なる頭で、横顱は稍〻奥行の小なる頭である。嘗ては、並に今に至つても、幾分か縱顱民族は優勝で、横顱民族は結局縱顱民族に壓倒されるといふ悲觀說が行はれた。歐洲各國民族の中で俗に云ふゲルマン民族、即ち獨逸人、英吉利人、スカンヂナビヤ人等は縱顱で、ラテン民族即ち伊太利人、西班牙人、佛蘭西人等は横顱であるといふので、殊に其の横顱の人間たる佛蘭西の學者、一例を擧げればモンペリエーの大學教授ラブージ君の如きは、右の悲觀論を特に書を著してまで論述して居つた。併し腦の解剖學を精細に吟味すると、一體腦といふものは一つの大きな袋で、其袋の表面に餡なりバタなり味噌なりを着けて、それを一定の椀の中へ疊み込んだものが腦髓であると見るべきである。其袋が即ち腦の白質で、餡なり、バタなり、味噌なりは、即ち腦の灰白質であり、椀が即ち頭蓋骨である。我々が旅行の際に荷造りをする、鞄に荷物の詰め方に依ては迚も入らずに困る場合に、慣れた友人から入れて貰ふと充分に收まつて、尙ほ綽々として餘裕がある。椀の大小は必ずしも袋の大小ではない、疊み方の如何に依ては小さい椀でも大きな袋が入る、其の上手に疊んだ場合には疊込みが深くなる、此の疊込みが即ち腦の褶襞である。故に縱顱横顱は勿論の事、頭顱の大小も、何も直ちに悲觀する理由は無いのである。若しそれで行けるものならば、體格檢査だけで學科の試驗抔はせずに入學考査をやる方が極めて簡單でなければならぬ。東京府の府立で或る中學校が新設された時に、此校の新任校長は餘りに大なる抱負と、餘りに忠實なる學理崇拜の思想の持主であつた所から、入學考査の大部分を三名の醫學士に委托した、其結果吐出された生徒の中で、其後頗る大成の域に着々進みつゝある者もある。

（ホ）顔面角は能く人類學者人種學者等に依て、大切なる人種の優劣の印とさるゝ事であるが、是は榮養の門たる口腔と、智能の府たる大腦との顔面に於ける發達の露れが比較されたる成績である。）故に茲に注意すべき事が、二つ殘つて居る、即ち大腦の發達の露れである所の額の部分が格別でなくとも、口腔が萎縮して居れば顔面角は大となり、又額の邊が非常に發達して居つても、口腔も亦大に發達して居れば格別顔面角がえらくはならない。是は固より大雜把の申條であるが、併し幾分此點を考慮する必要がないであらうか。此の方面には素人である講者は、自ら

此の研究をやつた譯ではないが、此の注意を缺いた顏面角論は、多少割引を要するものではあるまいかと思ふ。況や人が死んでから骨になつての上ならば、まだ此の弊は稍〻少いにしても、生きて居る人の面相を觀察して、顏面角上の價値を算定するには餘程の注意が入用である。西洋人は種々の關係から齒が非常に退歩して居る、隨つて口腔が頗る萎縮して居る者が多い。日本では大隈老侯の如きは、額が相當以上に發達して居られたが、口腔も亦彼の長廣舌を藏する寶庫の入口であり殿堂であるだけの偉大なる發達を遂げて居られた。かるが故に顏面角は左程大でないか、少くとも顏面角的の面相は、格別偉い者とは見えなかつたのである。顏面角を純理的に云へば、是は自己保存と外部に向つての活動との比例を示すものであるから、根柢に於て顏面角が人種優劣の貴重なる一大事項である事には、何等異議を挿むべき餘地が無い。

以上甚だ簡略であるが、人種の要目たる體格の中で、殊に其の實事項、即ち社會生活上の優劣に關係ある、即ち價値ある事項に就て大體述べた。此外虛事項に至つては噴飯に耐へないものが多い、殊に脛の骨の切口の圓い西洋人は優等で、それが幾分か扁平である所の東洋人や、南洋人や、阿弗利加人は劣等だと云ふが如きに至つては、洵に學術界に於ける飛んだ餘興の一つであると申すの外はない。韓退之が「原道」を書いて「孔子を學ぶ者も亦其の誕を樂んで吾が師も亦嘗て之を師とすと云爾」と言うて居るが、荒誕無稽の「誕」は即ち出鱈目といふ事で、日本の學界も無識なる西洋人の自惚的出鱈目を眞に受けて、鸚鵡返しにやるのみならず、それで以て自ら悲觀即ち自卑自屈の境遇に陷るべき下り坂を駈け下るやうな事をする時代は、少くも昭和元年十二月二十八日――今上陛下朝見式の大詔を拜した當日――以來、日本の津々浦々から疾うに過去つて居る筈である。

三　性格

人種區別の內容は第一に體格を擧げ、體格に次では體質の貴い事を述べ、次に體形の樣々の點を述べたが、體格と相並んで次に考察すべきは性格である。人種に性格の差があるといふ事實は、體格の差があり、殊に體形の差があるといふ事實程顯著なる事柄ではないが、併し大體ながら民族に依て性格に若干の違ひは無い事

はない。尤も體格、其中で體質は勿論、體形にも後天的に幾分の變更が無い譯ではないが、民族の性格は、殊に後天的の境遇等に影響せらるゝ事が遙に大であるから、今更民族の性格の違ひを以て、人種區別の要素とする價値は甚だ薄い。併し樣々の性格事項にも較〻原本的のものがあり、原本的の性格が違ふと、それから出て來る所の派生的性格が彌〻倍〻違つて來る事は必然であるから、人種區別に於ける性格は主に原本的事項に目を着ける、其の主なるものは、

(イ)冒險性に富める民族では、自他社會事物にお互に觸接したり、受けたり授けたりする事が敏速である。

(ロ)怜悧性の民族では、外界の事物乃至外社會の事物を我れに受入れ、又之に順應する事が容易に且つ敏速に行はれる。

(ハ)勤勉性の民族では、社會生活に於ける種々の作業、又其の綜合として、社會文明が自發的に開展發達するに都合が好い。

(ニ)殺伐性の民族では、外社會の事物を我れに受入れるの機會が折角あつても、それを拒み斥け、卽ち此の好い機會を逸失するといふ惡影響を來たす事が屢〻である。

尙又原本的ならずして、派生的なる民族性格上の事項も、其の事項が其の民族に出來た以後、其の社會生活にそれ〴〵の影響のある事は勿論である。餘りに社會生活が都合が惡くて、人々が自ら自分を衞つたり、拔目なく私利私慾を圖らなければならぬやうな境遇に長い間置かれて居る民族は、自然に自衞心並に自利心が過度に發達する事を免れない。秩序ある日本に生活する日本人が支那を旅行して、各部落が牆壁を繞らして手堅い自衞をして居るのに驚き、又西洋を旅行して、應接室に於ける客に供へる卷煙草の函までが、嚴重に錠が掛つてゐるのに辟易させられる抔は、一寸學術上價値ある觀察事項である。

四　國語の得失

人種の內容の第三方面は言語である、言語の特色は其の如何に依て、社會の發達に對して種々の長短得失がある。

民族の言語は約めて之を國語と云ふ、國語の異同は、語彙の大小、語言に於ける語

尾の變化、品詞の配置、性、數、法、格、單語の差異、更に記言に於ける字母の差異、記法、卽ち書き方の異同等である。是等がそれ〴〵樣々に違ふ事に依ての長短得失を、例を擧げて申せば、先づ語尾の變化に富んで居る國語は精密なる思想を表はすに都合よく、品詞の配置が自由であるのは美文に適し、一方それが嚴肅に稍〻窮窟で動きの取れない程定つて居るのは、精密なる思想を表はすに適當する。性、數、法等が精密であるのは、緻密に外界を寫したり、現はしたりするに都合が好い。言葉の數が澤山ある事卽ち語彙の大なるは、民族の思想感情の複雜に發達して居る事を表はし、又語彙の中に或種の言葉が多かつたり、又或種の言葉が乏しかつたりする、卽ち語彙の特徴は、是等の特殊なる思想感情が、或は發達して居つたり、又は發達の足らないといふ特色を表はす。例へば「麗はしい」「美しい」といふやうな形容詞が英語では十四あり、案外に佛蘭西語では四つしか無いといふの例、又獨逸語には哲學的抽象的の言葉が澤山あり、支那の言葉には實踐道德に關する言葉が澤山あり、且昔から博物の名稱を表はす言葉が非常に豐富に發達して居る、是等は皆な其の民族の思想、感情、生活の特色を表現するものである。次に文字、書き方、卽ち記言の長所短所のある事が、社會生活に便不便のある事は言ふまでもない。併し記言は稍〻發達した社會でなければ發生せぬからして、是に依て社會が影響の好し惡しを蒙る事は、幾分か社會の發達せる以後に限るといふ譯合から、語言ほどは重大なる關係を持たない。記言に就て象形文字と音符文字との長所短所抔は、隨分古く言ひ盡されたる問題であるが、唯だ兎角一種の先入主となる獨斷が混り易いので、議論の多い割合に正鵠を得たる議論が多くない。大體音符文字は言語の實用上には不便で、言語の研究上には、便利である、割合に冗長なる文字となる弊が音符文字には伴ひ易い。故に同じく音符文字であつても、露西亞語抔では其の國語に頻りに出て來る所の子音の多い言葉の爲めに、他國に見られぬ、卽ち一般の羅馬字には無い字母が出來て居る。例へば「シチヤー」といふ一つの字母を假りに羅馬字で表はすときには、六つの字母を重ねなければならぬといふが如き不便があるから、露西亞では羅馬字を採用せずに、自國に好都合なる特殊の音符文字を使用して居る。各國それ〴〵の國語の特色を顧みずして、失鱈に己れを枉げて、世界の多數の國々とか、多數の人々とかの眞似をし、附和雷同して恥ぢざるは、半開國民の情けない卑屈

なる事大思想の表現の一つである。縱書横書、左から書き右から書くといふが如きは、卽ち記言に於ける書き方、卽ち記法の違ひで、是等は各〻一長一短がある。西洋でも看板には羅馬字を縱に書き、東洋でも看板には漢字又は假名を横に書く。上から下へ書くのには、下から上へ書くといふ例外は無いが、横書には左から右へ書くと、右から左へ書くとの二た通りが出來て、一定の約束が確立せられない間は、一寸混雜を惹起し易いといふ短所がある。

國語には本來斯樣にそれ〴〵の長短得失がある事、並に亦國語も田畑や庭園のやうに、手入れをせぬと、やがて荒れてしまふといふ弊害が必ず伴ふものである事、此の二つの事由から、國語整理といふ事が極めて重要なる事柄となつて居る。淺薄なる自由放任主義が、一時一切の社會經營の根本方針として行はれた事もあつたやうに、國語整理に對して、何等主義標準の根本的吟味をする事なしに、極めて安直なる放任主義、又は事實追認主義抔が、半開的國語政策には兎角行はれ易い。人が話す通り書きさへすれば、それが一番よいのであるといふが如き獨斷、又は一國の中央政府の所在地、卽ち首府の訛りが標準語として最も結構なものであるとするの獨斷等、色々安直なる獨斷が現に我國に於てもちよく〴〵見られて居る。併し國語政策の根柢は、斷じて斯る安直なる、輕卒なる、輕易なる、獨斷を根據とすべきものではない。行政整理で拓務省を拵へたり廢したりが三十年間に三遍もあつたやうな類で、我國の國語政策も殆ど國語玩弄と謂ふべき狀態に陷つて居る。是は亦餘りに時代離れのして居る呑氣の沙汰で、凡そ今日兎も角も文明國と呼ばれて居るだけの國々では、國語の尊重は、國體の尊重と表となり裏となる重大なる事柄である事を確認して、單純なる言語と云ふよりも、寧ろ國學の重要なる要素としての國語を尊重し、之に對する政策の詮議は、極めて重要なる重々しき大機關を設けて、之が其の任務に當る事となつて居る。一例を擧げるならば、佛蘭西の學士院は五部から成立つて居る、其中の一つが卽ちアカデミー・フランセーズ、卽ち國學院といふものになつて居り、之が重要なる任務として、國語整理の根本機關といふ看板の下居る次第である。覺束ない二三の素人連中を驅集めて、臨時機關といふ看板の下に、國語に恒久的變改を加へんと試むるやうな、途轍もない非望を逞しうするといふが如きは、日本ならでは見られぬ珍風景である。

國語整理を極く大雜把に申せば、對內方針と對外方針とがある。國語整理の對內方針は、一つには國內に種々雜多の言語が行はれ、又言語は一つでも樣々の訛語卽ち訛りが行はるゝときに、之を整一するといふ仕事が其の一つである。偖て二つには、更に進んで國語の種々の短所を次第に更め修め、卽ち更修して社會の發達に好都合なる國語を拵へ上げる事に努める事である。社會が發達すればする程人間の思想が緻密になり、又外界事物も樣々の物が出來て行く、それが皆な國語の中へ入つて來なければならぬ事であるから、發育といふ國語の上での唯だ一つの事柄だけで見ても、世の中が發達すればする程複雜にならなければならぬのは、社會學者を待つまでもなく、常識上左程諒解に困難なる事柄では斷じてない。然るに折角日本の國語が相當の音の種類を有つて居るまでに發達して居るのを、態々ごた混ぜにして區別差別を撤廢するやうな方針で進むとは何たる逆轉思想であらう。「チ」と「シ」「ヅ」と「ズ」「カ」と「クア」といふが如き、東京邊りの頽敗に向ひつゝある言語には、「家族」と「華族」とを區別せぬといふ事にまでなりつゝあるが、それを標準語として日本語を頽敗せしめ、國語を墮落せしめんとするが如きは以ての外である。

其癖、越後人が「イ」と「エ」との區別をせぬといふ事だけは、口を極めて惡口を言ふだけの猪小才は、東京の國語學者でも持合せは極めて豐富にあるのである。若しも新潟に都を遷す場合があつたならば、自今國定教科書には、エド(江戸)の「エ」とイヌ(犬)の「イ」とは區別する事を禁ず抔といふ、文部省の御規則が必ず發布になる事であらう。

國語整理の對外方針は、又大雜把に申して二つある。一つには、自國の國語と或る特定の他國の國語とが混淆したり、入り交つて區別が無くなつたりしては、甚だ自國の存立、發達、乃至國際關係上不便であり、不利益であるといふが如き場合に於いて、其の他國の國語から自國の國語を彌ゝ倍ゝ嚴密に、又ハツキリと區別するやうに、自國の國語の特徴を保存し、且つ發達させる事、是が一つである。次に、或る他の特定の社會に我が國語を弘める事が容易になるやうに、我が國語を若干手入れをして整理して行く事、それが二つである。第一の方針は消極的で、受身的で、國語の獨立といふ事が旗印となり、第二の方針は積極的で、働き掛ける的で、國語の擴衍といふ事が旗印になる。例へば獨逸が文明の上から、兎角佛蘭西文明の旗風の下に靡き從へられてゐる、それが獨逸の國威發達の大なる障害となるといふに氣が

付いて、態々佛蘭西語で通つて居つた言葉を皆な獨逸固有の語根からする言葉にした。例へば切符をビエーといふ佛蘭西語で通つて居つたのを、態々ファールカルテと長たらしいながらも固有の獨逸語に改め、停車場をガール又はスタチオンで通つて居つたのを、態々バーンホーフと組立獨逸語を拵へて嚴重に之を改めた、是等が第一方針の適例である。我國の現行では自國語を捨てて態〻外國語を用ゐ、それも自國語の簡明なるよりは遙に長たらしく、新聞に書くにも場所を餘計取るといふ犧牲を拂つてまで、外國の奴隷的國語變改をやるといふのは、是れ亦五大洲に稀なる國語上の珍風景である。例へば何々館と云うて濟む事を何々ビルディングといふものが澤山出來たさうですね」と言ふ。斯樣にして新聞の字數が益〻殖え、隨つて新聞の活字が益〻小さくなり、隨つて眼病患者が澤山出來、隨つて盲啞學校が繁昌し、隨つて三味線を彈く者が多くなり、隨つて猫が殺され、隨つて鼠が殖え、隨つて箱を嚙ぢられ、隨つて箱屋が繁昌するといふ、一寸東海道中膝栗毛めいた珍風景が、第二十世紀の後半に於ける日本は東京の活畫であらねばならぬ。日本の國語が東洋に向つて弘まるといふ事の爲めには、殊に支那に向つては漢字が用ひられて居る方が都合が好いといふ譯合、其爲めにも國語に於ける漢字の價値を認めるといふ論の如きは、丁度右第二方針の一例である。遠き將來に於ては、國語は西洋にも之を擴衍するといふ時機が來るやうになりたい事は山々であるが、差當り國語の擴衍の方面は、先づ〳〵東洋亞細亞の方面にあると見なければならぬ。國語の擴衍方策を打立てるに際しては、斯る實際上の考も一部分として必ず編入して欲しい事である。

尙ほ國語政策の問題は、各國が極めて重大視せる所で、著者は既に拙著「教政學」(一三二〇頁)で、各論の第五部、一六〇頁を割愛して詳細に之を論じて居る。本著には仔細に其等の問題に入る暇は無いが、之を要するに人種に依て、體格卽ち體質並に體形の一部分に種々の長短得失あるが如く、又本始的性格に種々の長所短所があるが如く、民族の言語卽ち國語にも亦各種の長短得失を含んで居つて、其の如何に依て社會生活上の優劣盛衰が湧いて來る。體格改良に方針を穿(はき)逢へては、取返しの付かぬ失態が出て失敗を釀すが如く、國語整理も極めて愼重なる態度を執つて、

飽くまで正當なる科學的解決の上に立つて進まなければならぬ。

五　民族の純雜

人種の實質的の差點が、斯樣に社會生活上に利害得失がある事の外に、更に人種の形式的差點が亦看過すべからざる重要なる關係がある。形式的差點といふのは、一國社會を組織する民族が單數であるか複數であるか、純一であるか複雜であるかの點である。

先づ一國社會が單一純粹なる民族で成立つて居る場合には、其の社會の統一並に統治に便利が多い。單一なる民族から出來て居る場合では、人種的感情が容易に濃厚となり、それが爲めに社會の結合統一が割合に輙すく出來易い。愛國心も爲に熾んになり易く、宗教思想や、神話や、傳說抔が國民の全體に通じて、傍らから亦愛國心を唆り易い、又民族が純一であると統治の上にも都合が好い。之に反して民族が種々複雜なる場合には、一方の民族に氣に入る事が、他の民族には不平不滿の因になるといふが如き場合が多い。以上は民族の純一なる方が利益であるといふ事柄で、それ以外には案外利益が尠いのである。

一國社會が樣々の民族から成立つて居ると、先づ第一に特色ある社會文明が發生するに都合が好い。希臘の古に於いても、小國土から樣々の民族が居つたので、或は思想、或は生活、具體的には藝術、哲學、政治、經濟等の生活諸方面に於いて、小さなる國の中に樣々の物が並び存し競ひ進んだ。此間に或は自然淘汰が行はれ、又或は融合化成が行はれて、それで割合に短日月の間に立派なる希臘文明が仕上つた、此類の事柄は多くの國々に於て皆な經驗した所である。社會はズツと大きいが、羅馬の大國に於いても、それが歷史に現れ、支那に於いても、亦或る程度まで印度に於いても、それが現れた。我が日本も社會の規模は希臘よりも遙に大きく、他の三國に較べては頗る小さいが、其の割合に種々の文明が進み來る好都合が太古以來あつたといふ事は、我が太古史に現はれてゐるやうに、樣々の民族が各地に居つたといふ事に負ふ所が尠くない。但し印度に於いて最も顯著にあつたやうに、餘りに峻嚴なる階級制が行はれると、折角各種の長所を有する諸々の民族が並び存しても、彼等が競ひ進み、融合調和をしやうとしても出來ぬやうに仕組まれて居る所

から、右の利益は殆ど實際に成績として擧り來らぬといふ弊害がある。

更に複雜なる民族から成つて居る社會では、社會的分業が盛んに興つて來る。社會的分業が興つて來れば、社會全體としての作業の能率が擧る事は申すまでもない。併し斯樣にして擧げられたる作業の効果が果して健全なるものであるか、又實際上餘り願はしきものでないかは別問題である。且又此の成績を致すが爲めには、階級制が峻嚴であつても一向差支は無い。印度に四姓といふ峻嚴なる階級が成立つて居つたが、是が亦峻嚴なる分業を齎らし、婆羅門は何十代經ても婆羅門、刹帝利は何時までも刹帝利といふ狀態であつたから、印度社會全體の文明の進歩に比例して、婆羅門階級を通じての哲學・宗教思想の發達は實に驚くべきものであつた。希臘でも自由市民は政治、及び藝術、哲學等に沒頭し、又一面にはスポーツ抔に年百年中夢中になる事が出來たのは、經濟方面の仕事を擧げて之を奴隷に委ねて居つたからである、卽ち自由市民と奴隷との間に、峻嚴なる階級の區別に伴うて、嚴肅なる分業が行はれて居つたからの事である。我國の平安朝時代に於いて、平安朝廷の貴顯縉紳が文學、和歌、蹴鞠等に沒頭し、日本社會全體の進展に不相應に此の方面の發達の出來たのも、亦同じ因緣からである。但し斯樣に經濟生活と丸で離れたる是等の所謂文化生活事項が、偏よつたる發達をする事は、所謂文化生活事項そのものをして果して健全なる文學、藝術、政治、スポーツたらしめたかどうかは全然別問題で、此點は寧ろ大なる悲觀を以て批判せらるべきものであつたのである。貴族的藝術、貴族的政治、貴族的スポーツと云へば立派であるが、實は遊民的政治・藝術・文學・哲學で、それでは社會は衰へ、民族は墮落するだけの事である。

民族の純一なると複雜なると、以上述べたる如く一國社會の運命に向つて一長一短があるが、一番都合の好いのは複雜なる諸〻の民族共から融合化成して一つの民族となつた其の單一なる民族から組成せられたる國家社會であり、最も强き活氣を有し、立派なる社會文明を作成するに好都合であるのである。一つの社會に樣〻の民族共が居ると、何時までも其儘で居る譯に行かぬ、卽ち是等の民族共の間には必ず入り混つての婚姻が行はれ、段々混血が出來、偖て其の起原、其の由緒は複雜であるが、今では一つの民族であるといふ、其の新民族を完成するといふが運命である。又其の過程の間では、競爭から劣者の淘汰も幾分行はれ、是も亦複雜を

滅じ行く事となる。斯樣なる手續で出來た新民族は、其の要素となつた所の在來の各〻の民族共に較べて、確に優秀なる民族となるといふ事は、近くメンデリズムの法則からも容易に證明せらるゝ事柄である。凡そ斯くの如き複雜なる由緒を有する新民族は、概して精神身體の兩面に於て、强健にして堅實なる發達を、或は遂げ、或は遂ぐべき傾向を備へて居る。我が日本民族は正に其の標本である。併し同じ我々日本民族にしても、時として其の反對事實が亦歷史上極めて顯著に行はれて居つた事がある、其の適例は卽ち平安民族である。平安朝廷二三里の外を出ずず、然も其處にも亦一種の慣習があつて、お互に婚姻する範圍が極めて狹い薄い層に限られて居つた所から、僅に一二百年の間に平安民族は非常に薄弱なるものになつてしまつた。短命になり、氣力が無く、武器を把つて戰ふ抔は思ひも寄らず、感傷的な、物の怪を恐るゝ事甚しく、迷信的で、洵にやくざな者になつてしまつた事は、一部の源氏物語を參考するだけでも、餘りに其の材料の多いのに驚かさるゝ次第である。規模は頗る大であるが、支那の中華人が夷狄といふ連中に惱まされ續けた歷史は、亦是れ餘りに顯著である。平安人に對して東夷といふ連中が、遂に日本帝國の重心を彼等の手に奪ひ去つた事も亦同樣の事實である。東夷は東夷で、平安朝の小天地とは較べものにならぬ廣漠たる地方に呑氣な生活をやつた連中であるが、殊に之を率ゐて其のエリートとなり、其の主腦者、其の統率者となつた連中は、概して都人と東夷との混血兒である。更に古の希臘人、古の羅馬人も、亦斯樣なる新民族の適例を供したが、帝政以後の羅馬人となると、全く平安人の類と墮落したので、羅馬の皇帝の位に登つた連中、乃至雄辯家、政治家、哲人等として有名なる連中は、プロヴィンシアルス卽ち田舍漢であつたのである。アングロサクソンといふ名稱は、英吉利人の別名であるが、此の名前が既にアングル人サクソン人の結合といふことを意味するので、然も實に其外にまだブリトン人、スコット人、ピクト人、海賊生活の北方の勇者たるデーン人、ノルマン人等の血液が悉く融合化成して英吉利人の脈管には流れて居る。英吉利人の世界的優秀なる活動振りは、此點を考察から見遁してはいけない。アングロサクソンに對して、ラテン民族と云はれる國々で見ても、佛蘭西は其の旗頭に立つて居るが、實は佛蘭西人はゴール人、ラテン人、及びゲルマン人の三つの要素から融合化成せる、矢張一つの新民族であるので

ある。佛蘭西人は日常の飲物に於いて葡萄酒の國のやうに一寸見られるが、實は葡萄酒の外に林檎酒及び麥酒がある丁度それが佛蘭西民族の組成分たる三民族を代表する、是が同じラテン人と云はれる伊太利人や西班牙人よりも佛蘭西人が大に長所を持つて居る所以の一つの事由である。其の西班牙人も、古く、或る程度までサラセン人の混血が出來た、此點は葡萄牙も同じ事であつた。其の成績が一時西班牙、葡萄牙を旭日冲天の勢で繁榮せしめ、其後、所謂近世史二三百年以來、次第に衰へて今日に至つて居る、其の事由の一つに、有爲の士が發見植民通商航海の爲めに、國外へドン〳〵出て行つたといふ事がある。此事は丁度前九年後三年の役を中心として、有爲の士が平安社會から遠方へ出て行つてしまつて、平安社會には一層無氣力なる者ばかり殘つたといふ事實と、東西相呼應する事實である。仍て惟ふに北米合衆國の如きは第十五世紀の終りにコロンバスに依て發見せられてから、歐洲各國の種々雜多の民族が入込んでゐる。此國に於て是等の數多の民族共が若し眞に融合化成を遂げるならば、合衆國の將來は實に料られざる偉大さを成すに相違ない、而して今日までに既に此の重要なる作業は相當に進んで居る。

是が北米合衆國が今日までにも相當に偉大なる社會生活を仕遂げた、又仕遂げつつある事の重要なる說明の一つであらう。第十九世紀の晩期から更に此國には東洋人が入込んだ、而して日本人が隨分數多く入込んだが、憫むべき北米合衆國人は、是等をも更に融合調和するといふ大抱負の持合せだけはツイ無かつたものと見えて、先づ支那人を峻烈に排斥し、尋いで日本人を窮屈に排斥しつゝある。北米合衆國の民族的發展も此邊で心が止まり、纍が立つたと云はなければならないやうな兆候がある。是は洵に北米合衆國の爲めに惜むべきのみならず、世界が優秀なる新民族を見る好望の機會を逸したものとして甚だ遺憾とすべきである。露西亞も亦大小百有餘の異民族を含んで居るが、是等が融合化成するや否やは露西亞の將來に取つて重要なる一つの要件である。

そこで以上四通りの着目點を申述べたが、之を綜合すると、一つには民族の複雜にも純一にも利益が尠く、複雜から化成せる單一に最も長所がある事、二つには民族の純一が利益の多いといふ事は、古に大にして後世に小である事、此の二點である。

六　人種競爭

人種の社會生活關係を述べると、人種競爭の問題を見遁す譯には行かぬ。

人種を異にする各民族の間には、人種的感情といふものが、極めて拔け難い事柄として現れて來る。人種的感情といふものは、人種の異同の事實、並に之に對する認識に基づいて居る一種深刻なる感情で、人種を同じうする個人共には共通であり、其の內容として、自分の屬して居る民族に對する偏執的私愛自尊の念、卽ち激しい身最屓の情念と、異なる人種に對する偏執的憎惡排斥の念とを含んで居る。民族對立といふ自然的事實に、深刻にして複雜なる根據を持つて居る事柄であるから、人爲の加減で事も輙すく之を拭ひ去り得るものでない。併し是も一種の感情であるから、人間の理性が發達し、意志が發達し、要するに人格の調和的發達があれば、幾分か之を調整する事が出來るのである、此點を今少し綿密に考察して見やう。

先づ人間の意志は、社會の發達、個人の發達、人格の進步に伴うて、固より發達するものであるが、併し人格の進步は、之を綜合的に大觀すれば、自由の開展が卽ち是れであり、自由の開展は自由の伸び得る境界の開展に外ならず、自由境界の開展は畢竟人間の經驗內容、並に精神の働き、卽ち智能の發展に負ふものであると、大雜把に斷定せられるのである。卽ち人間の進步は、之を近く部分的に見れば、主として人間理性の發達に存すと申す外はない。故に人間の意志の發展は人種的感情の人格的調整に必要ではあるが、其の効力は大體甚だ微弱で、人種的感情が人格的に調整せられ得るや否やの問題の主なる部分は、實に人間理性の發達からそれが出來るかどうかの問題に歸着する。偖て此の問題は更に形式方面と實質方面とから取扱はれねばならぬ。

形式方面は、凡そ人間理性の發達の可能なりや否やの問題である。之を細かに述べずとも固より然りと答ふべきであつて、唯だ是に依て人種的感情の調整せらるゝ必然的部分は、唯々其の感情的盲目的、卽ち偏執的性質の方面に限られる。そこで次の實質方面に就て考察を進めると、一つには利害關係、二つには愛國心三つには動機の發達といふ、此の大なる要因から人間理性の發達がどれだけの効力を、人種的感情の調整に及ぼすかが判斷せられる。先づ人間理性が發達すれば利害

關係の判斷が適實になる、卽ち盲目的でなく、偏執的でなく、人種の異同、民族の愛憎といふ事が、感情的ではなく、理性的なる人種差別觀に發達して來る。次に愛國心は其の根柢が利害關係よりも更に深く且つ廣い、民族の歷史的背景、殊に祖先の同一なる事、隨つて祖先の崇拜乃至崇敬、延いて報本反始、君民上下の歷史的一致、國語、國學、傳說、德敎が一筋である事、國土及び美術の人を引寄せる性質、凡そ斯くの如きものが皆な愛國心の根を培ふ所の事柄である。故に人間理性が發達しても、少しも愛國心を輕減せざるのみならず、益〻之を增進するに向ふので、現實に存する民族の異同に對して何等理性的差別觀を減殺する傾向を致すものではない。更に三つ目の動機の發達といふことが人間理性の進步に伴ふ大事實である。就中、利己主義は一番原始的の動機であるが、人間理性が發達すると、社會生活關係機關の發達に伴うて、稍〻高等なる動機も亦發動するやうになる。そこで自分一身や、己れの家、我が鄕黨、更に我國から、遂に世界に對する色々の個人的動機が發動するやうになり、理性的人種差別觀は惡差別にも墮せず、然も惡平等觀にも陷らない所の、卽ち偏執盲目を脫却してしまふといふ性質を備へるやうになる。之を總べて斷定すれば、人間理性の發達は、人種的感情に對して、其の偏執性盲目性の入交り濁つて居るのを洗ひ去るには成功するが、人種差別觀の絕對に無くなるといふが如きは思も寄らぬ所で、微力ながらも人間意思の發達が亦是と一緖になつて、要するに人種的感情は人格的に調整せられて、人種の異同、民族の對立に對する理性的差別觀の經綸的徹底に究竟するものであるのである。

併し以上は民族の對立といふ事實があるといふ上に立つて考察を進めたのであるが、若しも民族の對立といふ事實が次第々々に薄くなつて、遂に消滅でもするといふならば、上述はまる切り無用の辯となつてしまふ。一體民族の差別、人種の異同といふ事實が將來世界に於て大に薄くなるかどうか、是は亦人種の融化と、人種の發展との二點から考察する事要する。

二個以上の民族が相觸接して長い間經つと、其間に次第に人種の融化が行はれて、甲乙兩民族から、甲でもなく乙でもない新民族が出來、又乙民族が甲民族に同化し、沒入する。併し同化沒入といふ方は部分的に行はれるだけで、新民族が出來るといふ方も亦、絕對的に甲でもなく乙でもない程の、新民族が出來るといふことは

稀である、卽ち若干甲に近いか、又は乙に近い民族が出來るに止まるのである。故に人種の融化は行はれるにしても、多少其の要素たる兩人種の間に主客の別がある事は免れない。斯樣にして此の人種融化といふ事から、人種差別の自然的根基、卽ち民族對立の事實が幾分か輕減されるやうであるが、之に對して更に人種の發展といふことがあり、其方からは此の自然的根基が增進するに傾く事實を生ずる。

人種の發展といふのは、更に人種の特色の發展、並に人種の普通事項の發展といふ二つの事項を含む。先づ人種は優生學的標準に於て一進一退するもので、靜止不動に居ることは不可能である。優生學的事項は人種の特殊相にも關すれば普遍相にも存する、是は人種差別の自然的根基の增進を致す一面である。次に又二個以上の民族が融化することに依て人種の發展を致す、甲乙兩民族の主客が孰れに在るにしても、甲乙の孰れかの人種の發展になる。是に於ては人種の特殊相の中の或るものが減り或るものが增す。此の兩方の手續を綜合して見ると、人種の融化及び人種の發展は、人種差別の自然的根基を一消一長せしむる効果は甚だ複雜であるが、要するに人種差別の自然的根基を輕減せずして增大するの結果に至ることは明かである。

尙ほ人類一源說と多源說といふがある、其中人類一源にも拘らず、現在斯くの如く複雜多趣多樣なる種々の人種が存在して居るといふ事は、明かに自然根基增進の證據となり、又人類多源であつたとしても、多源の數と現代の人種共の數とを較べて、如何なる學者も現在の人種の數よりも、多源の數の方が多いとする者が無い以上、矢張稍〻少き多源より斯くの如く多い人種共が出來たといふ事實は、此の長い年代の間に自然根基が增進こそすれ、輕減したものでないといふ結論に達する。一源說からでも多源說からでも、人種差別が斯くの如くに現存するといふ事實は、必然に人種差別の自然根基が將來段々減少するといふ論を支へる意味が、毛頭ない事になる。

乃ち前條に述べたる民族の對立といふ事を根柢として進めたる考察は、悉く活きて行く事になるのである。

抑も人種差別觀は、宗敎差別觀、風俗慣習、禮儀、隨て德敎差別觀、並に國語差別觀等と相並んで、社會的差別觀の重要なる一事項であるのである。かるが故に之を事

の實際から見ると、若し假りに單に人種差別觀だけを除き去る事が完全に成功しても、其爲めに社會差別觀を撤去するといふが爲めの成功としては殆ど言ふに足らぬ。然るに事の實際に於て究竟論旨の歸着せんと求むる所は、實に社會差別觀の撤去に在るのである。若し社會差別觀を撤去する爲めでないと言ふならば、是は其の論者の自己認識の不徹底なる淺慮の結果である。社會差別觀の撤去とまで主張し斷行するを躊躇するならば、それは卽ち事理乃至事實からの必然の示命に從ふものである。如何にも社會差別觀を撤去してしまはうといふ惡平等は、是は空想であり、夢幻である、卽ち論理の破綻又は事實の不整合が必ず出て來る。一體事實を根基とする論理の必至の到着地は左の如きものである。――社會的差別は社會や人種の進化の必至且つ必要事象である、社會的差別は撤去は出來ない、故に社會的差別觀は必ず支持せられなければならぬ。是に於て國語差別觀、風俗慣習、禮儀乃至德教差別觀、乃至宗教差別觀は存立すべきもので、獨り人種差別觀のみが絶對に存立を拒否せらるべきものでない。唯だ凡そ是等の差別觀は皆な理性的差別觀であり、事實を根基とする差別觀であつて、感情的盲目的なる惡差別觀ではない。惡差別觀は良平等觀とは兩立しない。理性的事實的良差別觀は、感情的空想的惡平等觀とは兩立しない。國際的良平等觀は、社會的良差別觀の寛容する所であるが、國際的惡平等觀は、斷じて社會的良差別觀の拒否する所である。凡そ社會渾一觀の立脚地を確かに踏締めて居る者は、單に人種差別問題の一角に躊躇して、偏に其の撤廢を急ぐといふやうな馬鹿氣た態度には、お仲間入りは出來ないのである。

一寸參考の爲めに、輓近の思想界にチラホラ見ゆる輕浮なる思想に就て例を擧げるならば、人種的惡差別觀は攘夷思想である。宗教的惡差別觀は、宗派偏執思想、又基督教徒等の偏執的唯我獨尊思想である。德教的惡差別觀は西洋崇拜者流のデモクラシー思想、支那崇拜者流の儒教思想である。人種惡平等觀は宗教的人種否定思想である。國語惡差別觀は尙古國語思想である。德教的惡平等觀も亦此中に在る。國語惡平等觀は英語歸一思想、一派の羅馬字論、又、補助語とせずして主語とする一派のエスペラント論である。國際的惡差別觀は孤立思想、鎖國思想である。國際的惡平等觀は四海兄弟主義、世界

主義、大勢迎合思想、躁急なる國際聯盟思想である。

人種的感情の根柢並に其の成立は斯樣なものであるから、それだけ單獨でも人種競爭の事態を惹起することも可能である。尙ほ之に人口問題其他がお互に組合ふ場合に於いて、人種の具體的存在である所の民族といふものが、直ちに一個激烈なる競爭の單位となるべきは、理に於いても勢に於いても明白且つ必至である。

以上、優生學的事實の中での最も先天的なる人種・民族が、社會生活に於いて如何やうに現れて來るかの大體を、各種の方面から述べて見た。個人に取つては人種・民族は先天事項であるが、社會に取つては必ずしも社會の手で相當の配劑調整が下せぬでもない。人種・民族の優劣長短が社會生活に重大なる關係を有し、又優劣長短を外にしても、人種・民族の全體の事實が、人種競爭、人種問題といふ所に必至的に來なければならぬ譯合も、右で大體考察を了へたのである。更に之に次いで、個人に取つて先天の距離が、稍ゝ近い所の、婚姻から出生と、順を逐うて述べることにしやう。

第二章　婚　姻

一　亂婚より單婚まで

先天方面にして、優生學的事項に關係の深い第二の大なる社會生活事項は婚姻である。婚姻の習俗又は制度の如何に依て、其の優生學的効果に重大なる差等の生ずべきは、常識も亦大體考へ當てるべき所である。

先づ婚姻の最も原始的にして初等なる雜婚、一名亂婚と呼ばるゝ狀態から考察を始める。

一體婚姻といふ事柄に就ては、倫理道德を專門とする學者が一番窮窟に解釋するのは當然で、之に次いで法律の學者も亦稍ゝ窮屈に之を定義する。併し事物を進化的に考察する事を面目とし又本務とする所の社會學者は、凡そ極めて原始的初等なる段階より、同一事物の極めて發達せる、又は將來發達すべき高等なる段階

をも含めて、特定の一事物に對する定義を立てる事が其の常例である所から、婚姻に對しても最も廣い定義を立てる、卽ち凡そ男女兩性の性的協同生活に名づけて、汎く之を婚姻と云ふのである。故に最も原始的初等なる雜婚一名亂婚の如きは、却て婚姻研究には極めて重要にして見遁すべからざる、婚姻に關する發生的事實の眞率なる流露として、貴重なる研究對象考察資料とせられて居るのである。

婚姻關係に於ける男女兩性の數の上から、婚姻は四通りに分れ、又四通りの外あり得ぬ。數男數女の入亂れての婚姻が第一の雜婚一名亂婚で、數男一女の婚姻が第二の多夫俗又は一妻多夫婚姻、一男數女の婚姻が第三の多妻俗又は一夫多妻婚姻、發達せる制度としては之を多妻制とも云ふ。偖て最後に一男一女の婚姻が單婚制又一夫一婦制と呼ばれて、今日最も發達せる婚姻の形式と看做されて居る。婚姻の類別は其他尙ほ或は手續上、或は內外婚といふが如き樣々の種類別けが立てられるが、先づ大體此、數の標準からする婚姻の部類別けに就て、其の優生學的利害得失を批判して行く事にしやう。

雜婚は最も判明性を缺く事の甚しい原始婚姻の形式である、甲乙丙丁といふ男性に子丑寅卯といふ女性が相對し、甲の妻に子も丑も寅も卯もあり、乙の妻にも丑も寅も卯も子もあり、隨つて子の夫に甲も乙も丙も丁もあり、丑の夫に乙も丙も丁も甲もある、斯樣なる關係に於ける婚姻狀態が卽ち雜婚、更に之を擯斥して亂婚とまで言ひ做さるゝ所のものである。斯樣なる婚姻關係から生ずる所の出生事實、又其の出生事實を享けて世の中に現るゝ所の血族の成因たるべき個人が、極めて原始的の生存を遂げ、極めて菲薄なる福利を享有するの運命に置かるべきは申すまでもない。固より之を個人の資質から見ても、之を社會生活方面から見ても、總てが極めて原始的の時代であるから、之に將來の發達せる狀態段階をこそ比較すべけれ、是より劣れる、一層幼稚初等なる段階を想像することは寧ろ無理である。

第二段の一妻多夫卽ち多夫俗の婚姻に於いては、女性の方から見たる男性は甚だ判明を缺くが、男性の方から見た女性は唯だ一人に限られ、卽ち判明性が完全であるので、丁度雜婚に較べると、判明性が半出來たと云うて宜しい事になる。是は併し夫婦關係に於いて、卽ち婚姻當事者間に於ける判明性の事であるが、偖て婚姻の結果としての出生事實が出て來ると、其の出生を享けたる子たる個人は、其の胎

を受けたる母性は判明であるが、父性は甚だ判明を缺く。然るに母性の判明は有ゆる婚姻方式に於いて、卽ち亂婚に於いても矢張事實として存する事であるので、此點からすると第二段の段階に於ける多夫俗では、何等第一段階に較べて判明性が進歩したと云ふ事は出來ない。第三段階と第二段階とは、兩性の中の一方が複數で、他の一方が單數であるといふ點に於て同じくあるにも拘らず、多夫俗を第二段に置き、多妻俗を第三段に置くのは此點からである。優生學的論據に立つて考察するときに、特に此點が明かである。

多妻俗は、一人の男性に複數の女性が婚姻關係を結ぶのである。其の第二段階たる多夫俗に較べて、婚姻當事者間の判明性に依る價値は格別大なる進歩發達が無いにしても、生れたる子供個人の立場からして、始めて茲に父母共に判明するといふ點に於いて、大なる進歩發達であると申さなければならぬ、此點に於いては第四段たる單婚制、卽ち一夫一婦婚姻と何等擇ぶ所がない。婚姻當事者からすれば、右四通りの段階の中二と三とが一つになるが、優生學的考察の目的物たる、子供たる個人の立場からすれば、一と二とが一つになり、三と四とが一つになるといふ面白い結果が茲に現れて來る。今日世界の所謂自稱若くは他稱文明國では格別に調査研究を經ずして、單婚制が最も婚姻の進歩せる形式と認められて居る。斯く認める事は何も大なる弊害があるではないが、學術は併し左樣に輕易なる獨斷を許す譯に行かぬ、是は後に御話する事にして、今少しく各種の段階に就て補ふ所がなければならぬ。

雜婚俗にも細かに見ると中々種類があり、段階がある。甲乙丙丁が子丑寅卯に對して、無茶苦茶に何等の制限も忌避もなく婚姻關係を取結ぶ事は、同じ雜婚段階の中でも最も初等なる段階であるが、それが少しく進歩の道筋を進み行くと若干の忌避を生じて來る。忌避には色々ある、先づ一つには血緣關係の近い者を忌避する。初等なる宗教信仰、徽號崇拜に於ける、神として立てられて居る所の同じ徽號卽ち同じ神を崇拜する仲間を避ける。又三つには年來同じ住居に暮した者を避ける。又四つには自分等を支配する所の酋長が禁制する者を避けるといふやうに、樣々忌避の事由又は根據はあるが、兎に角無茶苦茶に對手擇ばずといふ狀態から、幾分か若干の忌避があるに進む事が、進歩の手始めで、忌避ある雜婚をば、制限

雜婚と云ふ。其の忌避の範圍が段々多くなる、卽ち無茶苦茶の範圍が段々制限せられ、狹隘となつて來るといふことで、雜婚から多夫俗や多妻俗が次第々々に生れて來るといふ譯である。次に又、格別忌避とまで行かずとも、複數男性又は複數女性の中、主たる者と副たる者の異路目が、初めは極めて微かに出て來、それが次第々々に判然となつて來る者がある。是が可なり判然となつて來ると、雜婚が段々多夫俗又は多妻俗に近づいて來るので、先輩學者スペンサーの如きは之を初等多夫俗と名づけ、既に掲げたる完全なる多夫俗をば高等多夫俗と名づけて居つた。併し一層適當なる學術的名稱としては、寧ろ是は不等質雜婚と改稱する事が適當である。制限が出來、又不等質になるといふ事が、卽ち最も初等なる雜婚俗から、既に進化の目標を進み始めたものと云ふべきである。

多夫俗も婚姻當事者の中、女性の方に婚姻關係の恒常性が甚だ缺乏して居る。男性の方は定つた一女を對手にする事であるから、雜婚とは大違ひに恒常性が頗る進んで居る。尙ほ斯樣な多夫俗の一種特別なる類として、多夫が相互に兄弟である者がある、是は西藏に行はれたといふので有名である。多妻俗でも亦多妻相互が姉妹である事が、屢〻且つ汎く各地に見られる所である。姉を娶れば妹共もぞろ〳〵と是に跟いて娶られて行くといふ形式が、文明の頗る進んだ歷史上の國國にも見えた事である、支那の立派なる古典抔にも、斯樣な事實はよく見られる所である。多妻俗で男の方に恒常性が不完全である事は、多夫俗と正に相反する。唯だ此の多妻俗となると、殊に習俗よりも制度に進むといふ性質が、多夫俗よりも更に一層進んで來る。乃ち社會が相當以上に進んだ後に於て、特に此の俗を便利とするといふ所から、之を明確なる制度として居る事が、隨分屢〻且つ汎く事實として現れて居る。仍て斯る事實を明白にする爲めに、自然的多妻俗と人爲的多妻制との二つに、名稱からハツキリと區別して掛る事が便利で又適當である。乃ちスペンサーも亦たハツキリと申して居るやうに、多妻は人の皆な欲する所であるが、文明と貧乏とが之を妨げて、或人は此の欲望を遂げ、或人は之を遂げ得ざるの違ひがあるだけであるといふ所から、多妻俗は社會の進みの道行に於て、自然の勢として何れの社會でも經過すべき所である、之を自然的多妻俗と名づける。而して社會の必要上特に設けられたる多妻の實行は、名稱を改めて人爲的多妻制と云ふ

べきものである。是は從來如何なる理由から來るかといふと、多くは父系相續を以てする、家を堅實に保ち續けるが爲めが第一、又第二には人口の激減せるものを補充し、又は人口を大に增進せんが爲めにするのである。父系相續を以てするでなければ、家の保續が出來ないといふ、種々の關係から來て居る所の社會制度があれば、之を達するが爲めにはどうしても多妻でなければならぬ、否な多妻である方が危險が尠い。若し男性の方に子種が無いならば總ての出產はおじやんである、それが無いとする以上、女性の或者が石女であつても、多妻であれば皆なが皆な揃うて石女である事は殆どあり得ざる事であるから、父系相續が殆ど安全に行はれ得る事になる。若し之が單婚であるならば、男性女性孰れか一方に生殖能力が缺如して居れば、直ちに子孫が絕ゆるといふ事になる、此弊を拯ふが爲めに、第一事由として人爲的多妻制が起つて來る。次に戰爭は文化の餘り多く進まざる社會共の間に最も屢〻起る事實で、而して斯る社會の間の戰爭は殊に殺戮が多い、隨つて人口の激減を招く、之を補充するには、多妻を實行するのが最も手近にして確實なる行方である。激減の場合でなくても、增殖の爲めにしても同じ譯合である。

阿弗利加のズールー部落は男子四十歲に至るまでは婚姻が許されない、其代り一たび四十歲に達すると多妻が許されるのである。而して其の人口增殖の割合は一年に百分の六に達する、今日最も此點に幸福なる文明諸國に較べて實に五倍の增殖振りである。宗教家は兎角禁慾といふ事を以て一つのえらさの目印とするが、此點に對して人並みまでに之を撤廢したのが親鸞上人、更に猛烈に、經濟上の事由よりも宗教擴張の理由から數倍の斷行をしたのがモルモン宗のヘンリー・スミスである。世界戰亂の半以後に於いて、國を擧げての大戰爭であつた所から、各國共に人口の激減が頗る心細い事柄となつた。此際獨逸は戰場に於ける兵隊を、七曜の中或日を定めて戰場から若干の交代で後方に退け、一日を休養する餘裕を與へた。而して此の休養の際に於いて、彼等の義務として、獨逸國民の將來の發展の爲めに子種を蒔く事が負はされて居つた、洵に政治家の深謀遠慮もこゝまで屆けば申分はない(!)。が唯だ從來の普通道德的常識に對しては、聊か變挺なる僇辱を感ずる人も隨分多からう。

多夫俗若くは多妻俗から來る子供の身體上の健康、又は精神上の優秀性が如何

やうにあるべきかといふ事に就ては、まだ種々の學術の方面で一定の研究成績のあるとまでは進んで居らぬ、併し大體の研究方針は略ぼ立つて居る。一方には多夫若くは多妻の身體狀態が、より多く健康性を常に維持するに適して居るかどうか、他方には多夫俗の一婦、多妻俗の一夫の同樣身體上の健康性が、より優秀になり得るか、若くはより低劣になる傾きの方が强いか、之を精密に研究調査する事が必要である。更に精神上の優秀性の問題は、生理上の事態と相關連する精神生活事象の外に、多妻若くは多夫が一妻若くは一夫に較べて、優秀者を包含し得るの可能性がどの位ゐ大であるかといふ點に歸着する。併し此の方面の事柄は、殊に幼兒の出生せる後、卽ち後天的の優境學的事實に倚り掛る事が、身體方面よりも遙に多いといふ點を注意せねばならぬ。まだ科學的精密なる結論を達せぬとは云ひながら、大體に於て單婚制に較べて、多夫俗や多妻制が優生學的に一層樂觀的性質を有つて居ると斷定するには、甚だ距離があると云はねばなるまい。

二　內婚・外婚の得失

婚姻の、次の大なる且つ重要なる種類別けは內婚・外婚である。內婚といふのは同一社會卽ち同一の家又は同一の部落、乃至進んでは同一の國に屬する男女の間に行はれる婚姻の事で、外婚とは異る社會に屬する男女の間に行はれる婚姻の事である。併し部落より進んで國とまでなると、多くは文明の進步も著しく違つて來、殊に社會の規模、範圍、大さが甚だ大きくなることであるから、其中に於ける內婚と申しても、原始時代や野蠻部落に於ける內婚とは全く事態を異にして、彼等の外婚と近いものになるから、內婚外婚の區別は、斯る進んだ社會に於いては餘り多くを論ずる必要が無い。內婚外婚の問題は、主として初等未開の社會に於いてだけ重要であると心得て差支ない。

原始狀態に於ける人類は、婚姻の配偶に就ては何等選ぶ所もなく、忌避する所もなかつたが、少しく進むと先づ直系親を忌避する。直系親といふのは親子、祖父母と孫といふが如き間柄を忌避するに至る。次には進んで兄弟姉妹を忌避する、次には進んで叔姪を忌避する、次には進んで從兄弟姉妹を忌避する、次には更に進んで從姪、從姪孫、卽ち從兄弟姉妹の子供を忌避する、更に進んでは亡兄弟の妻や亡妻

の姉妹をも忌避するといふ事になる。斯く忌避に忌避を重ねて行くが、此の何等の忌避の無いのが最も原始的なる內婚で、少しづゝ忌避が進んで來ると、內婚が原始的から離れて、次第々々に外婚の方へ接近して來るのである。斯樣に忌避が極めて少い婚姻は、所謂同血婚姻と云ふものになる。兄弟姉妹の婚姻は、今日から見ると變な感じを與へるが、是は隨分汎く、且つ時代としても長い間行はれたものである。斯樣なる事柄を取扱ふのに、學者の慣用手段として族稱の研究調査を傍證するが、例へば「妹脊」といふ言葉が、夫婦といふことを意味すると同時に、兄妹といふ事をも意味する。固より是丈けでは同血婚姻の證據にはならぬが、一種の傍證を與ふる事實としては若干の價値がある。

所で內婚は徹底的に永く續くものではなく、內婚の段階が、此の忌避の範圍が增すに從つて次第に縮まり、段々外婚に移り行くといふ大事實は、何れの社會に於いても、卽ち人類全體に於ける大勢であると申して宜しいのであるが、何故左樣なる事柄が行はるゝかといふと、そこには大なる優生學的理由がある。

第一には同族相婚卽ち同族婚姻を首めとして、一般に同族の間に取結ばれる婚姻關係は人の天性に反する事である。同族相婚は概して人の精神及び身體を薄弱にし、それを反覆すると終には其の種族の斷絕滅亡を促すことになる。されば此の手續に依る淘汰を免れて、立派に繁榮して居る所の種族が本來同族相婚を好まない事は卽ち必然の事理で、同族相婚を矢鱈に行うた種族は久しい間に自滅に向つて急ぎ、他は之を好まなかつたから自滅に向つて急がず、繁榮を永く續けて來たといふ、そこで繁榮して居る者は同族相婚を好まず、繁榮して居る人類は天性同族相婚を餘り好まない、是が卽ち必然の事理として現れて來る。此の同族相婚が人の心身を薄弱にするといふ事柄は、社會學よりも更に生理學の研究に待たねばならぬ事であるが、社會學に關係する範圍だけで申せば、近親同血の婚姻から生れ來る兒孫は、精神方面も身體方面も此の血族に固有なる特色、卽ち長所も短所も孰れも倍加的に享有するといふ先天的傾向を現實に表はし來る。短所を極端に表はすといふ事は勿論大なる弱點であるが、如何に長所たりとも餘りに極端に之を現實に表はすといふ事は、矢張精神身體の調和的存立發達を害するもので、結局亦一種の短所となる。畢竟斯くの如くにして、薄弱と絕滅とに傾く、是が生理現象に

於いても大事實であると申して宜しい。次に又社會學からもう一つ言ひ得る事は、生物學上細胞分裂に依て初等なる細胞若くは生物が增殖して行き、單純なる細胞分裂だけで、卽ち祖先を一つにせる增殖、卽ち一種の生殖であると、大抵數代乃至十代の後には次第々々に元氣が衰へて、最早增殖が出來ないといふ狀態に陷る。此時祖先を異にする他の細胞から原形質を注入する、卽ち一種の、細胞間に於ける婚姻手續、殊に外婚手續を實行すると忽ち潑溂たる生氣を得る、茲に亦元氣のよい、增殖力も强い細胞がドン〳〵出來て來るといふ生物界の大事實がある、是が亦一つ安全に打立て得る所の眞實である。其の以外に又、統計的事實から歸納的に判斷しても、同族相婚が人の天性に反する事が安全に支持せらるゝのである。

第二には社會の等質なる事が、內婚より外婚に進み行く事由である。殊に原始社會では、社會は大體似たり寄つたりの人々や又は部分から成立つて居る。故に同族相婚を厭ふ者が、小さくて且つどちらを見ても餘り珍らしい人の居らないやうな社會だけから配偶者を擇ぶといふ事は、甚だ都合の惡い事になるので、是が內婚に滿足せずして、外婚に進む事を促す第二の事由になる。

そこで第三に原始社會であればある程鬪爭が甚だ行はれ易いので、是が亦外婚に移るに極く都合の好い機會を與へるのである。全體婚姻を手續上から分け、且つ大體初等より高等に至る順序で列べると、第一が媾婚、一名偶婚、第二に掠婚、第三に贖婚、第四に從婚、第五に協婚である。もう少し諄い文句で言へば、第一が性慾婚、姻一名隨時婚姻、第二が掠奪婚姻、第三が購買婚姻、第四が服從婚姻、第五が合意婚姻と云うても差支はない。其の第二第三の掠奪婚姻と購買婚姻とが、殊に內婚から外婚に移る際に伴ひ易い所の手續である。鬪爭の行はれ易い初等なる社會では、殊に此の掠奪をやる機會が屢〻且つ手廣く與へられる。掠奪婚姻には、甲社會から乙社會を侵し襲うて、其の目的が婦女の掠奪に在るのと、必ずしも其れが目的ではなく、侵襲をやつて其の餘業として序に婦女の掠奪をするのとあるが、孰れにしても侵襲鬪爭がある事は掠奪に甚だ好都合なる機會を與へる。尙ほ侵襲の餘業としての掠婚には、勝つた方が自ら掠奪するのと、負けた方から贈與するとがある。其の婦女を贈與する手續が一層平和的に進むと、幾分かそこへ價を拂ふといふ事が出て來る。其の價を取る者は、家では家長、氏では族長、部落では酋長といふやう

な社會の頭であるので、其の孰れに拘らず斯樣なる因緣から、掠婚の更に進んだものが贖婚となると、大體に於いて認めて宜しい。斯樣に掠婚贖婚は婦女を目的物としての事であるから、男性中心（アンドロセントリツク）の社會に之を見るので、女性中心（ギヤコセントリツク）の社會には之を見る事が甚だ稀である。

尙ほ外婚及び掠婚の由來に就ては學者の間に奇拔な見解があるので、序ながら二三を紹介すると、外婚と掠婚に依て外社會同盟を造り、自ら强うする爲めだと云ふのがブルタルクやタイロルの說、女兒の出生の數の不足又一社會の人口に於ける女の數の不足の爲めだと云ふのがマクレナン、モルガン等の說、女の恥かしがる心の爲めだ、卽ち强ひて男から壓伏されなければ從はない爲めだと云ふのがミュルレルの說、婦女の道德心から來る所の一つの社會改良である、卽ち內で血族等と狎合ふ事が是で熄むが爲めだと云ふのがバクオーフエンの說、年來同じ家に棲んで居つた者と婚姻する事は、本能的に人の氣が進まぬ爲めだと云ふのがウエステルマルクの說、近親相婚を酋長が禁制するからだと云ふのがスペンサー、モルガンの說、偶然の事情で外婚をやつて見ると、偖て其の效果として身體が强くなり、且つ社會生活上勢威が盛んになるから遂にそれが慣習となり、終には制度律法となつたと云ふのがジローテウロン、スタルケ、ブレーザー等の說、强力を用ゐ、若くは用ゐる眞似をするのは、一族の信仰して居る神々から、他の族の神に移る場合に於ける抵抗が必要だといふ想像に基づくと云ふのがクーランジの說、自分の社會の徽號崇拜の神、卽ち徽號（鼈、熊等）の肉を食はないものと同樣の考で、自分と同じ神を拜み、卽ち自分と同一徽號の婦女に婚する事を惡事とし、或は甚だ危險であるとするが爲めであると云ふのが、總て徽號崇拜の研究者の說、從來普く行はれたる群婚、雜婚の狀態を脫して、特定の一人の男が特定の婦女を私有するの特權に達するの唯一方法たるが爲めである、それまでは婦女は社會の公有であつたもので、特定の一人の男が之を私有するは社會に對する侵犯であり、侮辱であつたが、掠奪といふ自力に依る手續に依て、始めて完全に之を私有するのであると云ふのが、ラボツク卽ちエーヴベリーの說である。成程、亞拉比亞の多夫俗の部落では、最年少の男が女を獨占しやうとする場合には、他の男共の爲めに他の女共を索め來つて而して後にする、斯樣にして男性中心の所謂父權家成立に進むとスミスも書いて居るが、我國の各

地方の今日に近い時代までの婚姻習俗を汎く調査して見ても、此類の事を髣髴せしむるやうな痕迹的事實が隨分無いでもない。以上は研究上の參考と云ふよりも、一寸樣々の意義に於いて興味のある事柄であるから、序ながら列記したまでである。

そこで之を要するに內婚より外婚に進むといふ事は、第一節に述べたる婚姻形式の單複に較べて、遙に優生學的價値のある重要なる事柄で、大凡そ內婚より外婚に早く進む事に於いて成功した種族が、優生學的成績に於ける先進社會となるのである。之が爲めには掠奪といふ手續を先づ伴ひ、それが段々穩かになつて購買といふ手續にまで進み、尙ほ其の購買が更に進むと、婚姻の際に於ける一方より他方に對する贈物といふ形に進み、それが更に進むと婚姻當事者の双方から相互的の贈物に進み、我國の婚姻に於いても見ゆる所の結納といふやうな恰好の手續となり、又更にそれが進むと、遂に結納の爲替といふ恰好にもなる。是はズツと後世の大なる進化の道筋を辿つて辿つて辿り拔いた後の話であるが、兎も角も外婚が逸早く進む事の爲めには、鬪爭の行はれることすらも必要であり、少くとも己れの小社會に蟄居して居らずに、進んで外社會と觸接を開拓するといふ勇進敢爲の氣象のある者が、此點に於ける優生學的先進社會を造り得る事になるのである。古來尙武の國民、又國民とまで發達せざる蠻民が、矢張社會の進歩を成遂げる事に於いて、怠弱、懶惰、無氣力なる種類よりも、遙に進歩發達を遂ぐるの社會的好成績を呈する所以の事由の一つは此に在る。

三　嫉妬と社交性

ダルウインが、ゴリラや哺乳獸全體から見ても原始人類は嫉妬が强く、卽ち原始人類は一人の男が一人の女、又は自分が强いならば數人の女と共に棲み、他の一切の男共を敵視したに相違ない、と言ふに對して、ラボックが評して申すに、若しさうなら人類の進歩は不可能でなければならぬ、男一人だけの社會は、若干の女が附いて居つても甚だ微力である、大勢の男が寄合つて居る社會で、始めて有力なる社會が出來るのである、流石にダルウイン氏も此點に大分困難を感じたと見えて、或は人は社交的動物で、然もゴリラのやうに數人の女と同棲したかも知れない、と言う

て居るが、所で、社交的の猿であると永續的の雌雄の結合は成立しない、といふのは社交的となると、單獨生活、婦女獨占生活が熄む事は必然の事實である、卽ち嫉妬の支配に一任する婦女獨占生活は、社交的生活と矛盾するからである、猿の或る類では、往々數多い老年の雄猿をも含んで居る所の猿の群が見られる、是は雄猿でも年が行くと嫉妬の目的物となる事が輕くなり、而して年が行つても雄猿が居れば、其の群の力を幾分强大にする手傳になるからである。――といふダルウインとラボック兩先輩學者の間に、面白い評論が交換されて居るのである。

が、是に就て少しく申して見たい事は、ダルウインの嫉妬の事を揭げた其の原始時代の事實は、動物時代に於いて嫉妬が盛んにあつたといふだけの事實を揭げたものとして、我々は此の、大學者の我々に示す所を事實として受け入れて置きたい。併し、それから人類として一歩でも前進するときに、重大なる新しき事實は何であるかといふと、それは社交的性質でなければならない。實に此の社交的性質、是こそは、原始ながらも人類が爪もなければ牙も無く、長大なる體軀も無く、それにも拘らず諸〻の高等動物を超えて拔群の發達進化を遂げ、遂に今日あるに至つた所の本始的の事由であると申さねばならぬ。乃ち人類と他の動物共との共通ならざる一點である所の社交的性質は、是が卽ち原人が他の諸〻の高等動物共を超えて、聊か優尙を有した點でなければならぬ。乃ち原人はゴリラと異にして、既に聊か社交的、聊か非嫉妬的であつたとしなければならぬのである。

全體、兎角進化といふ事に重きを措かずして、成るべく人間を昔から立派なものであつたと言ふ事を急ぐ學者は、其の學者が相當科學的良心の發達した人であつても、兎角人間の婚姻は單婚から始つたものであるとの斷定を急ぎ且つ輕易にする癖がある、畏敬すべきヴントですら此弊に陷つて居る。そこで嫉妬と原始單婚との關係が頻りに說かれるのであるが、之に對して左の五つの難點を述べて置きたい。第一に男は數女を欲し、女は數男を欲するの本能が、今の開明時代の人間生理に於ても尙ほ歷然として掩ふべからざるものある事。第二に夫婦間の嫉妬を以て右の本能に對して調節に調節を重ね、進化に進化を積んだ上の今日に於てすら、實際上赤裸々に申せば、單婚生活の理想的實現の前途尙ほ頗る遼遠なる事、支那婦人の纏足や巴里のクリュニー博物館の鍵陳列室等は、皆な此の調節努力の遺跡で

ある。第三に嫉妬が事實に現れる機會の多かつた事は、是れ取りも直さず單婚よりも雜婚が比々として存した實證である事。第四に原始時代以來若しも單婚が年久しく行はれて居つたならば、嫉妬は實現の機會が少く、久しうして衰乏し消滅に向つて居つた筈であるのに、事實は正に之に反して、今尙ほ嫉妬性が人類の男にも女にも熾んにある事。第五に一男數女の婚姻たる多妻俗が、一女數男の婚姻たる多夫俗よりもより多く行はれたといふ事實と、男よりも女に嫉妬が一層强烈に現はれるといふ事實と、此の兩事實の並行する事實は、歸納論理學で所謂伴差法を以て、正に第四項の推論を援け證する事實である事、卽ち嫉妬の機會が多い程嫉妬が激しく、若し原始時代以來單婚が嚴密に行はれて居つたならば、人類は疾うに嫉妬が弱くなつて居つたといふ事實がなければならぬ。

かるが故にダルウインの申したやうに、原人に嫉妬が存したといふ事は事實としても、之を以て原始時代に單婚制が確立して居つたといふ事を主張するのは、却て反理的であると斷定しなければならぬ。況や單婚制の原始社會は極めて無力薄弱なる社會であり、斯る社會は團體競爭の結果、夙に敗亡し、淘汰せられてしまつて居らなければならぬ事であるのである。一體此類の道德急迫論者は、人間に對して最屓の引倒しに陷つて居る、第一に論者は原始時代に既に單婚制が行はれたとする以上、其後次第に多妻俗も起れば多夫俗も起り、乃至雜婚亂婚までが行はれ、然も單婚を誇る現今でも、實際赤裸々に事實を洗ひ出せば亦左樣であると申さねばならぬ以上、人間といふものは段々段々墮落して、世の中は澆季に赴くと言ふ東洋の迂儒と、其轍を同じうし、西洋の迂儒と名づけられねばならぬ運命に陷つて居るのである。一體此事は、家を研究するの調子に於いて、原始時代には家はあつたが、段々家といふものが稀薄になり、個人といふものが濃厚になるやうな社會機構に赴くものだと論ずる論旨に共通なる弱點である。更に第二に論者は原人といふものが嫉妬の爲めに單婚を實現し、且つ社交生活を犧牲に供して顧みないとするに於いて、原人と狒々と同視する事になる、淺草の花屋敷の狒々は夫婦連れの見物が行くと目を剝いて憤慨する、乃ち單婚と云へば如何にも名は美であるが、實は原人が甚だ醜陋化しまふといふ氣の毒なる陋態の斷言に陷るものである。

以上は甚だ蛇足に類するが、本章の初めから次第に御話して來た所の根柢に對

して一層之を固めるが爲めには、婚姻進化の出發點の事實談を附加へる必要を感じたから、若干の興味ある事柄であるを幸に、是丈けを御話したのである。

四　社會階級と婚姻進化

凡そ婚姻の習俗並に制度の變遷進化は、社會的階級地位の高い程が却て後れるといふ、奇妙なる、併し正眞の事實がある。

全く忌避なき內婚は、今や極めて低い野蠻民俗にも、習俗としては見られぬが、布哇や大洋洲諸島の族稱關係に徵して、それが嘗て存立した事は歴然たる事實である。兄弟姉妹の相婚は更に汎く且つ長く實際に行はれて居る、殊に此事が義務事項として行はれたことは、埃及、波斯、亞拉比亞等では、歴史時代に至つてもそれが行はれ、マダカスカルでは、ツイ一八六〇年に佛蘭西に亡ぼされる時まで現實に行はれて居つた。我國でも歴史時代に、異母妹を娶るの例は、極めて稀には無いでもなかつた。そこで一般社會の風習としては或る程度の忌避が尋常の事となるに至つた後でも、上流階級殊に君長の家族關係に於いては、婚姻に此の程度の忌避はせずともよいといふ、又はしてはならぬといふ事が規範となり、準繩となり、又は許容事項となつて居る事が多い。埃及やマダカスカルでは、王家では兄弟姉妹の相婚の義務があつた。畏多くも我國では天平以前に、立后は必ず皇族からでなければならぬといふ制度であつた、卽ち外婚を禁じて內婚を奬勵して居つたのである。

多妻制は、下流階級が之を行ふ事が稀になつた後でも、上流階級には頗る長く必須の制度として存立し、階級が高くなる程樞要の制度として强き存立の理由を有した、大名抔には近世まで或る程度に此事が行はれて居つた。

從婚卽ち服從婚姻に於ける女が服從する事の客體は、通例は男であるが、其の客體は段々家に進み、殊に國に於ける中樞的の家である場合には、協婚卽ち合意婚姻が一般社會の風習となつた後に於いても、上流又は最上階級に於いて從婚が尙往々存立するといふ事實が現れて居る。

凡そ內婚制、就中同血婚姻の存續は、血族の、神聖を維持するといふ趣意に副ひ、人爲的多妻制の存立は、父系相續を以てする家の保續を安全にするの趣旨に副ひ、從婚の存續は、家又は國の統一鞏固を圖らんとするの趣旨に副ふものである。之を

要するに、上流階級程婚姻の風習又は制度の進化が後れるのは、畢竟社會渾一體の利害、卽ち第一意義に於ける社會生活の發達の爲めに生ずる所の、一つの社會事象たるに外ならぬ。個人的規範だけを振翳して、輕々しく社會事象に對して規範的評價を下すべきでない。優生學を最も廣汎、最も深奥、最も妥當なる意義に於いて社會生活との價値判斷をしやうとする爲めには、此點に常に且つ固く意を留める事が必要である。

五　早婚と晩婚

現代文明が續けば續くだけ、現代生活は次第に早婚から晩婚の方へと移り行きつゝある。是は必ずしも文明の性質上から來ると云はず、生活の逼迫から來る事も多いので、今後と雖も容易に此の勢は輕減を示さぬであらう。偖て早婚晩婚に就ては、無批判に現代文明を謳歌する人の目には、何等の吟味を要する事なくして早婚は惡事であり、晩婚は結構な事であるやうに輕易に認められるが、是は强ち左樣に速斷せらるべきものでない。

男女を暫く別々に採つて簡單に話を進めれば、先づ女性が他の家に嫁して行く爲めには、早婚が都合の好い事のある點を見遁してはならぬ。近頃の娘達は高等女學校で英語を稽古する、其の英語が全體どの位ゐ、直接は固より間接にも、役に立つか、間接の役立、卽ち英語を通じて知識を向上し、更に進んでは頭腦の鍛錬をするといふ程度を距ること、高等女學校の英語は勿論、中學校の英語すらもが甚だ大なる距離がある。さうすると殘る所は直接の役立だけになり、それは麥酒壜と葡萄酒壜との見分けが付く位ゐに過ぎない。英語でも稽古しなければ外交官のお嫁さんになれないと云ふか、外交官で英語の國へ行く者は其の小部分に過ぎず、佛蘭西語が其より廣い部分を占め、次いでは獨逸語、露西亞語、西班牙語、伊太利語、其他種種の言葉が却て適當となつて居る。のみならず其の外交官のお嫁さんになる機會、卽ちお嫁さんを求めつゝある青年紳士の中で、外交官になる者が何人ある。全國に雨後の筍の如く濫出せる所謂大學といふものの萬千の卒業生中、年々外交官になる者は二十人內外に過ぎない、其爲めに英語を高等女學校の一年から四年又は五年まで、毎週少くも三時間やるといふ事に依て、高等女學校の卒業期を後らせ、

さうして其の正味の收得は右述べたるが如きに過ぎぬとするならば、教育の爲めにする女子の晩婚は殆ど無意味であると申さなければならぬ。勿論英語を學げたのは唯だ極めて狹き一例に過ぎぬので、文明が進めば教育上晩婚を致す傾向が強くなるといふ事に對して、痛烈なる反省を促す爲めの資料の一つに供したまでである。所詮若いお嫁さんは、良人の特定の職業や、新たに入るべき特定の家の家業に對する專門及び特別練習は、お嫁入りをした後でやるべきもので、高等普通教育、乃至中等若くは初等の、それ〴〵身分に應ずる普通教育だけを、お嫁入り前にやれば澤山な次第である。お嫁入りの後に於いて職業的知識、職業的習練乃至技藝等、それ〴〵の教育、專門教育、少くも補習教育を大にやるべき必要があるのであるから、早婚の衰へたる事を大急ぎで謳歌するには少しも當らない。

男子に就いては事柄が少し違ふ、併し好い飯を喰はうといふ希望の爲めに、態々婚期を後らすといふ事は洵に無意味なるのみならず、却て甚だ弊害のある事柄である。自分の腕で世の中に立つが爲めには、學校教育を受けて其の豫備的の知識や能力の發達をせねばならぬ、之が爲めには相當の年數を要するといふ事は普通には暗易い道理となつて居るが、近頃、此の意味に於ける教育としては、現代單に我國と云はず、世界の多くの國々の教育制度は甚だ勘定に合はぬものであるといふ事に、我々如き實學的の評論家のみならず、教育當事者や教政當事者も、一年は一年より痛切に反省し、且つ氣が付いて來て居る所である。此頃では我國の一般世の中の人々、殊に父兄たる人々抔も頗る是には氣が付いて來た。其の影響は近年の不景氣の爲めとは云へ、中學入學希望者が激減して、何れの府縣でも中學の整理合併が問題となつて居るにも明かである。職業の爲めに、殊に好い飯を食はうといふ爲めに大學をやるといふ事は甚だ考へものである。甲種實業學校を卒業して、大學卒業者よりも七八年早く世の中に出て、七八年早く立身出世をし、殊に七八年間に巨額なる學費を費す所の赤字から免れるといふ事は差引大なる利得になる。唯だ國の目から、社會全體の目から見ると、世の中に單に甲種實業學校の卒業生だけではいかぬ、陸軍士官學校の卒業生が數百名あるに對して、二三十名の陸軍大學校卒業生も是非必要であるやうに、國社會の方からの要求としては、誰かが右の犧牲を忍んでも、大學卒業をして呉れる事が必要であるけれども、個人的の立場から

すれば、寧ろ大學卒業抔いふ貧乏閥は御免蒙る方がよいといふ事に、段々世の中が氣が付きつゝある。乃ち此の意味の教育上の理由から、青年男性の晩婚傾向は、何等理論上の支持を得られ難くなりつゝある。

偖て社會生活の方面から觀ると、男性女性を通じて婚期が無暗に後れて行くといふ事は、洵に風紀の上からして厭ふべき惡弊を助け成す所が多い。婚期が徒らに後れて、獨身生活を爲して居る者の爲めに、風俗上如何はしい酒色の機關が大に世の中に蔓延して來る、近頃では女性と雖も中々此の惡機關の喰物となる者が多い。無論此の機關に於ける消費者と生產者との區別が或る程度までは存在し、女性は多く生產者になり、男性は多く消費者になる、露骨に言へば男性は買手で、女性は賣手になる事が大部分であるが、併し複雜なる現代の然も大規模なる都會生活では單にそれのみには限らない。歐米各國に於ける大都會に於ける比較的是等の晩婚者中で清白なるべき女學生に於ても、處女を見る事が極めて稀であるといふ狀態は、必ずしも我國に共儘當嵌りはせぬ事であるが、併し必ずしも對岸の火災として看過ごすべきものでない。

斯樣な事は餘り諄く申すべき、上品の事ではないが、要するに早婚を去つて晩婚に趨くといふ事を、文明の誇りであるかの如き愚劣なる見解より脫却する事が必要である。併し所謂現代文明、現代の生活には、それが勢として伴ひつゝある事であるから、之をば餘程多くの努力を以て、狂瀾を既に倒れたるに回す覺悟が必要である。それには奢侈を戒むる事が必要であり、次には生活の簡易と、算數の明敏とを進め行く事が必要である。

第三章　出生

一　胎教

民族があり、其間に婚姻が行はれ、偖て其の結果として第三段に出生といふ芽出たくも重大なる事柄が起つて來る。

出生に就ては懷胎が其の第一着で、懷胎より出生に至るまで、先天と後天との分れ目の準備時代に對して、精神上でもあり、又身體上でもあり、身體と云ひ、精神と云ひ、殆ど混沌たる原始狀態から嬰兒として生れ落ちるまでの二百八十日間、東洋では古來胎教といふ事が大層重んぜられて居つた。別段遺傳學や優生學の實質的知識に富んで居つた譯ではないが、民族の長い經驗と、殊に家を重んじ、人倫を重んずる思想の發達が、其の餘波として斯樣に胎教を重んずるの精神となつて來たのである。

胎教といふ言葉は、懷胎中の胎兒に向つて教へるといふ言葉であるけれども、普通に謂ふ教育、教化といふに於ける教とは全然意義を異にする事で、要するに此の期間に胎兒の發育、發達の精々良い方になるやうに、母親並に母親の周圍が氣を付け、且つ努力する事を意味するのである。朱子の『小學』に、婦人兒を孕めば目に邪色を視ず、耳に淫聲を聽かず云々といふ文句から、中々細かしい事を書いてあるが、母體の衞生的注意、精神的修養に細かなる條目を厲行する事は勿論其身を置く所の周圍の狀況、所謂環界をも亦シッカリと、朗かに、清淨に、健全なるものにせねばならぬといふのが、此の胎教の大切なる原理である。西洋でも近頃になつて胎教の論が次第に盛んになりつゝある、所謂「生前教育」とでも直譯すべきプレナタル・エヂュケーションといふ聲がボッ〳〵聞え出して居る。是は遺傳學や優生學が世の中の實際家の注意を惹くに至つた以上、必ず出て來ねばならぬ事柄で、卽ち純然たる先天と純然たる後天との間に、所謂出生前の時期、此の懷胎の二百八十日といふものがある。多くの病理研究に於いても、此の時期が常に深奥なる研究者に取つての問題となつて居るやうに、遺傳と教育との一連の事實の研究に於いて、必ず此の胎

教研究がなければならぬ次第である。胎教の內容に就ては、東洋の古來傳へられ來つた所抔に比べて、今や日を逐うて駸々と綿密周到、且つ適實なる方へと、應接に遑あらざる程進歩して行くべき機運は確かであるが、之を實現する事は、餘程の努力と注意とを以てせなければならぬ。

二　母性保護

偖て右の胎教時期に於ける境遇の問題の中で、現今社會の狀態から、人々の生活振りに隨分無理と難澁とが伴ふ所の境遇に置かれて居る母性が、相當の數に上るのである。是に於いて母性保護といふ問題が盛んに論ぜられ、且つ幾分明かに解決せらるゝに至つた。

其の第一は婦人勞働問題と交錯する點の解決である。何れの國に於いても、單に現今と云はず、過去よりして婦人の勞働は相當にあつたものである。我國に於ける農村の婦人の如きは、地方に依ては却て婦人の方が餘計農業勞働をやるといふ所さへ尠しとせなかつた。而して婦人は懷胎並に分娩に於いて健康なる體質を保持し、一方に於いて經濟上の功績を擧ぐると共に、他の一方に於いて優生上の成績をも齎らした。乃ち此所には經濟と優生とが何等の矛盾を爲さず、相互に因となり緣となつて、立派なる樂觀的成績を擧げつゝあつたのである。然るに段々現代に近づくに及んでは、勞働の種類も左樣に單純でなく、相當の勞働をする事が健康を增進すると單純に片付けられなくなり、殊に姙婦の衞生に對して、婦人勞働が必ずしもシックリと調和する種類だけに限らなくなつて來ると、茲に婦人勞働問題の一部として、母性保護を如何にすべきかの重要問題が起つて來る。尤も此事の爲めに、勞働問題の一部として、姙婦に對する酷虐なる待遇や勞役を、或は免除し、或は援護するの規定が叫ばるゝに至つた。勞働問題と云ふには餘りに高尙であるが、婦人教育者の懷胎時期に際せる者に幾許りの休養を與ふべきかの問題は、今世紀になつてから所謂文明各國に頗る痛切なる問題として、其聲が高くなりつつある。）

第二には是とは全く違ふ方面で、前章に述べたる早婚晩婚の問題と關聯して、甚だ悔むべき社會生活に於ける變態が、彌ゝ倍ゝ頻數を重ねつゝある、それは卽ち私

生兒の數である。正當なる婚姻、隨つて正當なる家に於いて懷胎分娩をする事の出來ない懷胎分娩が、所謂文明の進むと稱する事に伴うて其數を多くしつゝある。流石に所謂文明の進みだけあつて、斯樣な懷胎分娩に對してまで母性保護が及んで居る、之が爲めに新たなる設備が出て來るのである。此の設備は產院設備の一半で、全體產院といふものは、其の懷胎分娩者の婚姻關係の正當不正當の如何に拘らず、難澁する所の母性に對して、最も大切なる若干時日の間、身體に保護を加へ、且つ分娩を安らかに遂げさせ、其上暫くの間嬰兒を安らかに育つやうに保護するといふ事が其の本旨の全體であるが、所謂文明の進みの急先鋒とも云ふべき、此點に於ける歐米先進國の、就中大都會に於ける實際は、產院の利用者は、矢張主として右に述べ來つたる變則的の母性が最も主なる部分を占めつゝあるのである。或る皮肉なる批評者が、產院は斯る變態母性、隨つて變態婚姻、變態產兒を奬勵する機關なりと酷評するのは、固より君子の態度ではないが、事の實際から一面觀をすれば、左樣に申されぬ事もないといふのが赤裸々の事實である。

極く大體に申せば、現今の所謂進んだ文明に於ける母性保護の機關は、大別して右の二種であると申して宜しい。其の以外に、特に機關を設けるまでもない母性保護が、汎く行はれて居るが、茲に新たに一つ大に言擧げせねばならぬ事がある。右兩種の機關は、孰れも稍〻人生の苦しい立場に置かれたる、頗る同情すべき方面の母性に就てであるが、反對に人生に於ける樂に過ぎる所の境遇に於ける母性、寧ろ女性、逸樂の爲めに身を持ちあぐんで居る所の女性に對する母性保護の事が、東洋に於いては勿論、西洋に於いても、實際の生活者は勿論、理論的指導者の側に於いても、殆ど全然等閑にされて居つた。成程「宴安は鴆毒なり恥るべからず」といふ敎は、東洋に於いては二千數百年前から儼として在る。併し兎角男性も女性も此の鴆毒に耽溺して浮む瀨を知らなかつた。流石に文明の進みは、斯くの如き鴆毒的宴安の淵に臨んで居る境遇に在る男性は、腹が空かなくて困ると云ふ、それを救濟する爲めに頻りに騎馬や、ドライヴや、ゴルフや、スポーツをやる。男性に於ける此風が幾分か女性にも及んで居る事は、西洋各國の上流社會では事實であるが、又腹こなしの爲めに飛廻るといふ事の一種として夜中踊り狂ふといふ事もある。胃腸の衞生にはなるが、精神腦髓の衞生には甚だ害のある事をやり、殊に性生活上の

衞生には、鴆毒以上と云うてもよい危險にまで臨んで居る。總てを總括して見て、茲に掲げたる經濟的に餘裕ある階級、又は連中の母性保護は殆ど閑却せられて居る、此點は今後の問題として大に殘留して居るのである。上流社會の者に子供が少いといふ事實は、次の章にも述ぶる人口問題と密接なる關係があるが、先づ以て此の連中の母性保護が閑却せられて居るのみならず、富裕其事が母性に對する鑑の役目を爲して居るといふ大事實を注意せねばならぬ。いろは四十八戸前の土藏を眺めながら、子寶といふ寶だけが一つ缺けて居るといふ大都會の大商人の物語りは、餘りに多く普通の芝居等にも仕組まれて居る。

三　出生保護・奬産

偖て愈々出生が芽出たく祝はれた後に於いて、出生せる子供を保護する、母性保護と此の出生保護とを合せて、兎も角も是が出産を奬勵する一つの重要なる社會政策となつて居るのである、卽ち之を産兒奬勵と云ふべき事である。出産を皮切りとして、保護が飽くまで行屆く事の爲めには、生れたる嬰兒が幼兒となり、少年となるの後までにも及ばねばならない、故に是が亦社會政策上の言葉で兒童保護とも云はれて居る。之が爲めには、

第一に育兒院といふ機關がある、是にはみなし兒卽ち孤兒、棄兒、迷兒等を扶養し、又右の如き不幸が無くとも、家が貧しい爲めに養はれ得ざる所の貧兒をも收容して之を養育する。我國でも近頃歐米の例に倣うて、中々數多い此類の機關が出來て居るが其の成績は餘り十分でない。一體棄兒といふ事は、歐米各國に較べて我國では昔は固より、今日に至つても遙に少數である。希臘の雅典では、育兒院へ持つて行つて、棄兒をする巧妙なる仕組が出來て居る。丁度歐米によく見る壁の所を平らに何も無いやうに見せ掛けて、ちよいとボッチを押すと百八十度卽ち半圓だけ回轉して、更に二つ切りにした半圓形の盥が出て來、そこで物を洗つて又ボッチを押して壁と平らに此盥を藏つてしまふ、それと同じ恰好の物が育兒院の街道に面した所に出來て居つて、親は赤ん坊を持つて行つてボッチを押して、此の半圓形の盥擬ひの中へ赤ん坊を入れ、更にボッチを押して百八十度回轉させ、それが室內へ入つてしまう、さうして親は其の街道から立歸る。雲井龍雄の『兒を棄つるの

歌『抔といふ悲慘な事が無くて、餘りに調法なる設備であるが、斯樣なものが出來れば、元々社會政策的設備は社會の不幸を救濟するが爲めであるに拘らず、事に依ると之が爲めに社會の不幸が增進せらるゝといふ事になるまいとも限らぬ。棄兒の多少といふが如き現象は、所謂家族制、並に是と因緣の深い道德の敎と、關係の深い事であらう、出生保護も此に至ると頗る考へものである。

第二に託兒所といふ設備がある、是は貧困なる者の幼兒を、晝の間其の家庭に代つて保育するのである。幼稚園といふ純然たる敎育上の理想的敎育設備は、凡そ二百年前から西洋で創まつたが、段々それが實際的になり一方に於いて前項に述べたやうに變則的母性の育兒に對する義務懈怠から、母性其者も亦却て墮落の方に進むといふ弊害にも氣付き、殊に現代の社會生活から來る所の、此の託兒所的經營の必要にも促されて、幼稚園が段々託兒所の方へと接近するやうになつた。佛蘭西では兒童の學齡前に行く所の右の例の設備を、母性學校（エコール・マテルネル）と名づけるに至つた。併し託兒所は更に其の理想的敎育的設備といふ方から、一層實際化し、今や兒童が精神にも身體にも惡るくならない事を最小限度として、家庭に代つて子供を預り、而して其の子供の親が工場其他に通勤して、勞働に從事する事が出來るやうにするといふのが其の眞面目である。勿論單に惡るくせぬに止らず、出來る限り良くする事が理想である事は申すまでもない。畏多いが我が九重の上に於かせられても、學齡に達せらるべき幼ない宮樣を、從來よりも一層御手許に近い處へ御殿を御造營で、其處から學（まなび）の舍（や）へ御通學遊ばさるゝ事に御內定になつたといふ事が、今朝（三六年十月三十一日）の新聞で拜見せられて居る。斯くの如きは實に高等なる兒童保護に併せて、高等なる母性保護の淸白健實なる大理想の實現、大標本と畏くも仰がるゝのである。

愈々學齡に近づき來ると、貧兒敎育といふ事が社會政策上行はるゝ重要事項となつて來る、卽ち是は貧兒の義務敎育完成である。全體無敎育は貧窮から來る結果でもあるが、同時に貧窮の一大原因で且つ犯罪の源である。貧困といふ故を以て、義務敎育を免除した儘で放任すべきものではない。これが第三である。

第四には兒童遊園といふ設備が段々近頃行はれ始めて居る、學校の放課後又は其他の場合に於いても、監護敎導を旨とする道路取締法が實施され、殊に都會の兒

童等は天然と親んで、活動的の天性を發揮する機會に乏しいので、此の設備が彼等に取つて徳育上、又體育上大切となつて來て居る。是は洵に錦上花を添ふるの良い設備であるが、都會の眞似を無暗に田舍がすべきでない。總て近頃の教育の根源は都會本位で來る。昨日も行幸の光榮に浴して創立六十年記念式を擧げた東京高等師範學校も、其の名の表はす通り東京に立つて居る、それで中央又は地方の、分別の乏しい少壯訓導や少壯教諭や、又校長は、何も彼も東京にやるやうな事をやれば、田舍でもそれが教育の大進歩と考へる。甚しきは一方に赤字で困つて居る府縣の教育行政當局者すらもが、こんな點に無分別な者が無いでもない。農村に於て途轍もない廣いグラウンドを拵へて見たり、矢鱈に遠足や修學旅行を奬勵して見たりといふやうな事は、少しく胸に手を當てて、反省的に事實の眞相を考察した上でやらなければならぬ。日本が國富に對して碌な能率高い收益を擧げ得ないといふが如きも、矢張是等と關聯せる無分別から來る損失である。國富百に付、獨逸は三四、八九の生産を擧げて居るに對し、日本は僅に一二、五八しか擧げて居らぬ。

固より出生保護の設備事項は是等に限る譯ではないが、兎も角も流石文明の設備は斯樣なる方面にまで力を效して、次代社會の中樞成分たるべき兒童の保護に力を效す所の途が樣々開けて居るといふ、甚だ慶ぶべき現象事實のある事を紹介するには是で澤山である。

四　制産の合理的極限

然るに他の一面に於いて、産兒奬勵の代りに産兒制限といふ事が、亦文明の隅に於いて行はれつゝある。

乃ち第一は、惡疾を子孫に遺傳するの虞あるを以て婚姻を禁じ、又は去勢、卽ち男女兩性の産兒能力の消滅を實施すべしとする事である。是は人口の不足を甚しく訴へない社會ならば充分に是認して宜しい。少しく古い材料であるが、八九年前北米合衆國の結婚制限法で、特定疾病者に對して、精神病者に右の主義を適用する州が三十州、白痴者に對して十七州、癡愚者に對して七州、精神薄弱者に對して六州、智慮缺損者に對して五州、尙ほ十二州では更に大酒者、癲癇者、酒酩者、花柳病者、要

救恤者、常習性犯罪者、重症肺結核患者にも結婚制限をして居る。更に醫師の健康證明書を、結婚許可の條件とするものが十八州ある。併し、若しも人口不足で困る社會であるならば、多少の惡疾位ゐはあつても、矢張國勢の回復若くは發展の爲めには、斯樣なる禁婚去勢をせぬ方が利益である、其の場合には强ち此の主義を是認するには及ばぬ。

第二は父母が其子の養育乃至教育の經濟的困難を豫想し、之を理由として出産を制限する事である。是は頗る批判の餘地がある。一體養育乃至教育が經濟的に困難であるといふ事實は、必ずしも其養育乃至教育の不成績を來たすといふ事實を伴ふものではない、故に經濟的困難を理由として産兒制限をすべき理由は全く無い。加之事實はどうかといふと、父母自身が安逸を貪り、奢侈を求むるが爲めに、養育乃至教育の困難に口を藉りて、産兒制限をやる事が最も屢々ある所の事實であるのである。

第三には社會經濟に於ける生計難といふ事實を認め、之を理由として、社會人口の增加を制限しやうとする事である。此の問題は次の章の人口に關する研究成績とも關聯して、尙ほ詳に批判せらるべき事であるが、大體、人の性は、困難なる生計に於いても、尙且つ生活の延長並に生命の增殖を極めて熱烈に企て求むるものである。極めて特殊なる稀に見る所の例として、貧の爲めに自殺するといふ事が新聞種として掲げられる、それが新聞種になるといふ事が業に既にそれが極めて稀なる例である事の特徴である。「何某が昨夜眠つた」といふ事は何等新聞種となる價値が無い、併し朝刊八頁に於いて毎頁十三欄、其中極つた廣告や何かを除くと、欄の數が約そ四五十しか無い所に斯樣な新聞記事が一欄あると、日本人が五十人に一人、貧乏の爲めに自殺したと、兎角斯樣に考へ易いものである。斯樣なる妄斷に陷らぬやう、小學教育以來、算數的統計的訓練を與へる事が殊に日本人には必要である。或人は統計は虛を手傳ふものだと悟り顏に申すが、成程統計的訓練の無い者には、統計は虛を申すものになり兼ねない。人の性卽ち人間心理的要素の必然的事實を先づ充分に確と諒解して居るでなければ、斯樣なる事實に直面するの資格は無いと云はなければならぬ。人口を制限するものは貧よりも富に在るといふ事、生活難よりも奢侈淫蕩に在るといふ事は、歷史上餘りに顯著なる事實である。

近頃益〻研究が進んで、最早學者の間の定說となつて居る羅馬滅亡の因由を遠く眺め、又近く我が德川氏を援けて興つた所の三河武士と、德川氏と共に亡びた江戸旗本とを對比するだけでも、直ちに明瞭する所の史實である。

第四には社會の發達は人の量に在らずして、其の質に存すといふを理由として人口を制限する事である。若しも此事を是認するならば、此の論者の言ふ所の「社會發達」は、實に唯だ物質的慾望を滿足する所の生活を意味するものでなければならぬ、最小限に於いても、物質的慾望を重大なる要素として耽る所の生活と解釋せねばならない。若しさうでないならば、質を完備にせんとする事は、何等量を制限する事を必要とせぬからである。西洋の古い訓話にも、賢人が燈火（ともしび）を持つて居る、此の燈火は何百人何千人に分與しても何等減るものでない、人間の質の眞の完備は恰も賢人の持つて居る精神光明、卽ち此の燈火に譬へられるものと同じ者でなければならぬ。況や質を完備にするが爲めに量を制限するといふ事は、全然無意義なる囈言である。事實は寧ろ此囈言と反對で、質の完備といふ事は、却て量が盛んに增大するときに致されるもので、量の完備と質の增大との兩者が相伴ふ事は、

單に人間界のみならず生物界一般の常則である。學校の盛んになつて秀才の輩出するも、入學志願者の殺到する時、教員や生徒の數多い時が其の時機であり、降つて生物界の魚類や蔬菜も、一番美味な時は一番數多く漁獲せられ若くは成熟する時である。加之、社會生活には三通りの意義がある所の、其の第一意義の社會生活、卽ち社會渾一體は、自分だけが立派であるといふだけで存立發達を遂げる事は出來ない、必ず外社會との關係に於いて存しなければならない。卽ち外社會との交、和は姑く措いて、競爭に於いて劣敗者にならないだけの要件を備へて居る事が、社會生活の存立發達の爲めに必要である。又第二意義の社會生活に於いても、人口の多少といふ事から、人口が多いだけそれだけ社會生活は濃厚になり稠密になる。百人の社會生活は二人づゝの關係を取れば、百のものを二つづゝ取つた順列の數で四千九百五十となり、十人であれば、十のものを二つづゝ取つた順列の數でたゞの二十五になる。是は二人だけの關係に就てであるが、更に三人づゝの關係もあれば、四人づゝの關係もある。それで實際は更に大きな數量の違ひになるので、卽ち百人なら百人といふ人口の總數を二つづゝ取つた順列と、三つづゝ取つた順列

と、四つづゝ取つた順列と、……百人づゝ取つた順列との、全體の總計といふことになるのである。かるが故に右に述べたる原則が出て來るので、斯樣な事は只今産兒制限の問題の際に述べるには餘りに科學的、場合に依ては學究式とも聞ゆる事になるが、總て是等の點までも綿密に考慮した上で、産兒制限の問題は批判しなければならぬ。加之次の章に述べる人口の研究から、尙ほ大處より達觀する事が必要であるのであるが、此所には唯だ産兒制限、出産に關する制産の許され得る範圍を限定するが目的であるから、此の程度に御話を止めて置く。要するに制産の許容せらるべき合理的極限は、右四通りの論究の中の、第一の範圍に止まるものと斷定すべきである。

耶蘇教では、エデンの花園に於いて、女性イブが呪はれたる林檎を取つて食うた、それが罪の始りと言ひ傳へて居る。偖て此の林檎は出産であつたか、制産であつたか、蓋し出産であつたであらうが、第二十世紀の今日に於ける呪はれたる林檎は實に制産でなければならぬ。

第四章　人口

一　人口增進

出生を遂げ、養育の恩に霑ひ得た人々の總體が一國の人口である、乃ち此の著、上篇の取扱に於いて、第四段に人口とまで考察を進めることが順序である。

一國社會に於ける人口の多少は、社會の萬般の作業から、終には社會文明に至るの規模の大小に大なる影響を及ぼす。人口には人口增進といふ積極的大事實と、人口減衰といふ消極的大事實とがある。

人口の增進は、第一に其の極めて大なる要素としては、自然增加卽ち出生數と死亡數との差引に依る增加であり、第二に國に依て大なる差等はあるが、概して頗る小部分の要素として、移住卽ち外國から此國に入つて來る來住と、此國から外國へ出て行く往住との差引勘定、此の二つから人口增進が行はれる。出生と來住とを

プラスとし、死亡と往住とをマイナスとして總體を代數的に寄せ算をする、それがプラスなれば人口の增加となり、それがマイナスになれば人口の減少となる。又出生と死亡との代數的寄せ算がプラスになれば自然移動の增加となり、マイナスになれば其の減少となる、來住往住に就ても同樣である。優生學上の考察としては、來住往住に就ては殆ど之を除いても構はぬが、一寸一言すれば、一定期間に於ける人口の增進、又は減少の全人口に對する割合、卽ち人口率は同一であるとしても、それが自然移動から來るか又は移住から來るかに依て、其の社會の强味に重大なる差等がある。乃ち一年に人口千に付十人、例へば百分の一の人口率があるとしても、內九人は自然移動に依り、一人は移住に依るといふ甲國と、十一人は自然移動に依り、一人は移住で卽ち來住を往住から差引いた殘り、卽ち外國へ出て行く數が多い爲めに、出生率は前者より九人に對する十一人、卽ち二人多いにも拘らず、結局人口率は前者と同じく十である乙國とでは、甲國より乙國が民族の增殖發展の大なることが現れて來る。更に人口率が十であるとしても、其中唯だ一だけが自然移動に依り、あとの九が移住に依るといふ丙國があれば、斯樣な社會は總に外來の來住者に依て其の人口を維持し、發達しつゝあるといふ妙な事實が現れて來る。此の三者の比較をすると、社會の自然發達性が甲國には小で、乙國には甚だ大、丙國では甚だ不完全なるを意味する。故に一定の人口率に在りては、自然移動の高い方が長所で、移住の高い方は短所である。米國の如きは最も驚くべき人口率を有つて居るが、稍〻此の短所を顯著に現す社會の一例である。

人口は世界列國に就いて見れば、人類あつてより此方、古來段々に增加し來り、殊に近時に於いて著しい。今より千百年前から百年前までの一千年間に、世界の主なる國々の人口は約三倍し、其次の百年間に又大體三倍の率を示して居る、此事は歐洲諸國に就いても、我國に就ても奇妙に一致して居るのである。唯だ我國は、德川時代の約三百年間、人口は極めて小なる一進一退を示しただけで、大體殆ど靜止の狀態を續けた。第十八世紀の初め、我が元祿義士、淺野內匠頭、殿中松の間の廊下で吉良義央を刄傷の前年には、我國の人口は約二千五百萬、實に支那を除いて世界最大の人口を有する人口上の大國であつた。此時卽ち西曆一七〇〇年、佛蘭西は二千萬、獨逸墺太利に於ける數十の小國の獨逸民族總計が二千二百萬、露西亞は千

二百萬、伊太利は千萬、英吉利は八百萬、西班牙・葡萄牙も亦八百萬、波蘭が六百萬、土耳古・希臘も六百萬、匈牙利は四百萬、和蘭・白耳義が四百萬、瑞典と當時瑞典領であつた所の芬蘭が四百萬、丁抹・諾威が三百萬であつた。當時北米合衆國はまだ植民時代であつて國を成して居らず、それより更に百年後の一八〇〇年に於いて、僅に五百三十一萬を有するに過ぎなかつた。然るに右一七〇〇年より僅に二百年の間に佛蘭西は二倍し、獨逸墺太利は四倍し、露西亞は十一倍し、伊太利は三倍半し、英吉利は五倍し、西班牙・葡萄牙は三倍し、波蘭は三倍し、土耳古・希臘は三倍半し、匈牙利は四倍し、和蘭・白耳義は三倍し、瑞典・芬蘭は二倍し、丁抹・諾威も亦二倍した。北米合衆國に至つては、僅に其の半分の百年の間に、實に十五倍するといふ盛況を呈したのである。此間、我國は維新後に於ける急速なる發展を以てして、第二十世紀の初めに於いて、尙ほ僅に六割の增加を爲したに過ぎない。今世紀に於ける駸々たる增進を以てして、今や漸うのことで支那、米國、露西亞の次に位し、獨逸と相匹敵するといふ人口に達したのである。尤も右は皆な各國共本國人口だけの比較である、茲に最近三十年間の列國本國の人口增加を更に示す所の一つの表を添へて置く。（單位十萬人、一九〇〇年――一九三〇年、＋一（クラスマイナス）は三十年間に領土の增減せるものを表はす）

國	增加割合 %	增加數（單位十萬）
ブラジル	126	218
加奈陀	81	44
米國	62	468
和蘭	53	27
日本	47	205
濠洲	45	29
＋伊太利	28	90
英國	20	77
獨逸	14	77
－露國	11	116
＋佛蘭西	7	28

二　人口減衰

一面人口增加の大勢を規制する事實として、人口減衰といふ大事實がある。人は一人の例外もなく皆な一度は死ぬ、故に一國社會の死亡が零になるといふ

事は絶對にあり得ぬ。然るに世の中には子の無い夫婦が澤山ある、故に一國社會の出生は場合に依ると零となる可能性がある。人口統計をする統計家は、一國社會の出生率、卽ち人口千人に付て一年に何人生れるかの割合、之を縱の線として一年々々横線の上に立て列べて、其線の頂點を結付けた曲線を拵へ、之を出生曲線とする。此の出生曲線が零となる時は、此の出生線を植付けたる底線卽ち軸と、此の曲線とが切合ふ時である。又更に人口統計家は同じ樣にして死亡曲線を拵へる、卽ち人口千に付て、今年は死亡が幾人、明年は幾人といふ縱の線を列べて、其の頂點を結付けた曲線が卽ち死亡曲線である。出生線は軸と合する事は可能であるが、死亡線は決して軸と合する事はない。今日の我國抔で見ると、言ふまでもなく死亡線よりも出生線が高い所に居る、此の出生線と死亡線の高さの差引を結付けた曲線が自然增加線又は自然減少線、卽ち自然移動線である。

所で今茲に或る社會に於いて出生線が段々下り坂になる、然るに死亡線が段々上り坂になるとするならば、遠からず出生線は死亡線と喰違ひ、さうして自然增加線は直ぐに軸を横ぎり、其の翌年からは死亡率が出生率より高くなると、自然增加線は軸より下の方へ落ちて來る、卽ち自然增加率がマイナスになるのである。更に、それ程でなくても、出生率が低下し、死亡率も亦低下するといふ事實が始まると、出生率は軸まで達し得るが、死亡率は決して軸まで達せぬ事であるから、晩かれ早かれ出生線と死亡線とは喰違ひ、卽ち其年に於いて自然增加線は軸を横ぎる、其の翌年からは自然增加線が軸の下へ來る、卽ち人口が明かに減るといふ狀態になつて來るのである。

今所謂文明各國に就て見ると、大體に於いて出生線は極めて顯著なる下り坂となりつゝある。流石は文明國で、多くは死亡線も亦下り坂になつて居る。卽ち生れることはズン〳〵減つて居るが、社會衞生其他の設備に注意する結果として、死ぬ方も段々減つて居る。それで安心して宜しいかといふと、そこが卽ち右述べたる事柄の目の着け所であつて、死亡は段々減つても決して零になる事は無いが、出生は零になり得るといふ必然の理由からして、何れの國に於いても出生死亡の差引勘定、卽ち自然增加が一時一寸增す事があつても、結局段々減りつゝあるといふ、右の狀態があるのである。それが愈〻進んで、例へば出生も千人に付て十三人、死

亡も十三人となれば、人口は今年は增さないといふ事になり、翌年は出生が十二人八分、死亡が十二人九分となれば、明年は一分、卽ち一萬人に付て一人の割合で減るといふ事になる。故に斯樣に人口減少といふ事が無いまでも、要する出生率の低下、卽ち統計家の拵へる出生線の下り坂といふ事があれば、業に既に其の國民は早晩人口の減少といふ淵に向つて急ぎつゝある譯で、人口が明かに減少せぬまでも此の顯著なる事實が起つて來た其時から、斯樣なる社會に於ける人口狀態を名づけて人口減衰と云ふのである。卽ち出生率の低下といふ事は直ちに人口減衰を喚起す事となつて居るのである。

洵に申すも氣の毒なる一例であるが、佛蘭西の如きは、其前にも一寸あつたことで、更に今を距ること二十年前、一九〇九年に於いては、半期に二萬八千二百二人、一九一一年には一年に三萬四千六百四十八人の人口減少を呈出した。是は餘りに深入りした事實であるが、人口減衰は佛蘭西に於いては一八一五年から始まり、英吉利に於いては一八五〇年から、獨逸に於いても亦一八七〇年代から始まつて居るのである。併し流石に獨逸はまだ餘り深入りする程に至らないが、佛蘭西、英吉利は右の通り。北米合衆國では右に述べたる移住との關係があるので、人口總數はドン〳〵增して居るが、土着の白人だけで見ると、其の人口減衰は頗る著しいので、識者が極めて心配して居る。最も驚くべきは、廣漠たる五百萬方粁以上の土地を有し、僅に四百萬を數へたに過ぎなかつた所の濠太利に於いて、既に二十餘年前から人口減衰が顯著に始まつて居る。

斯樣なる事實に直面して、自覺あり反省ある政治家の若干を有して居る所の右の各國は、何れも此の悲しむべく恐るべき社會病を喰止めるべく努力を吝まなかつたのである。乃ち佛蘭西は一九〇二年に識者政治家其他の選ばれたる人々を以て組織せる人口減衰對策調査委員會を造り、更に一九一二年に於いて組織を新たにして之を更新し、英吉利は國王陛下の勅語を以て開會せる國民公道會（National Council of Public Morals）と名づける、道德的の立派なる名稱を有する同樣の大機關を設立し、濠太利は一九〇五年に同樣の大委員會を造つて、既に一九一一年に於いて一通り其の調査の結果を公けにして居る。米國は近代有數の政治家且つ識者とも云ふべきセオドル・ローズヴェルト君が、一九〇五年に於いて夙に米國の國民全體に向つて警告を發して居る

――米國國民は今や「民族的自殺」(レイス・スイサイド)といふ大罪を犯しつゝある、之を止めるでなければ、米國は餘り遠からざる將來に於いて弱小國の地位に墮ち、遂に民族的死滅の悲慘なる狀況を運命とせねばならない。――君の所謂「民族的自殺」は卽ち產兒制限の濫行を意味するのである。米國に於ける產兒制限の濫行が卽ち是れ民族的自殺なりと云ふのがローズベルト君の認識並に判斷であるが、佛蘭西の如きは、若し此の人口減衰の勢にして熄まずんば、第二十世紀の末年には、今の白耳義級の小國になるであらうといふのが、極めて正確にして、且つ如何ともし難い算數上の判決である。

三　人口減衰の因由

人口減衰の由つて來る所の因由は大體二つの方面から考察せられる、一つは生活物資の問題で、今一つは風俗道德の問題である。素人の直ぐに氣が付き、且又頻りに言ひたがることは、一國社會に於いて、人口が以前程捗々しく增さないといふ事實に直面すると、直ぐにそれは一國社會の生活物資の供給に限りがある。故に其の限りの點に近づけば近づくだけ自然に生活が窮窟になつて、人口の增し方が衰へて來る、是は自明の理でないか、とかやうに言ひたがる。曾に素人のみならず、人口論を以て世界の歷史に最も大きく輝いて居る所の學者マルサスでも、矢張主として此點を强調し、此の基礎原理の上に立つて種々の議論を構成したのである。我が德川時代に於ける前後約三百年間、大なる人口曲線の波動が無かつたといふ事も、是で說明せらるゝ事が多い。如何にも素人じみた考ではあるが、是も確に一面の事理を說明するもので、全然之を閑却する事は、學術的公明なる態度とは云はれない。

如何にも、一國社會に於いて生產する所の生活物資の供給は、大體に於いて其の時代の人智の進度に應じては一定の極限がある。次第に人口が殖えて、社會全體としての生活物資に對する需要が增して來れば、此の需要と其の供給との間が次第に接近し、續いては促迫が起つて來る、殊に外社會からの物資流入を阻害する鎖國生活に於いては、此の緊迫の時代が極めて早く到着する。丁度我が德川時代に於ける人口並に物資の關係は、此の最も惡るい關係狀態に於いて在つたのである。

徳川時代に於ける人口增進の甚だ遲々たりしのみならず時々大饑饉が襲ひ來つて、人口の激減を來たす場合も屢〻あつたといふ事は、大體是丈けでも立派に說明の付く事實である。加之徳川時代に於ける大饑饉の來襲は、實に奇妙にも五十ケ年毎に一度づゝあつたのである。著名なる享保十七年の大饑饉には約そ百餘萬の人口激減があり、それより丁度五十年にして起つた天明三、四、五年の大饑饉には約そ二百餘萬の人口減失があり、それより又更に恰も五十年にして起つた天保七、八年の大饑饉では約そ六十萬の減失があつた。何故に斯く凡帳面に五十年を一期として大饑饉が起り來つたかを顧みれば、一層人口減衰に對する生活物資の供給の極限が、强く働いて居る事を說明する材料になる。乃ち人口が段々增して、一定の生活物資の供給では最早是れ以上增す事が出來ぬとなつても、そこが人間の生活であるから、又大きな社會生活であるから、尙ほ數年間は遣繰や無理を重ねても增加人口を收容する。其の狀態は恰もゴム風船に瓦斯を詰めるやうな譯で、是からは無理だと云うてからも、尙ほ百分の一や千分の五位ゐの瓦斯を詰めて、將にハチ切れやうとして居るやうな狀態になり、そこへ一寸蠅が留まる、スルと直ぐに其の風船はパンと破裂する、蠅が其の風船を破裂さした原動力でなく、無理に無理を重ねて過度の瓦斯を詰込んだといふのが主たる事由であり、上に極めて微力なる蠅が留つたといふのが口火になつて、此のゴム風船破裂といふ花火が爆裂するのである。爆裂力の强大なる主たる事由は、口火に非ずして花火の蓄へて居る多量の火藥の力である。今我が徳川時代に於ける右の三大饑饉に於いて、花火の蓄へて居る多量の火藥に該當するのが、無理に無理を重ねたる增加人口の收容で、偶〻其際、一兩年饑饉が續いたといふ事は、丁度花火ならば口火、ゴム風船ならば蠅が留つたに較ぶべきものである。多少の不作は必ずしも五十年を待たず、二三年毎にあるものである。併し何故五十年といふ一定期間が入用であるかといふと、それが卽ち火藥の多量といふに該當する、人口が一定の極限に達したといふ事に外ならぬ。斯樣にして我が徳川時代は、人口減衰の事由としての、特定社會の生活物資供給の、特定の極限が、頗る强く且つ明確に働いた事の極めて好い事例である。

併し單に是丈けを以て人口減衰の事由を說明し了るとするならば、それは甚しく膚淺にして輕率なる態度と云はなければならぬ。若し是丈けが人口減衰の唯

一事由であるならば、嚮にもチラリと述べたる羅馬の滅亡は、貧の爲めに非ずして、富の爲めであるといふが如き、大なる歴史的事實は何に依て起るか、茲に我々は一つの重大なる社會經綸上の反省をする事が必要である。それは卽ち第二の大事由である所の風俗道德の頽敗といふ事に外ならぬのである。人口減衰の主なる事由は、生活物資の供給の極限よりも寧ろ風俗道德の頽敗が更にして重要なる事である事を知らなければならない。一九一〇年に英吉利の人口減衰に對する對策調査の重大機關の開設に對して、其の名稱を「公衆道德の國民的國家的審議會」(パブリック・モーラルス・ナショナル・カウンシル)之を約めては「國民公道會」と名づけ、何等物資供給の多寡抔いふやうな、經濟的物質的の意味を藥にしたくも含んで居らない名稱を採り、且つ其の開設式の際に、英國王からして重大なる勅語が降つた。其中に「國家國民の光譽を對揚する基礎は各人の家庭に存す我が英國民族の家族生活にして一旦其の强剛質素及純潔を失墜せんか忽ちにして此の基礎は動搖し解體せざるを得ず」といふ痛切なる文句すら入つて居るといふ事は、實に單純なる經濟問題として人口減衰が斷じて取扱はるべきものでないといふ事を、而して其の重大なる事由は、實に繫つて風俗道德の問題に存するといふ事を明かにしたものである。

如何にも英國に於いて、其の貴族の生産年齡に於ける各夫婦の産兒數の精密なる統計がある。一八三〇年より四〇年に至る、卽ち一八三〇年代の十ケ年間には、一夫婦の産兒數が七・一であつたのが、一八四〇年代では約六・一、飛んで一八七〇年代では四・四、一八八〇年代では三・一、卽ち一八三〇年代より一八八〇年代に至る五十ケ年間に於て、一夫婦の生む數が七人より三人に低落して居る。是は畢竟制産卽ち産兒制限、卽ち新マルサス主義の公然たる宣傳——例へばベサント夫人(一八七六年から七八年)チャールス・ブラッドラウ等、又贊成的態度の一例を擧げればドリスデール(倫敦大學理學博士、其著「小家族制、果して有害又は不道德なりや」一九一三年)——と、更に其他無數の暗默なる制産實行の蕩々たる勢との、必至にして避くべからざる効果が明白に見られるのみならず、單純に經濟物資供給の多寡、生活の難易といふやうな、純然たる經濟的方面からは何等說明の下し難い一つの大なる事實である。右英國の國民公道會の事業の一つとして、國民出生率調査部(ナショナル・バルスレート・コンミッチー)がある、其の調査報告(一九一六年)『出産率の遞下』と題し出版)で、制限婦人卽ち産兒制限を實

行して居る奥さん達は、四百七十七人の奥さん達の中で二百八十九人即ち百分の六〇・六、其中に性交を慎しむ慎性交者、即ち不用藥品者は制限婦人二百三人の中百百五人、即ち百分の五一・七で、是等二百三人中の九十八人、即ち百分の四八・三は、皆な用藥品者であるといふ事が明かになつた。尙ほ是より先き、日本にも來たシドニ―！ウエッブ君の一九〇六年に於ける調査に依れば、有識階級で百二十配偶中百七の制限者と、僅に十三の無制限者とがあり、其の平均産兒は僅に二兒以下といふ事實が擧つて居る。是に於いて人口減衰の大事實が出て來、此の事實は爲政家、學者の研究調査を促し、學者の中ではアルセーヌ・デユモンの『人口減衰と文明』の如き有力なる著述は、夙に一八九九年を以て世に現れて居つたのである。ズッと近く一九一三年に我々の畏敬する先輩學者、ポール・ルロワボーリウ君の『人口問題』も出て居る。乃ち佛國や濠洲や英國の如き皆な有力なる特別機關を設けて、熱心鋭意此の大なる社會病弊と闘うて居るが、深く根ざして居る難症は、容易に回春の兆を示すに至つて居らない。

茲に一寸、幾分か學究的ではあるが、マルサス說、並に新マルサス主義といふ學術的名稱の紹介批判を簡單に挿入する。マルサスは宗教家で、今より約そ百七十年程前に最も其の學說的活躍を盛んにし、生活物資の供給と人口增減の關係とを論じ、世上百般の貧困及び之に伴ふ人間の困窮並に墮落は、人口の過多なる事が甚大の原因となつて居ると斷じ、そこで道德的なる慎み深い敬虔の心術と態度とを以て、ストア流の禁慾生活を適當に加味して以て人口增殖の過度にならぬやうに制限せねばならぬと主張したのである。であるからマルサス說では、單に道德的制限に賴つて婚期の晩れる事と、性交の節制とを豫想するだけで、何等出産に對する人工的制壓を加ふる事を豫想しなかつたのである。

然るにズッと降つて近時から現代に於ける所謂新マルサス主義といふものに至つては、其の名目だけは同じくマルサスを祖述するやうに聞ゆるけれども、實にまるで雪と墨、月と鼈ほどの正反對で、マルサス說がストア流の高潔なる生活を高調すると反對に、全くエピクル流の享樂生活を容認し、婚期の晩れるを必要とせぬ事は勿論、性交の節制抔は、何等之を奬勵するどころではなく、總て是等の事を亂雜に、不しだらに、やり放題にやらせつゝ、唯だ人工的の方法を以て、懷胎並に出産の可

能を抑壓する事を精々やらなければならぬと力說するものである。マルサス說の新マルサス主義との根本的の相違、根本的の反對は最も注意を要する所である。ルロワボーリウ君が苦々しい筆致を以て紹介して居るやうに、識者の間に、又一般通俗の間にも名づけられる彼の「自覺的產兒」(ジエネラシオン・コンシアント)、「墮胎の事由」(リベルテ・ド・アヴオルトマン)、「制限家族」(ファミリユ・リミテー)甚しきは一般の道德論者の糺彈排斥の言葉である所の「相婚自淫」(オナニズム・コンジユガル)、又「單婚賣淫」(モノガマス・プロスチチユシン)といふやうな新しい言葉は、是れ全く新マルサス主義の產物、又は此主義に對する咀ひの產物であるのである。尤も此の主義の實行は頗る古い、マルサスのまだ世に在つた時(一八三四年に歿す)既に英國に於いて(一八二〇年乃至三五年)此の主義の宣傳運動があつた。市俄古大學のジエームス・フィールド教授が『米國經濟學評論』に「英國人口理論に於ける夙昔の宣傳運動」といふ論文を揭げ、此事を詳に說いて居る。勿論マルサスが達者で居つた時でも、彼れが少しも此の運動に同情したり、何等參加抔しなかつた事は申すまでもない。

右英國の態度、並に米國のローズヴェルト君が、產兒制限を「民族的自殺」といふ警句を以て糺彈せるが如きは、實に人口減衰が經濟的事象たる以上に風俗道德的事象たる事の、正鵠を射た、急所に觸れた、見識の最も正確なる、靑天白日を望むの概ある學術的喝破である。我が德川時代の事實に顧みても、其の風俗上道德上の半面は「中條流」の大繁昌、川柳點の傍からする幾多の證明、白河樂翁公が三疊敷より大きい圖を畫師に作らせて、間引をやる連中の地獄に墮ちる圖で此の惡俗の矯正を圖つたこと、(此の圖は今も內務省に藏してある)岡田寒泉が土浦藩の執政として此の救濟を圖つた事(尤も是は兒が生れると扶持を取らせるので、半ば經濟主義をも加味して居る)等に察すれば、思半に過ぐべきである。

茲に醫學者の確說を引用することは、社會學者の定說と相待ちて社會經綸の上に大造あることと信ずる。近く惜くも物故せられたる氏原佐藏博士(內務技師東京日日新聞)は極貧なる下等社會の者のみに產兒制限の知識を授け、これに成功を收めてゐる邦國が世界の何れにありや。英國の牛津、劍橋大學卒業者は平均夫婦間に二人七分の子供しか持たないのに、英國の勞働者は一夫婦平均六人以上を產んでゐる。米國の『フース・フー』に載つてゐる紳士の有する平均子女の數は二人四分なるに、同國筋肉勞働者の產兒數は六人四分といふではないか。民族衞生學や優

生學が文化國において必要を痛感せられるほど國民素質の惡變を來したのは、中流以上者の出產遞減と下層社會の多產とに關係なしと何人が斷言し得る者ぞといひたい。

佛國は五十餘年前の一八七四年に人口千につき出產率は二六・一であり、その後の五十年間同國は人口遞減を挽回せんと焦慮しながら、一九二六年には却て一八・三といふ世界有數の最低出產國となつたではないか。また一八七四年當時のイタリーはこの率三四・九、英、威國は三六・〇、ドイツ帝國は四〇・一であつた。五十年後の一九二六年には、ムッソリーニは生めよ殖えよと號令しても、イタリーは二七・二に下り、英國は一八・三の半數、ドイツもまた一九・五といふ半數以下に低下してゐる。

今や歐洲といはず、米國までも出產率低下の挽回策に腐心しながら、何れの邦國も成功は覺束ないのである。出產率遞減の兆は招かずして文化國には來るものである。一度び國民の自由意志に基く人口遞減來らんか、これは國家の力、國法を以てよく挽回し得る所でない。

一人の知識は、その一人一代に止まらない。佛國の娘の嫁入道具には日本人の盥を持參すると同樣に、ブチ・シュヴレットを持參し、その母親が、若い時代の幸福を少しでも永く味はゝんとせば、月々の見るべきものが、一二週間滯ほれば、何々の藥品でかうして洗へよと敎ふるに至つては、病すでに膏肓に入つてゐる。

單に一個の行政家でありながら、技術上の確信なきものを、さも有効らしく吹聽し、又宣傳により產兒を制限し得べしとの誤解を一般民衆に懷かしめたとせば、そは少くとも上に立つ爲政者の態度ではないであらう。

と痛論せられ、更に杉田直樹博士は（上同）

產兒制限は主として思想問題として討究すべきものではなくて、實際問題として對個人的適應症の點を深く講究すべき必要があるのではないかと思ふ。近時世の風紀のみだるゝにつれて、花柳病豫防の道具や方法並に藥劑等がそのまま避姙の目的にも利用されるやうになり、これによつて不知不識の間にその人の生殖能力が侵害されつゝあるのを氣付かぬ者の多いのは考ふべきことだと思ふ。米國で實際あつた話に、或低能な娘に遺傳防止の目的で斷種手術を施し

た處、附近の青年達はこれを知つて、あの娘は妊娠のおそれがないといふので、安心して盛に誘惑を試み、却てこの娘が甚だしい花柳病蔓延の媒介者になつたとのことである。避妊の知識を不必要に世に宣傳することが、丁度これと同樣に世の風教上に思はざる危險な結果をもたらす如きことに立ち至らないやうに、吳々も戒心すべきことと思ふ。

と述べられて居る。「通り拔け無用で通り拔けが知れ」、古い川柳子の方が餘程今のなま爲政者よりもわかつて居る。

四　具體的事由

そこで人口減衰の具體的事由を茲に少しく列擧して、優生學的注意を喚起する事が、本著の任務として缺くべからざる所である。人口減衰は大別して、凡そ四通りの事由が入り混つて現れる現象である。

第一類は生理的事由である。其の一つには各種の避妊法が實行せられ、殊に日に月に其の遣り方の種類が樣々に新しく出て參り、且つ多くなる事である。二つには酒を飲む事が段々增進し、殊に酒の種類が日進月歩で、飲合せの機會が甚だ多くなる事である。三つには惡疾の增進である、性病を中心とし、其他各種の惡疾が、醫學の進歩並に醫術の較〻たどたどしいながら兎も角も若干の進歩をして居るに拘らず、殊に爲政家の死物狂ひの努力にも拘らず、所謂文化の進むと共に、容易に下火にならない事である。「文化は黴化なり」（チヴイリザチオンジブイリザチオン）といふ諺は、言葉としては餘りに陳腐の極であるが、事實としては常に新鮮であるといふ事は、洵に歎ずべき文明の恥辱である。四つには樣々の惡習、殊に性關係に於ける惡習の盛んに行はれる事である。五つには夜更しの惡俗が、所謂文明生活が進めば進む程盛んになり行く事である。第十九世紀と二十世紀との間合の頃には、伯林の街の目貫の所で、所謂歡樂鄕は夜の十一時に略ぼ終りを告げたのが、僅に十年後の一九一〇年の頃には既に二時間延びて午前一時となつて居る。巴里では、大體總てがそれより三時間づゝ先きへ進んで居つたのである。我が東京生活でも、近頃では靑電車赤電車といふものが段々夜晩く、否な寧ろ朝早くまで延びるの傾向が著しい。

第二類は經濟的の事由である。一つには奢侈の增進で、所謂文明が增進し、富が

發達すると、古今東西何れの社會に於いても、殆ど必然的に伴ひ來る現象である。然るに奢侈は多くは生理上の害毒を伴ふもので、然も此の害毒は人口減衰の原因となり易い方面に多く存して居る。二つには奢侈と反對に見ゆる所の、過儉から來る榮養不良等の狀態である。一寸見て雪と墨のやうにある奢侈と過儉とは、實は極めて密接なる兄弟分で、事實は殆ど必ず相伴ふものである。我國の諺にも「傾城買の糠味噌汁」と云ふが、傾城買は奢侈で、糠味噌汁は過儉である。世界豪奢の府で一擲萬金が盛んに行はれる巴里に於いて、此の過儉現象が頗る顯著に見られる。勿論巴里土着の人々は何も一擲萬金をやる譯ではないが、過儉の優生的反價値卽ちマイナス性は、人口減衰の經濟的事由として大に注意を値ひする事である。三つには經濟的欲望の增進である、奢侈が進み、爲に過儉すらも人々が往々敢てするといふ事實の半面には、手細い經濟生活の裏面にまでも、經濟的慾火の盛んに燃え立ちつゝある事は想像せられる次第である。一たび此の慾火が燃え上ると、所謂「心を以て形の役と爲す」の物慾に煩悶する精神狀態が實に慘めなる程度にまで人間を墮落せしめる。比の欲望を滿足するの王城宮殿とも云ふべき三越、白木屋、松屋、松坂屋、美松、布袋屋等のデパートメント・ストアが、一面に於いて萬引技術の共進會場、並に萬引捕手の金鵄勳章競技場となりつゝある事は、此の慾火の噴火山的爆裂と見て宜しい。

第三類は心理的事由である。一つには所謂文明生活に於ける心理的刺戟の大は益々大に進み、且つ其數も頻りに起り來るといふ事柄である。現代の文明生活は、殆ど四六時中文明の刺戟から隱れ家を求める事の出來ないやうに、現代人を壓迫しつゝある。一寸外へ出れば壓付けられるやうな、俗惡なる强烈なる色彩を以てする看板や廣告に壓迫せられる。靜に家庭に於て仕事をして居ると、直ぐ其の近傍のチンドン屋が襲擊して來る抔はまだ生やさしい方で、何等の必要もなきラヂオが、約束もせぬのに、猫の額のやうな狹い所に群集して居る何十戸の小さい矮屋で、一軒の家庭に於けるラヂオの音が比鄰數十戸に響いて、喧ましくて堪らないといふ狀態、其上文明生活の眞髓ともいはれ、呪うてはならぬ事ではあるが、電車の音、鐵道や汽車の音、所謂街頭の騷音、此類が亦必然的に一年は一年と激しくなつて來る。人各々其の事業に忠實であるから、他人からは咎めるに當らぬ事であるが、

夜になるとネオンサイン抔も、偶まに田舍から出て來れば本當に東京氣分に浸るやうな心持はするが、要するに無用の刺戟を東京人が盛んに蒙つて、神經衰弱の一路へと急ぎつゝあること、是も亦見逃すべからざる事である。同じ文明生活をするにしても、成るべく刺戟を避ける事に、修養の達人が列國の中にはある。倫敦の街で、其の最も繁昌するオックスフォルド、ストリート、ピカデリー邊りでは、午前八時頃からシーンと響くやうな、萬、避け難い音の集合だけが聞ゆるが、佛蘭西巴里へ行くとハヤ之に較べて稍〻騷音が混り、殊に新聞の讀賣抔は何等の遠慮なく混つて來る。西班牙のマドリッドへ行くと、是は亦世界中騷音の喧ましい事で最も有名である。此點になると江戸時代から宵越しの錢を使はぬ勇肌の江戸ッ兒の風習が、江戸城明渡し以後六十四年後の今日と雖も、矢張何所かに殘つて居る譯で、無用なる騷々しさに就いては、日本も亦英佛の側よりも西班牙の側に近いと申さねばならぬ。近頃學者が新宿の町筋に於いて、午前五時より午前一時に至るまでの二十時間に就て騷音の程度を研究した成績が、一ヶ年程前の『科學知識』に載つて居る。ラヂオのお得意さん達は、皆な十坪二十坪の住宅でもあるまいが、其の家屋の大小に應じて、其の音響の大小を適當にし、近所合壁の迷惑にならぬやうに高聲機の加減をする位の事は、せめては皮相ならざる文明的設備として、放送局や遞信省で最早多少注意してもよい時分である。更に斯樣なる事實がある、野蠻人と文明人とが接觸すると、野蠻人は强烈なる刺戟の壓力に堪へずして、次第々々に子供が生れなくなり、壽命も縮まる。此の刺戟の中には、嚮に生理的事由の條下に擧げた强烈なるアルコール飲料抔も含まれて居るが、斯樣に文明が野蠻人に對して壓迫を及ぼす事は、亦現代文明が文明人に對しても、矢張相當の壓力を及ぼして居る事の證據である。面白いに付け、面白からぬに付け、文明を享樂するといふ事は矢張人生の一つの大なる負擔である、卽ち氣力の一大消費であるのである。此點は重要なる社會現象、又優生的反事實として、社會經營者の十二分なる注意を要求すべき所である。

心理的事由の二つ目に擧ぐべきは、政治的革命、又は政治的事變が、兎角現代文明各國の社會に於いて頻々に出て來る事である。殊に佛蘭西に於ける革命以後約そ一百餘年間に於ける政治現象は、餘りに此の適例を顯著に提供した。佛蘭西が

人口減衰の先進社會である事の事由の一つとして、學者が之を見遁さなかつたのは洵に當然の事である。さらでだに心理的刺戟が斯く力强くあるに對し、斯樣なる政治的現象は、亦有力なる心理的事由の一つを提供する。茲に特に一目を立てる程でもないが「代議政治」といふものは、精々良い所で、政府當局に餘り大それた惡事をさせなくなる事は出來ても、何等積極的に建設的に良い事が出來るものでない」といふ理由を以て、代議政治が亦人口減衰の事由の一つであると數ふる、例へばローズ・アダムスの『諸國民の成長』抔がある、此の著者は印度の土人、並に南阿弗利加の黑人と、印度又は南阿聯邦に於ける白人との比較の例を擧げて、直接稅が嵩まる事をも亦人口減衰の原因の一つに數へて居る。是等は政治的と共に幾分經濟的の關係もあるが、一寸參考の一端として序に紹介して置く。

第四類は社會的事由である。其の一つは一切の道德生活の沒落、又風俗の頽敗であるが、具體的事由の一つを擧げると、其國の首府や大都會を外國人の遊び所とする事から來る道德生活の低下、風俗の墮落は容易ならぬ事柄である。我國でも近頃國際觀光局抔が出來て、其の豫算が取れるとか取れぬとか大騷ぎをして居る樣子であるが、金儲一片で自國の品位を低落する事に無頓着でよいなら、貧乏の爲めに可愛い娘を憂き川竹に沈める事も、何等非難するには當らぬであらう。外國の旅人といふものは、其の本國の風習が窮窟な程に立派であればある程、他國へ出て「旅の耻は掻捨て」をやるものである。其の小規模なる例は、近く我國でも神聖なるべき神社佛閣の屹立して居る處に、其の附屬設備として、殆ど必ず風俗上如何はしい物が存して居つた、といふ事實を、少しく學究的でなく、仙人的でなく、山師又は俗物的でもなく、純眞の頭で、然も鋭利なる常識を以て考へたならば、直ぐ此の重大なる社會事實に氣が付くべき筈の事である。更に之を押擴めて、色々の國內限りの事柄でも、汎く世の中に言はれる所謂お祭騷ぎ、之が頻繁に行はれる事は、其の所謂お祭の內容實質の如何に依て、固より價値の上に千差萬別ではあるが、お祭騷ぎ其事が多數の人々を呼集め、集つて來る時、集りから歸る時は勿論、集つて居る時、要するに其のお祭騷ぎに出掛けてから、スツカリ濟んで歸つてしまふまでの間が、矢張極めて小規模ながら、右外國人心理を兎角伴ひ易いものである。近頃神宮外苑の競技を首め、全國各地から色々純白無垢なる青年學生其他が集つて來、又各種學

校が競うて修學旅行と號して、少なからざる學資金を費して遠方へ出掛ける。是が一種の修學上の利益である事は固よりであるが、之に伴ふ弊害も亦餘程考へる必要がある。其の弊害が目に餘るやうになると、そこで漸う新聞種になるのであるが、新聞種といふ水平線に達せぬ程度に於いて、既に高低幾多の差別はありながら、相當の弊害を醸しつゝある事は特に注意を要する所である。修學旅行が、一週間で神武天皇以來今日に至るまでの各種の歴史上の事蹟を見たり、又は今日は歴史上の事蹟、明日は石炭工業の實地見學、明後日は築港の視察といふやうであれば、費用や時日は嵩んでも、如何にも修學旅行の名に反かないが、今晩は熱海、明晩は湯河原、明後晩は箱根宮の下といふやうに、毎日々々溫泉巡りをやつて、毎日毎晩曾我物語や頼朝の事蹟位ゐを話して居るのでは、何等修學旅行に數日を重ねる利益があらうとは思はれない。是等の點は、優生的反事實の取扱としては枝葉末節に類するけれども、當事者が餘り超邁なる識見の持主でない場合には、事によつたら氣が付いて居らぬかも知れぬから、一寸序ながら苦言を呈して置く。

社會的事由の二つに擧ぐべきは、勞働忌避の消極經濟の流行する事である。勞働をして金を儲け、それで生活を支へて人生の愉快をも享受する事は、優生上何等反事實とはならないのみならず、非常に結構なる民俗の改良上進の本である。然るに經濟上には獨立する事に相違ないが、散々稼いだ又は儲けた後に一定の資本の持主になり、例へば公債や株券を持つてそれの節季々々の配當を以て、立派に經濟生活を營んで行くといふ事になると、何等勞働を伴はず、所謂「しもたや」の生活になる。此事は西洋の列國にも、殊に佛蘭西邊りで盛んに行はれたので、彼國の人口問題研究の學者は、之を明かに人口減衰の事由の一つであると斷定して居る。蟬に對する螻蟻の違ひで、夏の中にセッセと稼いで、老後生活の安定を完全に致す爲めに資本を蓄積するといふ事は、社會經濟の上に非常に結構なる、一種の功勲として歡迎するべき事であるが、唯だ此の勞働忌避といふ事は、洵に優生上に忌々しい事になるのである。

三つには相續法の特色から來る所の優生的不利益がある。長子相續であれば、親の資産は纏つて長子が相續する、諸子分配法であると、分配の爲めに財産格が下る。百萬圓の遺産を五人の子供に分配すれば、百萬圓の財産格から二十萬圓格に

下る、それがイヤだといふので子供は成るべく產まないやうに氣を付ける。我が現行の相續法は丁度其の折衷のやうなもので、遺留分の仕組は長子が半分、其の以外は諸子に分配してもよし、しなくてもよいといふ譯であるから、右は我國には何等當嵌らない、洵に結構なる法律の下に心配するには及ばぬ事であるが、西洋各國、殊に個人本位の思想が法律にも横溢した時代に於いては、優生上にも斯樣なる惡影響を及ぼす事になつたのである。

四つには男女の結合、及び男女間の敬愛が如何にも外面的、虛衒的である事が、亦人口減衰の社會的事由の一つである。此事は兎角西洋の、餘りに喧ましく女性尊敬を道德風習が要求する國々に兎角に起り易く、而して汎く見られる事實である。所謂儒敎の弊として擧げられる若干の形式化、虛衒化が、東洋嫌ひの東洋人に依て指摘されるが、如何に西洋好きの東洋人でも、此の事實を見せ付けられたらウンザリせざるを得まい。一寸船に乘つて四五十日間も航海すると、苟も少し許り浮世の風の經驗のある者、純然たるお坊ちやんでない限りは、此位の社會觀察は專門家でなくとも出來る筈、畢竟右の東洋嫌ひの東洋人達は、世間を見ないからの井蛙的管見を振廻すのである。結婚要求の苦痛は一種の樂しい苦痛であるが、離婚要求の苦痛は實に生きながらの地獄、八大地獄ではない、一種の第二十世紀文明の地獄であるのである。是等の地獄的現象に就ては、西洋そのものの學者であるマツケーブ君が、耶蘇敎各派と離婚との關係の歷史的事實的研究に於いて、極めて活々と書いて居るのである。

五つには宗敎上の禁慾生活である。是が亦風習、殊に制度として隨分强烈に東西各國社會に現れて居る。見るなと言はれると見たくなる類で、禁慾生活を完うに守り了せるといふ其人の豪さは實に偉大なるものであるが、斯樣なる千百人に一人のえら物を拵へる爲めに、多數の犧牲者を出すといふ事は、畢竟基督敎等の敎祖若くは大先達も餘りに殘酷なる仕打であると、不肖講者は敢て茲に公言するのである。其の優生的影響が如何であるかに就ては、多少專門違ひであり、醫師、醫學者、生理學者、解剖學者ならぬ、唯だ聊か精神病學の學徒としての經歷を有する講者が、敢て細目に涉つて具體的に述べやうとは試みぬ。

六つには家庭求心生活が段々と廢れて、世間遠心生活が段々と流行つて來た事

である。總て教化、又は經濟、乃至娯樂の末に至る迄、成るべく家庭で其の要求を充たす事が、社會學上で家庭求心生活と名づけるものである。之に反して一寸退屈凌ぎにも直ぐ家庭外へ出て、卽ち世間が供給する所の娯樂を取る、家庭で細君の手料理に親子一家團欒して晩餐を攝る代りに、直ぐちよい〳〵外へ出て飲食をする、此類が卽ち世間遠心生活である。西洋各國は固より、東洋乃至我國でも、兎角都會生活、殊に大都會生活、首府生活になると、此事が近年殊に顯著に行はれて居る。而して地方にも、乃至農村山村に至るまで、――是は間接には政治的原因もあるが――選擧や其他が屢〻行はれる所から、如何はしい飲食店抔が大變に殖えて來て、役場吏員や關係者を首め、ちよい〳〵さういふ所で小さなる宴會を催す事が盛んになつて來る。さては一般が矢鱈にさういふ所で飲食をし、其の飲食店が蓄へて居る給仕女の給仕に預り、更に追々近邊の町から藝妓を呼ぶ事に、次第々々に深味へ入る。大都會では亦大人や青年に限らず、子供に對してまで、或は子供芝居とか、或は何々興行の子供デーとかいふやうな事で、格別本人としてはそれを希望するだけの年輩にも達せぬ者にまで、早く既に家庭求心生活に對する叛逆、世間遠心生活に對する洗禮を施す機關と機會とが、年一年と盛んに出來掛つて來つゝある。斯樣なる生活が優生的に如何やうなる影響を及ぼすか、成程氣分の轉換といふ事だけは明かである。而して氣分の轉換を多少する事の必要は何人にもある事は勿論である。勤め人が日曜、或は月に二度、或は月に一度、昔なら年に一日の藪入り、是等は明かに人の性の上から絶對に必要のある事に相違ない。併しながら世間遠心生活の、寂しい實情を見れば、如何に其の恐るべきかが解る。夫婦二人の暮しで、細君は細君で始終近所の料理屋で寂しい食事をする、夫は夫で役所若くは勤先から歸つて來ると亦一人で寂しい食事を攝る、斯くの如き生活、殊に現代の忙しい生活に於いて、家庭といふものが殆ど有名無實になるべきは言ふまでもない。英吉利人は何故植民政策に成功し、佛蘭西人は何故植民政策に不成功であつたか。三百年前には英佛轡を並べて今の北米合衆國の植民地に相馳騁した。世界各地に於いても亦斯くの如くであつたが、今や成功せるものは英吉利だけで、佛蘭西は甚だ振はない。其の原因は何であるかといふと、英人は今日に至るまで、家庭求心生活の歐米に於ける殆ど唯一の模範的民族である。故に假令山中の一軒家にも、家を提

げて植民する所の英吉利人には、忽ち住めば都となるのであるが、佛蘭西人は愉快なる勢力の淵源たる家庭を構成して營む所の家庭求心生活が甚だ不得手である、植民地へ行くと實に荒凉落寞の感に禁へない、故に早く金を貯めて佛蘭西へ歸り、巴里の歡樂に浸らうとする。是が右、英佛二國の間に植民上成敗得失の岐るゝ所以となつて居るといふ事は、夙に學者の定論である。植民事業に於ける重大なる成敗得失の分岐點である事が、亦小規模ながら更に深刻なる優生的價値若くは反價値を生せずに居るべき筈がない。天才的地理學者故人志賀重昂君に依て喝破せられたる、一種の島國と名づけられたる越後に於いては、中流以下は勿論、中流以上の家庭に於いて夙に家庭求心生活が發達した。さて越後人は曾ては北海道、近くは臺灣等で植民の成功者である。然るに近代の風が農村にも吹込んで、此の家庭求心生活が聊かでも影が薄くなり、遂に之が崩壞に至る曉は、直ちに是れ其家の、其の門閥の崩壞の日であるのである。所謂新潟其他の大都會に於いて銷金窩的生活は、世間遠心生活の唯だ一種の例に過ぎぬが、銷金窩そのものが何も主たる害惡ではない、家庭求心生活の崩壞が、卽ち重大なる禍の源であるのである。要するに家といふものが初めから發達せなかつたといふ社會、又は初めは相當に發達して居つても、それが段々に衰廢する事が、人口減衰の社會的事由の根柢に横はる不祥事であるのである。

五　人口政策

人口の優生的論究を說いた上は、百尺竿頭一歩を進めて、茲に人口政策に就ても一言述べねばならぬ。生活物資の供給が若しも固定して增加する事ないやうになると、生活物資と人口との間に鬪が始まり、相殺が現れる。此の相鬪の手續は一に饑饉、二に疫病、三に戰爭、四に減民政策である。饑饉で生活物資が人口を抑へつけるか、疫病で人口が生活物資の前に降參するか、戰爭で人口が減つて生活物資の前に一息吐くか、是等が事實上屢〻現れた事で、我が德川時代では此の第三の戰爭は殆ど絕對に無かつた代りに、饑饉は勿論、疫病も亦屢〻且つ大規模に行はれたのである。德川將軍十五代の間に、天にも地にも大切に大切なる保護を百五十パーセントに實行した德川將軍其者が、二人又は三人まで疫病で斃れて居ると傳へら

れ、七代將軍家繼の如きは其の悲慘なる犧牲であつた。茲に述べた第四の減民政策は、卽ち人口政策の第一として擧げられるのである。

減民政策は先見的の考慮の働きの乏しいのから、較〻乏しくないのに及ぶ順序で列べると、一に間引、二に墮胎、三に避姙である。間引は、我國では德川時代に各地方に隨分行はれたが、佛敎殊に眞宗の盛んな所では此の惡俗が大分矯正せられた、併し其の效果は消極に止つた。儒者の政治も亦幾分か矯正をやつたが、矢張姑息に止つた。當時歐米に見るやうな墮胎も亦頗るあつたが、避姙が多く行はれたといふ事實は餘り聞えない。併し人間が小悧巧になると、必ず所謂先見的考慮が進んで、必ず此方へと下り行くのである。全體減民政策は、有形的なる生活物資と、貴き人間の數卽ち人口の發展とが、相鬪ふに於いて、全然人が物に降參し、人を以て物に屈するもので、凡そ有り得べき人口政策の一番劣惡初等なるものである。然るに尙ほ今日盛んに之を以て社會經營上の人口政策の第一であるとして、所謂新マルサス主義、然も其の名は一種の優生主義と僭稱する所の宣傳運動、暗默實行の行はれるのは、實に優生學が聞いたら、呆れを通り越して泣いて居る事に相違ない。

第二は移民政策である。生活物資の制限は、國內では之を免るゝ事は出來ないが、折角此世に生れて來た我が民族の頑是なきいたいけの子供を闇から闇へ葬り去るに忍びないといふ考から、せめて之を他國社會のお情けに委棄し、唯だ其の生存だけが續き、生命だけを完うし得ればよいといふ事に腐心する方策が、卽ち此の移民政策である。恰も貧しい家で子澤山で困る事を救ふに貰人を探すやうなもので、一たび二十圓なり三十圓なり附けて呉れてやつた以上は、それが育つと育たないとは全く貰人の掌中に存する、幸によく育つたにした所で、何等生れた家の繁榮を助けるものでない、唯だ貰人の家を賑はすだけである。加之斯る貰人には、よく「千駄谷の貰子殺しの鬼婆」抔と新聞種になる者が澤山あるので、甚しきは軍人の上長官の未亡人が、此の鬼婆であつた抔といふ新聞種さへ偶まにはある。米國が日本移民に殘酷だとか、濠洲が嚴重なる試驗を設けて日本移民を拒絕するとか言うて、泣いたり吠えたりする經綸家があるのは、畢竟是等の人々が餘りに金持であつたり、富貴歡樂に陶醉して世の中の世智辛い味を、或は嘗て經驗せず、或は昔經驗しても、長生して老人にでもなると、丸で忘れてしまうて居るといふ爲めであらう。

全體移民政策は減民政策との距離が僅に一歩だけ進歩したに過ぎない、庸暗愚劣なる人口政策である。さればこそ獨逸の如きは夙に移民は次第々々に減少しなければならぬといふ國策を確立して、主として工業の發達に成功すると共に、又移民を減少するに成功したのである。今一八九五年と一九〇七年と十二ヶ年間に右の成功を數字に現れたる所で見ると、獨逸工業の發達から、農林業者は全國民衆百分の三五・八より二八・六に減り、製造及び鑛山業者は三五・一より四二・五に進み、商業輸出入業者は九・九より一三・三に進んだ。それで他の一方の移民の減少振りを見ると、一八九三年には人口一萬に付て一七・六であつたのが、一九〇三年には六・二に、一九一三年には三・九に減少して居る。是は米國ウエスレー大學教授ロバルト・ファイフ君の著した『二大戰爭間の獨逸帝國』から一寸引用したが、尙ほ此の著者が申して居る爾の國の天職は科學、文學、及び哲學にして、統治は斷じて其の關與すべき所にあらず、爾の子女の生るゝこと、爾の國の收容力に超過せば、彼等の性能をして他國の國旗の下に活動せしめよ、彼等の成功は唯だ母國の國語及び文化を弊履の如く棄去ることに依てのみ達せらるべし――嗚呼、苟も獨立自尊の志を蓄ふる國民、何人か能く斯くの如きの言を聽容するに堪へんや」洵に是は尤もなる言葉で、我國民の或者、事に依ると大多數に向つて、確に頂門の一針である。移民政策を以て我國の人口問題解決の中心政策と做し、其の圓滑なる成功の爲めに「人種的差別待遇の撤廢は此上ない國家の要務である」と高く唱へるが如きは、聊か思慮淺いといふ謗りは免れまい。假りに之が成功して見た所で、得る所は減民政策の脱却、移民の送金、唯だ是丈である。獨逸の經綸方策に較べて、餘りにも低劣なる、出掛けた涙も引込むやうな事柄である。

第三は植民政策である、他國の國旗の下に纔に生命だけを續けたいといふ情ない狀態に滿足せず、自國の國旗の下に海外發展を實現しやうとするのが、卽ち人口政策の第三たる植民政策である。此の政策の實現は、世界列國の間に植民事業の割込に着手するの後先で、極めて難易の差等がある。移民政策は全く入國を許容する他國の恩惠に依て其の成否を決するのであるから、移民政策國の態度は卑下、融和、謙讓、甚しきは迎合阿諛までして掛るのが常である。之に反して植民政策は、殊に後進植民政策國に於いては、世界の著名なる土地は、皆な既に先進國が占據し

經營する所であるから、纔に瘠せたる土地、惡い土地を得て之を開拓しやうとしても、彼の先進國共は之に對してすらも其の要求を讓つて吳れないから、後進植民國の態度は勢ひ必ず奮鬪的攻勢的たらざるを得ぬ。移民政策と植民政策とが、國の態度に及ぼす差別、隔りの大なるは最も注意に値する事である。此事は亦直ちに對外的の德教、卽ち教育に於ける德目、隨つて國民教育に大影響大關係を及ぼす事であり、一國が自國の向つて進むべき信念の內容理想の充實、卽ち國是を考定するに於いて、極めて重きを措くべき所であるのである。

人口政策の第四は大國政策である。大國政策は大國の政策ではなく、國を大にする事に依て、人口問題を解決せんとするの政策である。植民政策を實行し、實績を擧げんが爲めには幾多の困難を伴ひ、且つ好意なき列國から幾多の讒誣中傷の危險を冒さねばならぬ。それでも尙ほ此の方面に對する甚しき後進國に取つては、其の出來るや否やが機會の上から甚だ疑はしい、そこで此の大國政策が必要となつて來る。乃ち國社會そのものを大にする事に依て、迫り來りつゝある人口問題に對應せんとする策が大國政策である。是に二通りある。

第一は向外大國政策で、是は正理公道に準據して領土を擴張し、就中陸續き又は海續きの地域を開拓して、出來るだけ速に之を自國の內地の部分と做し、卽ち其國を大にする事に依る人口政策である。其の手續の主なるものが二通りある、一つは購買で、二つは併合である。購買は他國の植民地を買入れて以て領土を擴張するもの、併合は彼我兩國の合理的協定に依て併合を成遂げ、以て大國を拵へる事である。米國が佛蘭西から一八〇三年、七百二十萬弗でルイジアナの大植民地を買入れ、更に一八六七年七百萬弗で露西亞からアラスカを買入れ、獨逸が一八九九年、千六百萬麻克卽ち八百萬圓足らずで、西班牙から今の我が委任統治區域となつて居るマリアナ群島を買入れた事が、數多い購買政策の二三の實例である。之に對して如何なる國も、正理に違ひ公道に反すると非難したものは無い。

大國政策の第二類は向內大國政策である。是は領土に何の增減なく、力、殊に智力の向上並に其の實用を以て、國が備へて居る生活物資を發達し、生產し、左樣にして國內に人口增殖を實現する政策である。此の手續に又內地植民、及び家內植民の二通りがある。

工業並に商業の發達は、都市に於ける人口の增殖を致す、是は固より人口政策上慶ぶべき一歩である。併し之が爲めに村落人口が衰微するのは、一つに直接に生活物資の減少を來たすといふ弊を伴ひ、二つには尙ほ人口增殖を遂げ得る餘地を減失するの弊を來たすが爲めに、都市が繁榮する事に於いて成功したる幾多の國は、更に村落の人口增殖を圖る事になる、それが內地移民の第二歩で、普通は之を內地植民の本部のやうに言ひ囃して居る。是は洵に必要なる處置であるが、格別今に於いて世界の學者識者の間に珍らしくも新らしくもない事である。然るに第二の家內植民は左程學者識者に依て聲を揚げられて居らぬが、有識なる政治家に依て率ゐられる國は、近時底力のある實行を致しつゝある事である。

今、一家五口を支へるに必要なる生活物資、其他の必要物件を以て經濟の能率を昂める事に依て、七口を支へて行くといふ行方が卽ち家內植民である。社會の單位たる家といふものの、實質的增大を致すは是れ實に最內的大國政策で、何等國際の折衝に累せらるゝことなくして出來る、大國政策の實現は、之を措て他に方法は無い。所謂臥薪嘗膽、古い支那の言葉で言へば、十年生聚の、國運の重大なる地步に達して居る國が國運の隆興を策するには、最も此の家內植民政策を夙夜に努めて懈らざる事を要する。所で此事は、社會の單位たる家そのものと直關し直接するが爲めに、主として婦人の任務と功績とに歸せらるべきものである。そこで國是から割出す眞面目なる敎育、其中の女子敎育は、必ず之を根柢として進まなければならぬのである。例へば獨逸普魯西の一九〇五年の女子敎育令改革が、從來の學齡以上十ケ年の高等女學校の上に、更に女子高等學校（フラウエンリッヒェウム）と相並んで良妻學校（フラウエンシュウレ）を設ける事にしたのは、正に隱約の間に底力ある此の經綸方策を實現するに至つたのである。

抑も人口問題が、物に對して人の全然屈服する事を以て解決せられ、相對峙する競爭列國に較べて、日に月に落伍の地位に沈み行くを以て甘んずべしとするならば、言ふことはない。苟も活潑々地、剛健不屈、己れを以て他に下らず、人を以て物の奴隷とならざる、抱負あり自任ある國民たる以上、國は必ず滅民政策は勿論、移民政策を以て甘んずべきでない。必ず內には常住に向內大國政策を執り、外には機會の乏しい向外大國政策に依る、殊に購買政策並に困難なる植民政策をも執れるだ

け執つて進むべきものである。」四種の人口政策の段階は、是れ經世家の張膽明目を要する所である。

然るに斯く大切なる領土に關する問題に對して、苟も或國が眞面目なる考慮を拂ふ事に對し、直ちに嗤ふべく恥づべき、國際的嫉妬の陋劣なる心情から出て來る陋劣千萬なる言葉がある、其の言葉は「領土的野心」といふのである。若しも此の嫉妬が、更に後進、更に低級、若輩なる國から出るならば、まだ幾分恕すべき所もあるが、概して遙に此點に於いて飽滿の狀態に達したる先進國から、後進進取の國に向うて振り掛けられて來るのである。全體、現代文明と云ひ、殊に現代文明國抔云うても、悠久なる社會進化の實理的尺度から見れば、直ちに買被るべきものではないが、餘りに見え透いたる愚劣なる文句は、實理實學の立場から、聊か三寸の筆を以て之に膺懲を加へる事が必要である、仍て稍〻大人氣ないやうであるが、茲に一言を述べて置く。男女は人倫の大綱である、食物は人生の大事である。然るに配偶者を欲するを以て直ちに「婚姻的野心」と指斥し、食物を攝らんとする者に對して、直ちに「食物的野心」と指斥し、此れより食物を奪ひ、此れより配偶者を奪ふ事が、人間として許容せらるべき事であるか、否、斷じて然らずである。配偶者を欲して亂倫の行爲を做し、食物を欲して他人の田畑果樹園より食物を盜み食ふの擯斥すべきは、是れ其の正理公道に違ふ所の野心的行爲たるに在る。食物を欲し、配偶者を求むる事が、何んで一概に擯斥すべき事であらうぞ。如何なる木ッ葉國家學者でも、如何なる青二才政治學者でも、國家には少くとも人口と領土との二つの大要素がなければならぬと言うて居る。此の領土に關して關心を持ち、正理公道の許す範圍に於いて、飽くまで領土の維持は勿論擴張を圖る事に對して、直ちに「領土的野心」として、之を指斥する國々の醜陋にして沒理なるは勿論、斯く讒誣、誹謗せられて阿容々々と自國の眞面目なる努力を撤回し、若くは之に對して恐る〳〵震聲で陳疏辯解するが如き陋狀醜態は、所詮此の貴い人類社會、此の人類に於て光を增しつゝある所の地球上に國を樹てて存立するだけの貴い資格を有するものではないのである。「領土的野心」是は「領土」といふ言葉と「野心」といふ言葉との二つから組立つて居る、領土を欲求する事は決して野心ではない。「野心」と「領土欲求」は全く別の事で「領土欲求」の外に「野心」といふ事があるのである、一切の領土欲求を野心と見做すことは斷

じて許すべからざる虚僞公認である。

然るに現今の世界の狀態を見ると、領土の分配は各國に對して著しく不平等である。今各國の領土を、各國の人口で割ると、各國人一人に付幾許の持分が與へられて居るかが出て來る。日本人一人の持分は二四二二坪、七反四畝二十二歩。獨逸人は二二一三坪、七反三畝二十三歩。支那人は七九八六坪、二町六反六畝六歩。伊太利人は一萬八五九一坪、六町一反九畝二十一歩。米人は二萬三三八四坪、七町七反九畝十四歩。英人は二萬八一四三坪、九町三反八畝三歩。露西亞人は四萬八千坪、十六町歩の持分である。日本人に對して、支那人は三倍强、西班牙人は三倍半、和蘭人は四倍半、土耳古人は五倍强、暹羅人は六倍、伊太利人は七倍半、米人は九倍半、英人は十一倍强、佛國人は十五倍弱、墨西哥人は十八倍弱、露西亞人は十九倍半、智利人は二十三倍弱、ブラジル人は二十九倍强、亞爾然丁人は三十四倍弱の持分を割り當てられて居る。

此の不平等なる實情に對して、狹隘なる領土の割當しか與へられて居らぬといふ現情に於ける若干の國々は、他の飽滿狀態に於ける國々に較べて、天理の上からしても、當然正理公道に依る領土の擴張を熱烈に希圖すべき權利と云ふよりも、寧ろ義務があると云はねばならぬ。免れて恥づる事を知らざる現代文明、若くは現代文明國の、發作的醜劣沒理なる言動に對して、檢討又は批判の眼を光らしてゐるといふ事は、是れ直ちにスペンサー翁がよくも下したる「野蠻來復」の危機から世界人類の墮落を防ぐが爲めに、世界人類の神聖なる進歩向上、堅實なる文明の戰士たる民族乃至識者が執るべき、光榮ある、而して重要なる責務である。

六　國を通しての世界進展

世界の卽ち地球の供給する生活物資には限りがある。假りに生活物資の利用方法を現在の儘であるとして、現在調べ上げたる此の限りある地球上の生活物資全體で、どれだけの人口を世界が收容し得るかの問題は、夙に二十年前に講者等の同僚、白耳義のアンスチチュ・ソルヴエー研究所のワックスワイラー君が、研究所同人と共に調査研究の成績を公けにして居る。それは固より生計の程度に依る事で、支那人の生計程度ならば二百二十四億、稍ゝ程度が昂つて獨逸人の程度ならば五

十六億、更に昂つて米國人の程度ならば、唯だ二十三億を收容し得るに過ぎぬといふのが右調査の結果である。固より地球が具有する生活物資として、今まで知らざる物が更に知られて來るとか、更に同じ生活物資の原料も之を利用する事が大に進んで、今までの一人前で五人前を賄ふ事が出來るやうになれば、それは又それに相應するだけ話が進んで來るが、何れにしても地球に限りあるに相伴うて、人口にも限りあるといふ結論には間違は無い。偖て暫く右の報告を材料として、大雜把に是から少し計算を進めて見る。乃ち大體世界の人口の極限を百億として、當時の世界人口の總數十七億五千萬から、假りに是も大雜把に一年に人口增加の率を百人に付一人として、何ヶ年間で世界の人口の收容の極限に達するかといふ計算をして見ると、僅に百七十五ヶ年と二ヶ月といふ數が出て來る。其後世界戰亂で世界總人口の約そ百分の一許りが、僅に四、五年の間に減つてしまうたとふやうな頓挫的事變も勃發したから、今後と雖も若干の波瀾は免れないが、實に一般に素人の考へるよりは、遙に世界は人口收容の極限に向つて急ぎつゝあるものである。

今日まだ、世界に於いては、開墾すべき幾多の土地は殘されて居る。唯だそれを前節に掲げたる數字談が示す通りに、若干の民族や若干の國民が、必ずしも正理に反し公道に悖るとは言はないが、事實の上に於いて之を蹂躪し、之を占據して、他の逼迫せる民族を拒絶するといふ狀態に在るから、世界が大分領土や物資の上で緊迫して居るやうに見ゆるが、事實はまだ〳〵百億に對する十七八億で、餘地が澤山ある今日にも拘らず、國際競爭は實に劇しいのである。諺にも「金と何やらは溜れば溜る程汚い」といふやうに、配偶者よりも食物よりも、更に熱烈なる要求の根據を有する他の民族の領土的要求に對して、妨害、壓迫、罵詈、讒謗、排斥、嘲笑を浴せ掛けるの最も甚しいものは、貧國に非ずして、富國であり緊迫國に非ずして飽滿國であるといふ、此の低劣なる國際競爭が現に激しく行はれて居る。此の活きたる事實を見るならば、若しも他日、右の如く、世界には最早一人の人口增加の餘地が無く、甲國一人を增さんとするには、必ず乙丙丁列國の中から一人を減らさなければならぬといふ時機に際して、如何に國際競爭、民族間の生存競爭が深刻慘烈に赴くべきかは、實に想像にも及ばざる所である。と申さなければならぬ。講者は此の時代に名づくるに、絶對國際競爭の時代といふ名稱を以てした。而して絶對國際競爭の時

期に向つて世界は現に世紀に年に月に日に否な時々刻々に急ぎつゝあるのである。尤も是から先きは極く精密なる各論となるが、端折つて結論だけ申せば、圓錐曲線に於ける双曲線の漸近線に當るのが此の絶對國際競爭で、双曲線そのものが完全に漸近線と合するといふのではない。故に世界は絶對國際競爭の時機が來ると斷定するよりも、世界は常住不斷に刻一刻と絶對國際競爭の時機に向つて急ぎつゝあるといふに止めて置くことが、學理上最も安全であり、又聊かの懸値なく此事は言ひ得るのである。然らば則ち後進國人口問題の緊迫國、即ち領土問題の緊迫國たるものは、殊に一刻の油斷もなく、撓みもなく、十二分に緊張せる精神を以て、此の問題の解決並に實行に向つて、熱心と努力とを費さねばならぬのである。

全體、個人だけで人間が立派に進み行けると思ふが如きは、洵に淺陋低劣なる夢である。さればこそ優生學といふよりも、一層適實なる學術上の名稱として、民族衛生學といふ、一寸落付の惡るい言葉さへも案出せられ、實用せられつゝあるのである。假りに極めて小さく個人の立場からしても、人は國を通じて世界に生存し、進展する事が必至の運命であり、國を通ずに非ざれば、進展は愚か、個人の生存すらも絶對に不可能であるのである。茲に人口問題に觸れ、殊に世界將來の運命にまで着眼點を進めて、右の如く說き去り說き來るのも、此の事由から「優生學と社會生活」の問題上、當然且つ必然の事理が根柢に於いて存して居るからである。

中篇

後天方面＝優境

第一章　家及び家庭

「優生學と社會生活」の題目の下に攻究を遂げるに際し、先天方面即ち優生方面は、上篇四章に於いて大體述べ了つた、次いで來るは後天方面即ち優境の方面である。茲に先天後天と云ふのは、個人の生存に對して、其の生活を始める以前と、其の生活を始める以後とに就てそれ〴〵名づけた言葉で、生れる前に既に優等なる素質を備へるべき、各種の要件規定の研究に任ずるのが狹い意義の優生學で、生れた以後に更に其の優等を續け、乃至更に優等を進めるが爲めに、幾許りの要件規定を要するかといふ方面の研究が即ち優境學である。併し生活、生命、乃至生存は畢竟繼續的の事柄であるから、先天・後天は重要なる境界に依て分たれたる二つの部分であるとは云へ、要するに一つの事柄の繼續たるに過ぎぬといふ點をハッキリと見究めると、此の優生と優境とを全く別の物として取扱ふのは、孰れも不完全たるを免れぬ。其の立場から、優生學を寧ろ更に擴めて、優境學も亦優生學の中に入る、優生

學は矢張此の廣い意味で用ゐべきであるといふのが、洵に理由に富んだる見解である。故に今是丈けの事を心得て、其の廣き「優生學と社會生活」との關係の研究に於ける一つの部門として、此の中篇、後天優境方面の考察に進むのである。是は小より大に、個人としては近きより遠きに、又時の點からすると、後天の初めに近い所から遠い所へといふ、時の關係で順序を立てて、先づ家庭から、次に學校、終りに世間、此の三段を各一章に充てて述ぶる事にしやう。

一　家の五職能

表題に「家及び家庭」としてある。兎角近頃の世人――西洋人でも東洋人でも――は、最早二十世紀も三十年以上も經つて居る今日に拘らず、第十九世紀の中古なる個人本位の思想の惰性的支配からまだ全然脱却せざる悲哀として、家庭をば見るが家を忘れる。家庭といふものは家の輪切りの切口であり、家は家庭を前後に延ばしたる立體である。家庭は平面であり、家は更に之に長さ、又は厚さ、又は深さといふ第三廣袤を加へたる立體であるのである。家あつての家庭で、家庭あつての家では、ない。家庭を平面的に取扱つて滿足するのでは、決して家庭そのものの認識や了解が充分に出來ぬ。家を了解するに於いて、始めて家庭の認識も完全に行くのである。恰も國を諒解せんと欲して國の歴史を忘れ、國體を忘れると同樣、例へば國語の改良でもしやうといふ場合に、現在鼻先の便利不便利位ゐを判斷の基礎の全部と做して、國體、國史、國學、國運、總て是等の實體的事項を忘れると同罪であり、社會といふものを、極めて淺薄に平面的なるものと誤認すると同一迷想から來たる憫れむべき果實である。

舊き由緒を有し、遠き將來を有する所の家といふ社會の特定の一時期、例へば昭和何年何月何日に於ける其家が卽ち家庭であるのである。昭和何年何月何日といふ菜切庖丁で、長さ一尺も二尺もある所の家といふ大根を輪切りにした其の切口が家庭であるといふのは、此の眼前の事實を云ふのである。併し半開若くは野蠻時代に彷徨する淺薄なる頭腦や思想の持主は、自分が其の輪切りの中に居り、大根を俎の上へ載せて居る、其の俎に向うて居る時のやうに、輪切りの外に立ち得ぬものであるから、兎角此の眼前直下の事實を忘れるのである。斯る耻づべき野蠻

半開から速に猛省し、自覺し、脱却する事を要する。斯樣の手近な事さへ解らない、連中は、兎角個人々々といふ事を高調して、社會殊に國家社會、卽ち國の單位は、家ではなくて個人だといふやうに言ふ、是が亦途轍もない間違つたる考で、所謂社會單位の問題に對して、先づ茲に斷案を掲げて其の蒙を啓くならば、

社會の單位は家であつて個人ではない、是は發達せる社會の一切に通ずる實事實理である、卽ち眞實なる事理である。若しもそれが適切に左樣でないやうに一寸見ゆる事があるならば、是は其の社會そのものの發達が不充分であるか、又は社會そのものの成立が不完全であるかから來る所の缺點病弊である。社會が進めば進むほど家が廢れて個人が盛になると云ふは僻說である。社會が進むに連れて個人は益〻進んだる家の一成員として社會の成分となるのである。此事は社會の成立に關する綿密にして周到なる實理研究の結果であるが、こゝには說明として之に最も直接に關係する事理の若干を述べるに止めて置く。それは、家の職能の重要なるものが五つある、此の家の職能だけから考へても、右の斷定に達すべき充分なる根柢あることを示し、殊に本著の主たる目的として、優境的價値が家及び家庭に於いて、如何に充分に藏せられて居るかを示すが爲めに役立つのである。

第一に世代繼續といふことが、家の職能として恒久に存立して居る。凡そ世代繼續の能力の無い種族は斷滅の外ない、斯樣な種族から成立つ社會は、假令其の存立が續くとしても、社會成分たる個人々々の間に、時代を貫通しての自然關係の、珠數の糸卽ち統を缺いて居るから、社會としての存立は極めて薄弱にして、バラ〳〵になることを免れない。所で世代繼續の自然的基礎は固より生殖がそれで、其の行はるゝ機關は家である。進歩せる世代繼續は、必ず發達せる體制を備ふる家において行はれねばならぬ。是が世代繼續に對する神聖觀、適切に言へば敬虔の念の要求する所で、併せて又是等の觀念の深く且つ厚きを致す所以である。社會が發達すればする程、家は益〻此の神聖なる世代繼續の職能の爲めに重要が加はり進むものである。

第二に稚兒養育は亦家の職能として恒久に存立する。如何なる醫學的諸學科の實理からしても、稚兒養育は家に於いて行はるゝことが、最も理想的で最も完全である。所で近代の所謂文明社會は、家を持たない不幸なる孤兒の養育の爲めに、

育兒院・孤兒院といふやうな特殊の機關を設けて居る。是は如何にも結構なことであるが、併し是は救濟事業で改善事業でないといふことを注意せねばならぬ。救濟事業といふものは、所謂文明社會の缺陷に對して、之を補ひ修繕する役をするに過ぎぬものである。改善事業といふものは、之に反してそれをやればやる程積極的に社會が進み行く所の事業である。改善事業は今まで在る制度機關の上に、更に加へて益ゝ實施し行くべきであるが、救濟事業は之に反して、今まであるものを棄ててやるべきでない。我々の身體が無事であつても食物榮養は攝つて行かねばならぬが、何等手足に病が無いのに、手を切り足を捨てるには及ばぬ。併し足に爆裂彈を受け、手に危險なる腫物を生じた場合には、足を切り手を切斷するも亦一つの醫療である。改善事業は三度の食事を攝ることで、救濟事業は手足の切斷である。家を捨てて養育院に子供を託するのは、何事も無いのに健全なる手や足を切斷すると同樣である。一口に社會事業と云へば、救濟事業も改善事業も含むといふことに異議が無いとしても、其の二大別たる救濟事業を改善事業と穿き違へてはならぬ。兎角新規を趁うて趨り行く所の輕薄連は、救濟事業も改善事業もごつたにして、何かしら新規らしい事をやつて得意で居る、嗤ふべきの至である。

第三、更に教化單位として家の重要性は恒久に存立する。家は立體的存在である、世の機運の進むに從つて、家は歷史あり、制度あり、家風・家道といふ社會性の備はつて居る所の儼然たる一つの小社會で、其の教化的機能は實に大である。家の成員殊に稚兒・幼兒に對する教化の本據は實に家に在る。學校や世間の教化に接する前に、初めて此の世の中の風に當り、卽ち生れながらの白紙に繪を描かれるのが實に家に在る。卽ち家の教化は最も本始的であり、基礎的であり、其上又集約的であることも注意せねばならぬ。小學校の教場では七十人の生徒を一人の女訓導が受持つが、家の母は精々二三人受持てば關の山である。且又成長せる一家の人々も、其の相互の教化的効果は中々盛んなものである。夫婦が數十年連添ふと段々に相互に肖て來る。妻は夫の書風に似て來、夫は飲食等に於いて妻の嗜好に接近して來るといふが如きは、極めて屢ゝ見らるる所の事實である。斯くの如く教化の職能の爲め家の重要なることは、社會が進む程增大して來るのである。世の中には、無識なる父母から教化されるよりは、孤兒院に入つた方がよい、と言ふ者が

ある、成程「無識なる」といふ特別の條件を加へれば、差引き或は左樣になることもあらう。併し父母は必ず無識であるといふことでない以上、此の斷定には何等の根據が無い。「文明が進めば父母は彌〻倍〻無識になる」と斷定する勇氣は、此の連中にもよもやあるまい。文明が進めば、孤兒の爲に孤兒院を造るよりも、更に急迫せる必要を以て、父母の無識を有識ならしむる努力や機關に向つて急がねばならぬ。

第四に經濟單位としての家の職能は亦恒久に存在する。所謂變的なる現代文明、殊に歐米を首め現代の爛れたる大都會の生活に於いては、獨身者が彌〻倍〻殖えて行き、食事を家に於いてせざる一種の浮浪生活が殖えつゝある。斯くの如き變的なる現象に眩惑して「家の經濟單位としての價値は段々減つて行く」と妄斷するは憫れむべきである。獨逸の國會議員オエゲン・リヒター君が、先般『社會主義國の將來』と題して小冊子を書いた。それには伯林の市で千九百何年の七月一日から社會主義が徹底的に實施せられ、先づ其の晝飯から各市民は銘々の家で食事することを絶對に禁ぜられて、市內各區、數十ヶ所に設けられたる公衆食堂で食事を攝るべく嚴命された。偖て其處へ行つて見ると午後五時になつても、まだソップにも有付かぬといふ混雜狀態から、描寫の筆を起して居る。先づそんなもので、西洋ではパンが村落で共同で燒かれる、恰も我が農村で味噌を數戸共同で煮る――といつても一つの釜で一つの竈で一つの釜を交る〳〵使つて煮るといふだけの話であるが――よりは、大都會の生活になるとパン屋が製造したものを買つて來るといふ狀態から類推して、我國でも五人や七人の家庭が一々飯を炊くのは愚だ、飯は飯屋が炊いて、三食毎に配達したら一層都合が好いではないか、といふ悧巧めきたる愚論も聞ゆるが、假にそれはそれになるとした所で、右オエゲン・リヒター君の描寫に於けるが如く、消費といふ經濟上の重要行爲が、家庭を撤廢して行はれる方が文明の進歩である杯は、洵に生活そのものに對して何等の反省と趣味との無い、醉生無死の阿呆の文句である。加之、經濟學の問題が生產のみを重んじた時代から、次第に分配や消費を層一層重く視ることが進めば進む程、經濟單位としての家の重要性は彌〻倍〻進み行くのである。

第五點は男女の分業協力は、家の發達に於いて完全するのである。總て社會の働きは分業協力が條件で、分業協力の最も避くべからざる且つ大切なるは、天賦の

性能の差等に依る所の分業協力であり、而して斯る差等の最も顯著で且つ拔け難き固さを以つて居るのは、實に男女兩性の差別である。さればこそ原始社會以來、男女兩性間の分業が夙に著しく起つた次第である。世の中の氣運が發達すると、心的能力の幾分は男女の間に之を近接せしめることは出來るが、大體に於ける賦性の差別、及び之に基づく所の業務上の差別は彌ゝ倍ゝ發達を要する。所で此の男女の分業協力の最も重要なる機關は家である、されば社會が發達すればする程、此點からも亦何時までも家の存立發達が要求せられる。尙ほ此事は今少し男女兩性の點から優生的規範を考察する必要があるから、後の節に於いて改めて觸れる事にしやう。

二　家庭教育の特長

家庭教育の特長とする所の第一は母の教育である。學校でも世間でも、母からの教育、又は本質的にそれに似た教育は絕對にあり得ない。父の教育となると、學校又は世間にも之に類するものはいくらもある。が、母の教育だけは全く教育上の價値、殊に其の性質に於いて家庭と離るべからざる特色を有つて居る。

第二は家風の精神的教化である。家風に依ては內容の良い惡い、其他樣々の品等がある、それだけ家風の教育が重要性を增すのである。萬一甚だ好ましからぬ家風の家庭であるならば、之に對する救濟方策は是非とも講ぜられねばならぬ。併し特に好ましいといふ程でなくとも、別段好ましからずといふ程でもない家風であるならば、人間の情緖、情操、隨つて生活上の深く且つ鞏き根柢を養成するといふ點に於いて、家風の教育は到底世間は勿論、學校の企て及ぶ所ではないのである。否な、學校に入學してから校風の教化を受け、國家社會卽ち國に處して、國風、國體、國粹の教化を受くる事の感受性の根柢は、實に家庭教育に於ける家風教化に於いて存するものである。此點は兎角深味の乏しい西洋各國に發達せる西洋傳來の教育、學等では、餘り深く注意せられぬ所であるが、實は甚だ大切なる事であり、又其の實用效用は、國體の精華を以て教育の淵源と做す所の我が日本に於いては、極めて大なるものであるのである。

第三は第二に聯關せる家史の教育である。典籍の上で何人も能く存して居る

大伴家持が兒を戒むるの歌がある、我が大友の家は古より武を以て皇室に仕へまつる家であるから、「山行かば草むすかばね、海行かば水づくかばね、大君のへにこそ死なめ、長閑には死なじ」といふやうに、家史を根柢として、一家の青年、少年、幼兒、嬰兒を教育する、此類の教育は實に家庭教育の一大特長として、茲に擧げることを要するのである。斯樣なる特長を尊重し、此の特色の能率功績を擧げる家庭教育と、之に反し若くは此の特色的價値の乏しいものとの間に、長い間に自然淘汰が行はれる事が、亦一國社會の社會的優境、隨つて社會的優生の良好なる結果を致す手續の一つともなるのである。

第四は既に述べ來たやうな家庭教育の集約性である。學校は教員室に二十人の校長訓導が居らるゝに對し、全校には八百から千人の生徒が居る所であるが、家庭は父と母、其外に多く兄、姉、又場合に依て祖父母もあれば、相當の品性を具へて居る僕婢すらもある、斯樣な譯で、教育者と被教育者との數の關係は學校とは正反對である。加之學校は午前九時から午後三時までといふに對し、家庭は午後三時から翌日の午前九時まで、卽ち一方が六時間であるのに、家庭は其の三倍の十八時間であるといふ。學校では、成程、課目が樣々あるが、家庭には更に學校に無い課目が有る。食事の課目は學校にも少しは有るが、佛蘭西の或る種の學校に於ける半寄宿制度が、晝飯を以て重要なる教課として居ることを除いては、學校で辨當を使ふ事は殆ど何等の教課となつて居らぬ。然るに學校に無い食事課目は、家庭では實に重要千萬なる課目である。寢相を崩してはならぬ所の重要千萬なる睡眠といふ課目、其他洗面、掃除、物品整理、作法の實地演習等、學校に無い重要なる課目が澤山に家庭に備はつて居る。是等、質の上に於いても、量の上に於いても、集約性、徹底性が家庭教育に存して居るといふ事を忘れてはならぬ。隨つて其の良し惡しが、優境的成績に大影響のある事を考へねばならぬ。

第五は愛着性といふ特徵が家庭教育に備はつて居る。勿論我國、我校に對しても愛着性は大にある、併し其の第一着は我が家に對する愛着性から始まるもので、愛着性の基礎本始は實に家庭に存し、此の性の修養陶冶は實に家庭教育の特長であると云はねばならぬ。家庭教育に於いて此の性を養ふ事が、甚だ熟するといふまでに行かぬ場合には、其の幼兒が學校に出で、他日又社會に出ても、兎角立派なる

性格の發展に進むに缺陷がある。といふ譯は、學校にせよ、世間にせよ、人に接するといふ事は拔くべからざる、又缺くべからざる手續である以上、人に接しながら接し方が甚だ淺い、甚しきは接し得ぬといふ事が、全く此の愛着性の涵養陶冶の如何に依るものであるからである。家庭に於ける家族の人々に對し、家庭に於ける種種の有形事物に對し、更に家庭に於ける、殊に遡つて家に存する無形事物に對し、是等が悉く愛着性の對象となり、目的物となり、而して其の延長として更に家庭に對し、殊に家の將來に對して重要なる責任感を養成するに至る、是は家庭教育の最後の、而して最も重要なる特長として擧げられねばならぬ事である。

三　家庭養育の特長

家庭養育の特長に至つては、事柄が更に、有形的であるだけ、茲に縷々として述べる必要は無い。同じ献立でも、下宿屋の賄と家庭の賄とでは、どんなに價値に於いて違ひがあるか、之を引延ばして考へれば、一切の養育に關する家庭の特徴が明瞭するのである。簡單なる一例は、兩親の揃うて居る家庭の幼兒や兒童が小學校へ通學するに際して、其の兩親が留守になる、さうすると慧敏なる小學訓導は其の容子が直ぐ判る、兩親に別れたのでも何でもない、ホンの一時的の留守になつたといふだけで、既に其の幼兒兒童の日常生活の上に、氣分の轉變、即ち一時的性格變態が判然目に付く、といふが如き結果さへ出て來るのである。特長として一々擧げるならば、衣食住各種に關する所の長短得失を首め、娯樂、睡眠、遊戯、運動、其他各種の方面にある次第であるが、餘りに何人にも親しい事實であるから、語數を節約の爲めに此節はこゝに止めて置く。

四　男女の地位關係

家が男女の社會的分業の場所として重要であると申した以上、家及び家庭の優境關係、即ち優生關係を考察するに、此の男女の社會的地位關係、殊に家庭的地位關係の問題は、茲に聊か考察を費されねばならぬ。

男女の社會的地位關係は「男女同權論」といふやうな世俗的粗雜なる名稱で、我國では明治維新後、程ない頃から、大分世間の人氣問題になつたのである。只今でも

婦人雜誌が大層賣行がよいやうに、「婦人」といふ字が附くと、女も之を持囃し、男も亦それ以上に持囃すもので、男女同權論の人氣も亦是と同一なる現象である。今日に至つてすらも世俗的に所謂婦人の地位上進といふやうな、男女同權的の斷案が極めて輕易に、何等の批判も無く受入れられる事が大分流行であるが、少しく學術的考慮を費した者には、判斷が大分それとは違つて居る。一例を先づ擧げるならば、オツトー・ワイニングルの解放婦人週期論といふのがある、此の天才的少壯學者の著述『性と性格』に、解放婦人といふものは約そ五百年を週期として循環するといふ、卽ち西洋紀元第五世紀、十世紀、十五六世紀と、五百年毎に婦人解放論が擡頭し來り、其後は世の中の循環が少しくスピード・アップになつて五百年經ない第十九世紀、第二十世紀といふ、是が婦人解放論の復た廻り來た時である。其の論據として此の學者が申すのは、婦人が餘りに壓付けられると、婦人のみならず男性にも不利益である、要するに社會に不利益であるから、そこで反動として婦人をもう少し好く待遇せねばならぬといふ論が起り、段々それが嵩じて來ると、婦人解放、男女同等、乃至同權といふやうな事になり、更に婦人解放はそれだけに止らずして、段々婦人の勢が猖獗になり、途轍もない我儘、靡爛、終には墮落になると、獨り男に取つて迷惑至極であるのみならず、婦人其者の運命にも甚しく不幸が降つて來る、要するに社會の不幸此上もないといふので、復た婦人を抑へる事が始まる、段々抑へて抑へて抑付ければ、再び前の、餘りに婦人が慘だといふ事になり、それから斯樣にして週期的現象を繰返すのであると、大雜把に言へば斯樣な論であるのである。如何にも教といふものが充分に發達せざる國では、何事も唯だ勢に制せられる、卽ち道理の統制が確かでなく微かな所では、勢ひ勢、卽ち成り行きといふものの支配が其儘行はれるので、西洋社會の如きは正に此の適例であるから、大體に於いて此の少壯天才學者の論究は事實を離れず、又頗る徹底せる考であると申して宜しい。

併し教の基礎は道理であり、道理の基礎は理を究めて理を明かにするに在る、其の事業が卽ち實學である、實學上から見たら、男女の社會的地位は何所に歸着すべきが本當であるか、此の小著に於いて詳しく述べる遑も無く、紙數も固より無い故、茲に極く簡單に結論だけを述べるならば、男女の社會的地位は相當平等に歸着する。隨つて小社會たる、社會單位たる家、又は其の輪切りである家庭は勿論、是に於け

る社會的地位關係も、亦當然相當平等に歸着する。相當平等は相同平等と相ひ對する。茲に三角形の一枚の畑が五十坪ある、是と同じ恰好の三角形で、且つ坪數も五十坪であるならば、此の甲乙二枚の畑が、形と廣さとに關する限りは相同平等である。然るに茲に丙といふ一枚の畑があつて、是は四角でありながら矢張五十坪である、是は甲乙と丙とは形は違ふが、廣さは均しい、卽ち相當平等である。男女の社會的地位は、男は男、女は女で、全く同じではないが、總體の價値品等に於いては等しい、乃ち右の甲乙の畑と丙の畑との關係に較ぶべきものである。男と女がまるで同じ事をやつて居るもの、又はやるべきものではない、男が議員になれば女も議員にならなければならない、男は兵隊に出れば女も兵隊に出なければならない、女が兒を產めば男も兒を產まなければならない、――若し之が行はれるならば、是は卽ち相同平等であるが、決して左樣な事をする必要は無いのである。男女の社會的地位は相當平等に歸着するとはそこの事である。

何故左樣になるかといふと、男性は女性と天分の違ひがある。天が世の中に男性と女性とを生じた、天分が違はぬならば、男と云ひ女と云ふ名詞も無くて濟む筈である。然るに獨り人間のみならず、禽獸にも男性女性がある。斯ういふ點には格別鋭敏であると見えて、西洋の多くの國々には、日月星辰、山川草木にまで男性女性がある、林檎は女性で、梨（ポワール）は男性だ杯といふ所まで徹底して男性女性を區別して居る。此の區別が天然自然本來にある、それを天分、卽ち天の分ちと云ふのである。男女の天分には先天的規定と後天的規定とがある、先天的規定には個人的天分と社會的天分とがあり、個人的天分には生理的天分と心理的天分とがある。此所には生理的天分を一々擧げなくとも、生理的に女と男とは大違ひのものだと言へば澤山であらう。又心理的にも男と女では大分違ふ、概して智的活動に於いては女は稍々早熟で小規模であり、記憶及び想像は女の方が達者であるが、推理、分別は男の方が稍々長じて居る。情の活動は女が強いが、意志の鞏固は男が強い。全體から云ふと理性が一緒に働き、凡そ心的活動、全般の調和の入用な方面は女の方が男より少し短所があり、其の必要の無い方面では女の方が遙に強く且つ盛んな心的活動を呈出する事が稀れでない。偖て是等の個人的天分から、更に社會的天分が出て來る。亭主が車を挽き、山の神が後押しをして坂を上るといふが如きは、必ず